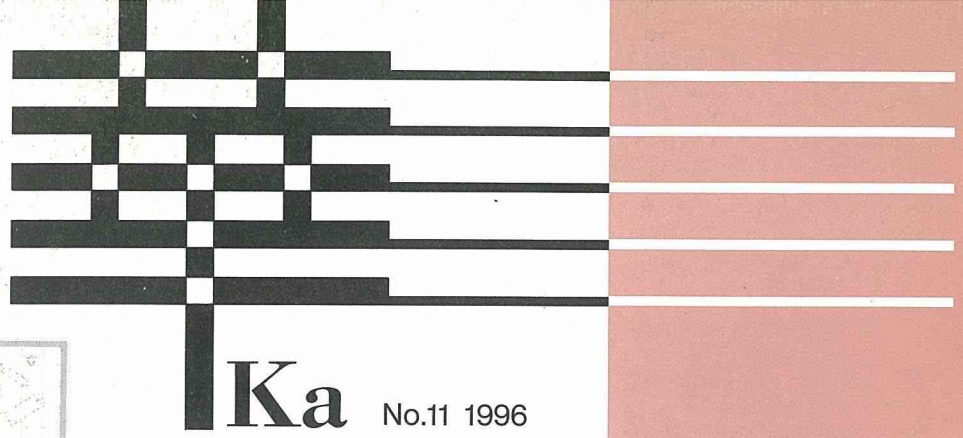


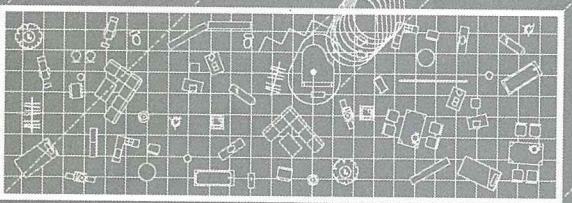
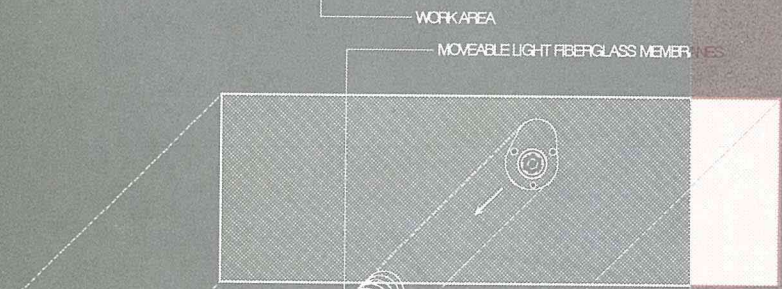
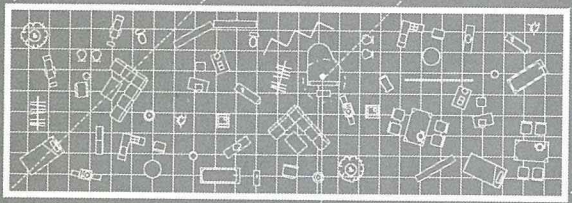
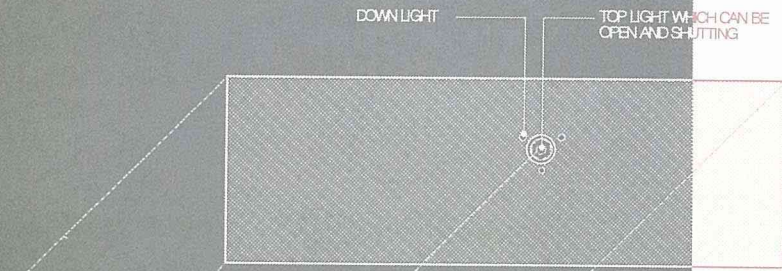
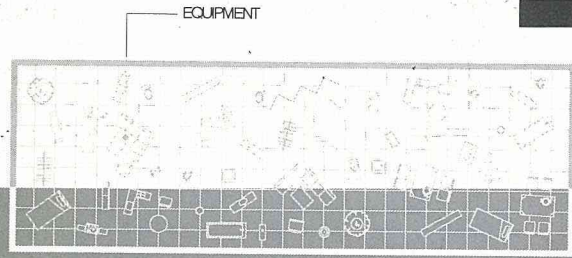
論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 11
発行日 / Pub. date	1996,
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。



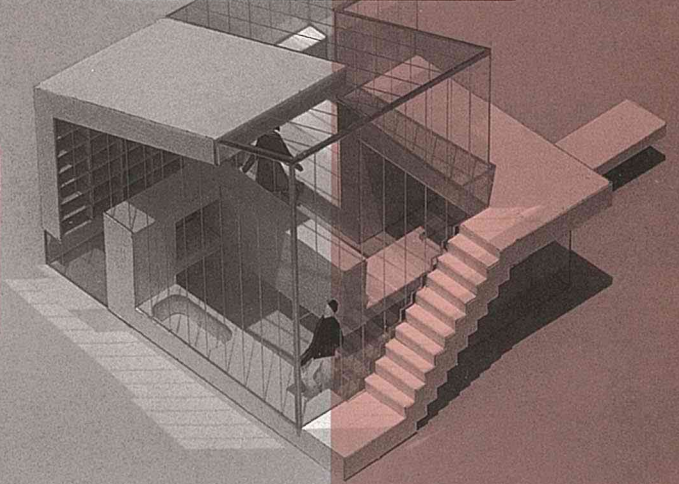
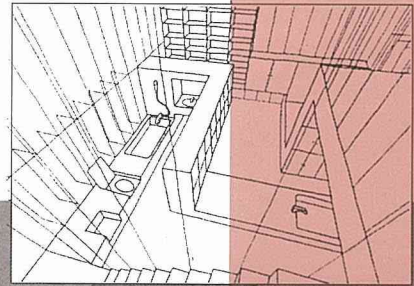
Ka No.11 1996

- 1995年度設計製図第一(2年生)優秀作品より — 2
- 1995年度設計製図第三(3年生)優秀作品より — 8
- 学生コンペ作品紹介 — 22
- OB作品紹介：共用空間の創造 / 清田育男
- みんなリード・ギター / みかんぐみ — 30
- 異文化体験：留学生からのメッセージ — 34
- 特別寄稿：新しい環境建築 / D.ミラー — 36
- ドキュメント：ルイス・カーン巡礼 / 志水英樹 — 38

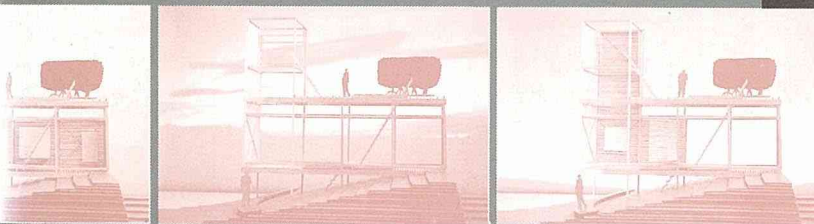


RECOGNIZED AREA

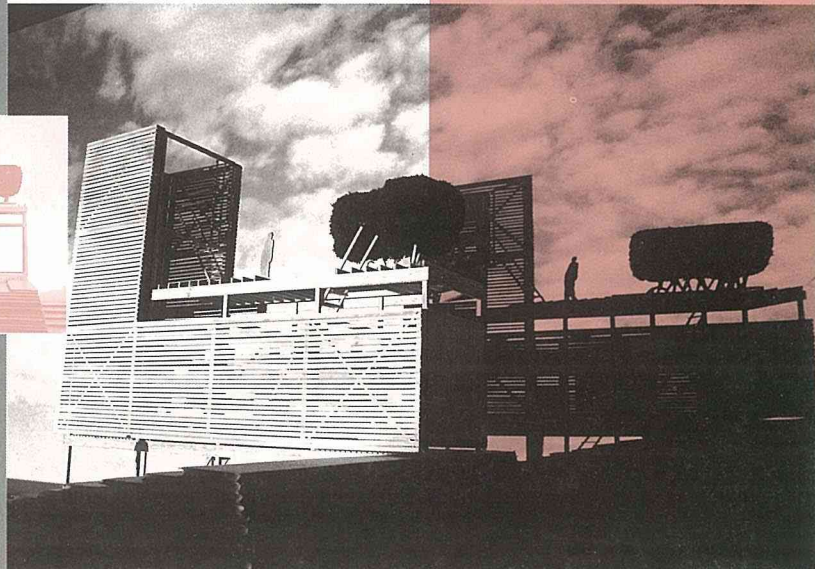
単一性 / 複合性：小林真紀・永井牧



大切な人に贈る小さな小さな家：足立真



空のある住まい：伊藤泰彦・高藤和也



1995年度設計製図第一(2年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work : Spring Semester

木造小住宅

Small Wooden House

講評

教授 仙田 満

本年の住宅課題は、昨年と同様「那須の別荘」である。『華』に優秀作品が発表されると次の年の作品は、どうしてもそれに影響されるところがある。しかし、あるレベルが前の年に提示されるわけで、それ以上の新しい提案もみられることが楽しみだ。

本課題は、建築学科に入って最初の設計となるわけで、完璧なものとは望めないが、アイデアや表現において可能性のあるものがいくつか見いだされた。片流れの屋根とラッパ型の平面形をもつ嶋田麻君の案は、敷地に対するおさまりもよく、また広がりのある内部空間がおもしろい。主寝室や子ども室が小さすぎ、なぜわずかな窓しかないのか疑問であるが、全体の対比において決めたのだろうか。しかしスケールについてはもっと勉強する必要がある。

高橋空也君の案は現実的だ。中庭を配し、平屋で規模、高さ、窓の位置など極めてほどよくデザインされている。

池埜純一郎君の案は、極めて造形的にまとめられている。2つの軸をもった平面構成、そしてそのズレの空間的なおもしろさなど、最初の住宅の作品としてはなかなかの力作である。模型も頑張った。断面図などディテールのには幼稚であるが、これからの成長が期待できる。

伊藤立平君は絵がうまい。図面全体に雰囲気がある。平面をもう少し練って整理する必要がある。

野村陽子君の作品は、スケールのにも配置的にも、好ましい適切さをもっている。内部空間は外形とは異なる軸を入れ、おもしろさを演出している。しかし円形の柵はあまり成功しているとは思えない。この他にもいくつか注目する作品が見受けられたが、迫力という点ではこれらの作品に及ばなかった。

●課題

敷地：自然林の豊富な那須国立自然公園内。
(なるべく自然林を残し、あまり造成はしない)

敷地面積820㎡

法的制限：建蔽率=20%、許容建築面積=164㎡
容積率=30%、許容延床面積=246㎡
(延床面積は150~200㎡程度を目標)

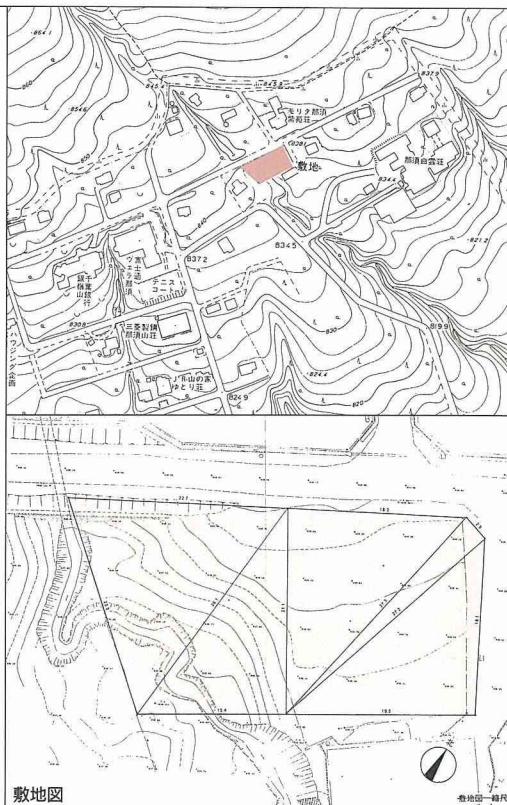
製図目標：(1)住宅イメージの把握
(2)木造住宅の工法的理解
(3)設計コンセプトの立案

家族構成：両親・子供2人(小学生男女)

概要：趣味豊かな40歳前後の芸術家(建築家を含む)のアトリエ(ワークスペース)付きセカンドハウス

●提出図面

- ①設計趣旨 400字以内
 - ②配置図 1:200(周辺環境を含めた配置)
 - ③各階平面図 1:100
 - ④立面図 1:100(周辺環境を含めた主要立面)
 - ⑤炬計図 1:50
 - ⑥模型 1:100
- 以上①~⑥をA1版1枚におさめ、7月19日提出
- ⑦パース 内観・外観各1面
- パースはA1版1枚におさめ、9月4日提出
(注意：図面の切り貼りは認めない)



講評

講師 團 紀彦

これは、2年生になって建築学科に入ってから最初の設計課題としての木造住宅である。敷地は那須の別荘地の中の一區画で、全体は落葉樹の雑木林におおわれ、敷地内に溜沢とそれに向かう傾斜面をもっている。要求されたプログラムは、アーティストとその家族のための週末住宅である。最初の課題であるだけに、案外見慣れたものに縛られていたり、知識不足からくる硬直化が、多くの学生諸君の作品に見受けられた。しかしこのことはまったく気にすることはなく、絶えまざる修練を積むうちに、そうした自己の中からまったく別の新しい自分が解放され、形がでてくるはずである。

ここに選ばれたいくつかの作品は、それぞれに欠点はあるものの、比較的設計上の主張が無理なく建築形態と結びついている点が共通している。池埜純一郎君の作品は詩人のた

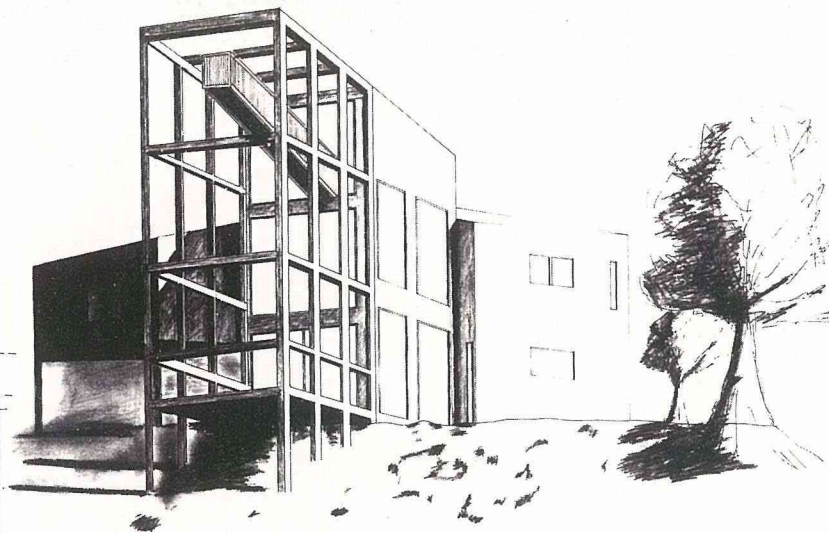
めの家で、生活のためのボリュームと、回遊性のある場を分節化して、それらをオーバーラップさせている。エレメントの高さの設定等の造形処理に問題点は残るものの、全体としては周辺環境にも応答しつつ、変化に富んだ力強い作品である。

嶋田麻さんの作品は、エントランス廻りの平面処理に無理があるが、土地になじんだ造形による大空間を設定したスマートな作品である。高橋空也君は無理のない平面構成によりながら、バランスのとれた中庭と内部の関係を創り出しており、スケール感とディテールに対する感覚を評価できる。野村陽子さんの作品は、円環と内部空間のダイナミックなつながりにもう一工夫ほしかったところだが、なかなかすぐれた解答を示している。伊藤立平君の作品は、平面処理に多少無理があるものの、秀逸な提案で、特にその内観と外観パースには、2年生とは思えない能力を感じさせるものがある。

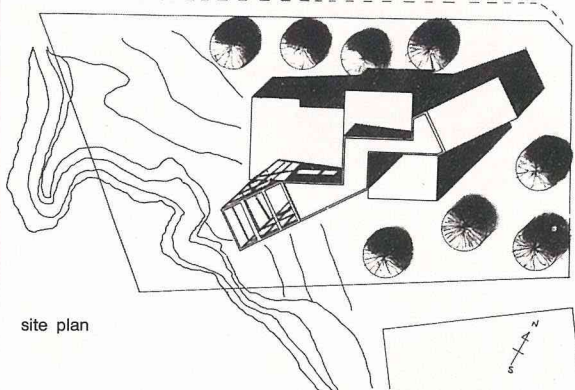
詩人の家

A House for a Poet

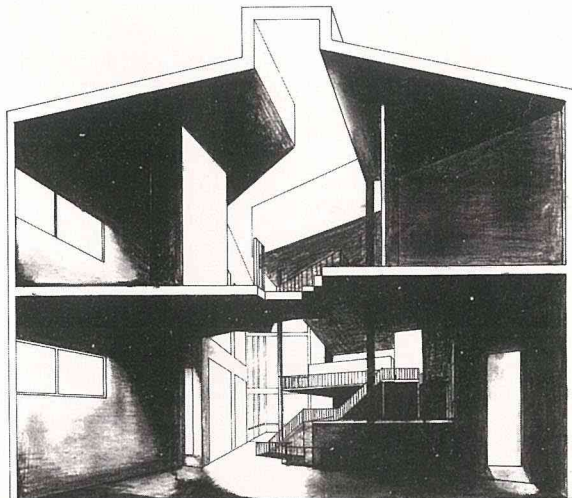
池埜純一郎
Junichiro Ikeno



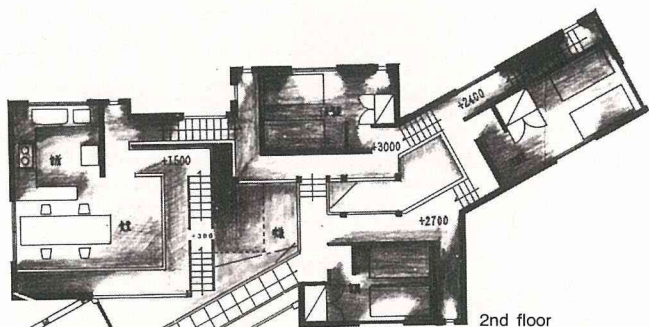
exterior perspective



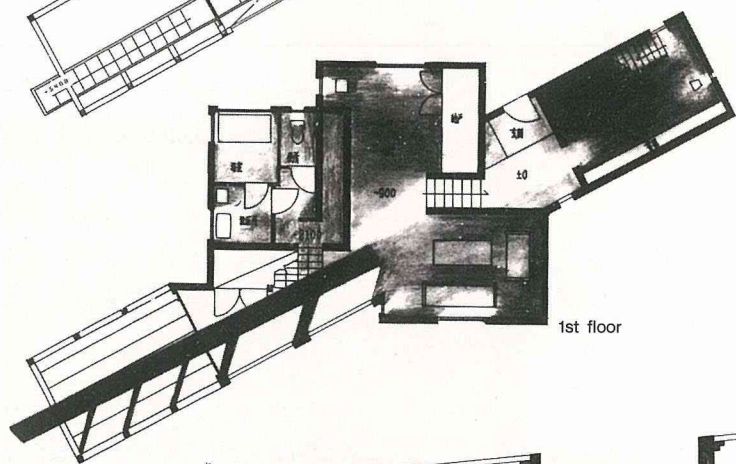
site plan



interior perspective



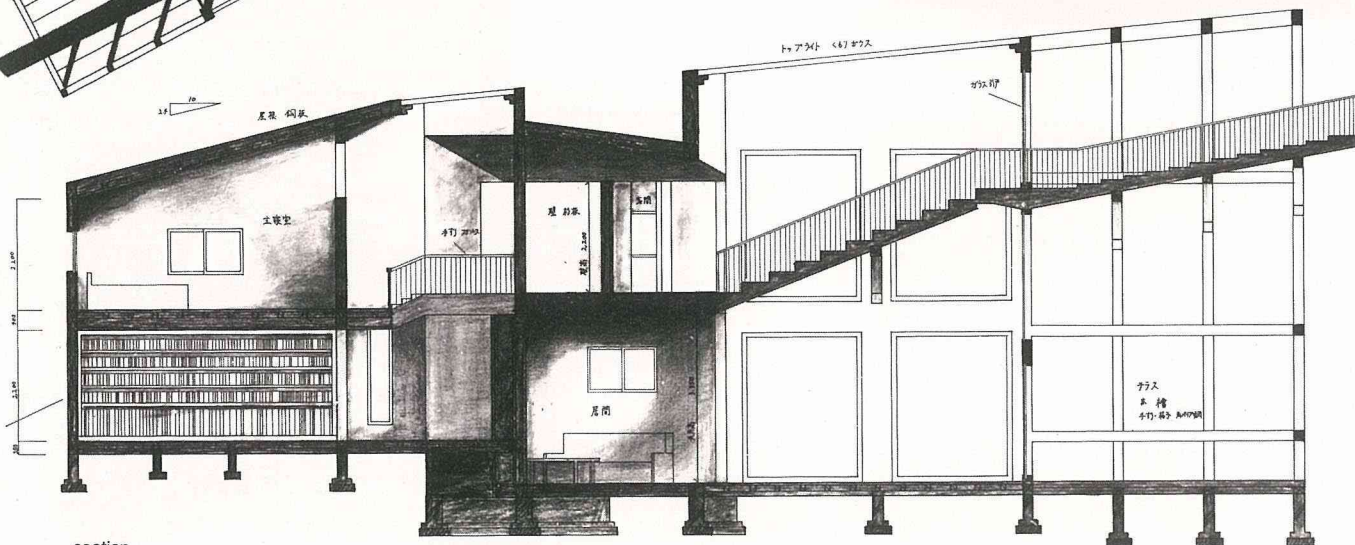
2nd floor



1st floor



'85 10 24



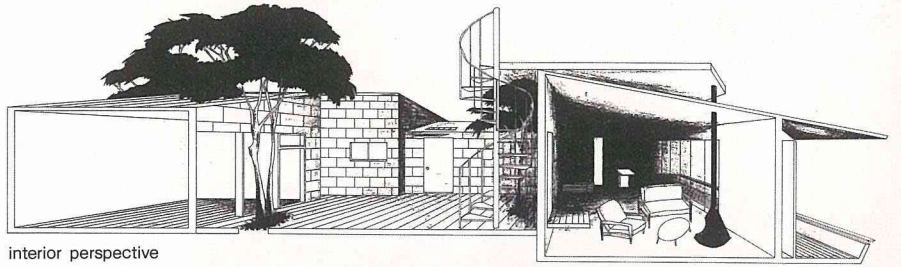
section

那須の家

House in Nasu

高橋空也

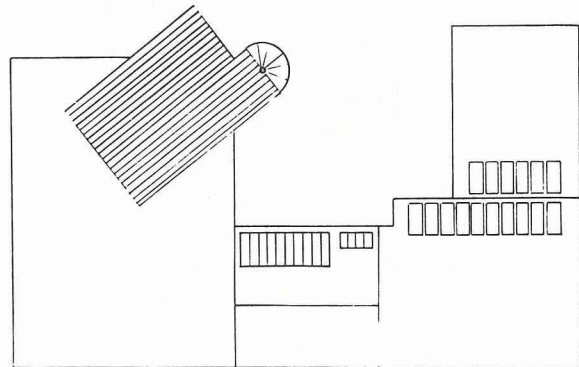
Kuuya Takahashi



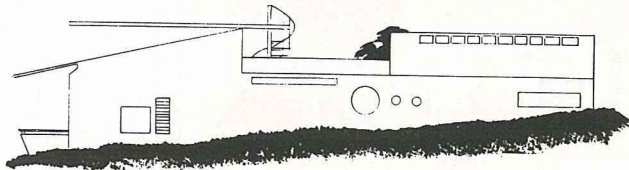
interior perspective



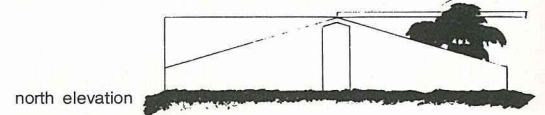
site plan



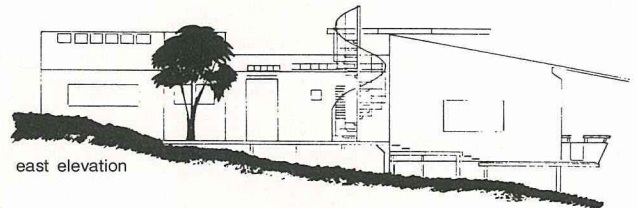
roof plan



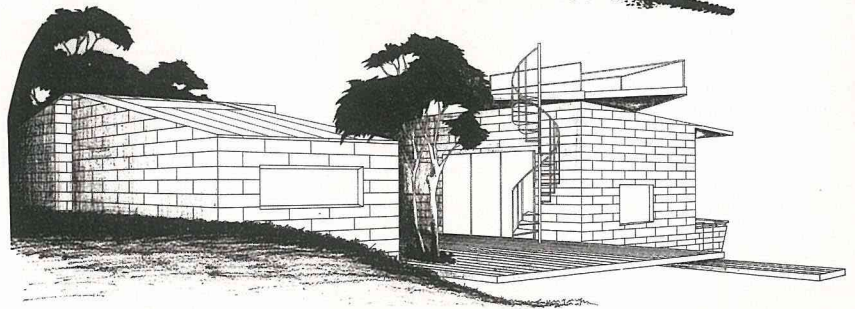
west elevation



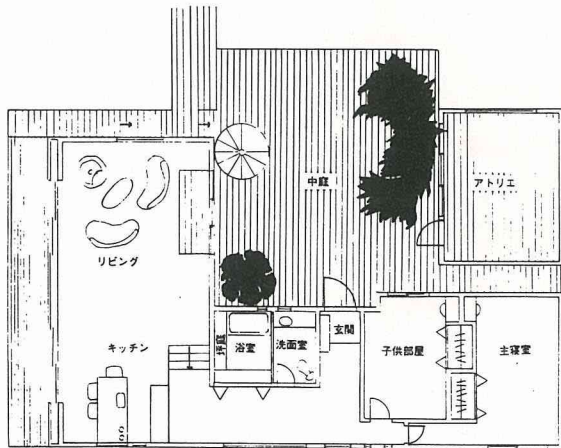
north elevation



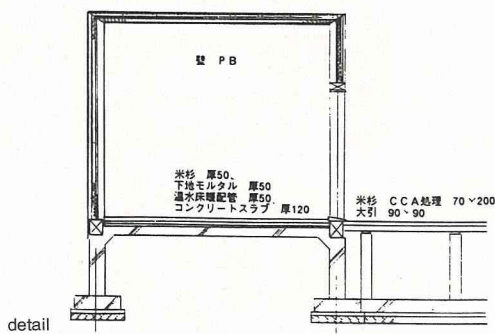
east elevation



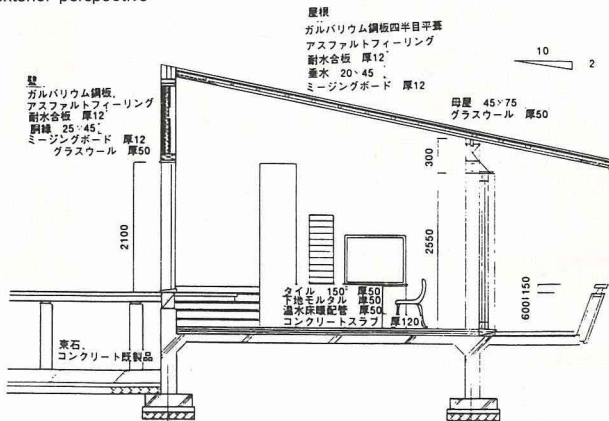
exterior perspective



1st floor



detail



屋根
ガルバリウム鋼板四半目平葺
アスファルトファイリング
耐水合板 厚12
垂木 20×45
ミーゾングボード 厚12

10 2

壁
ガルバリウム鋼板
アスファルトファイリング
耐水合板 厚12
胴縁 25×45
ミーゾングボード
グラスウール 厚50

母屋 45×75
グラスウール 厚50

タイル 150
下地モルタル 厚50
湯水床埋配管 厚50
コンクリートスラブ 厚120

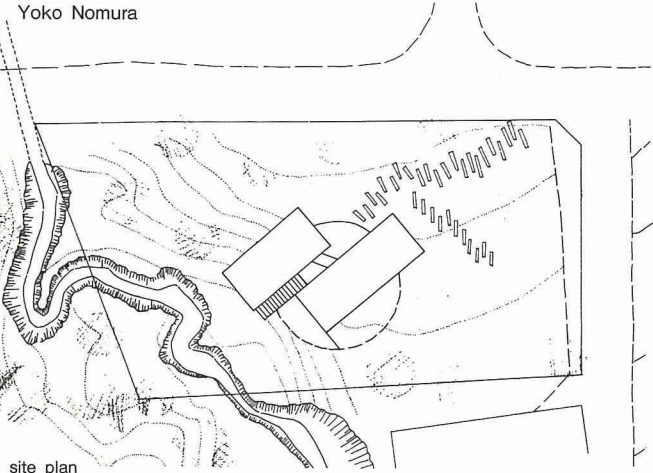
茶石、
コンクリート既製品

那須の別荘

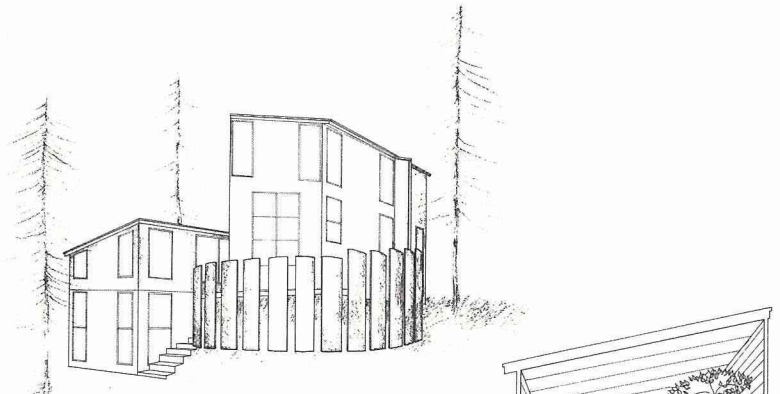
Villa in Nasu

野村陽子

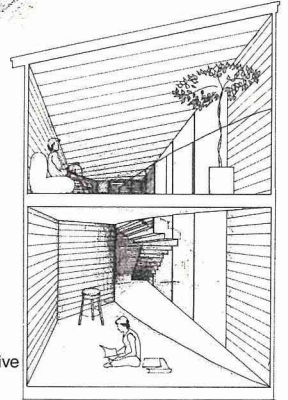
Yoko Nomura



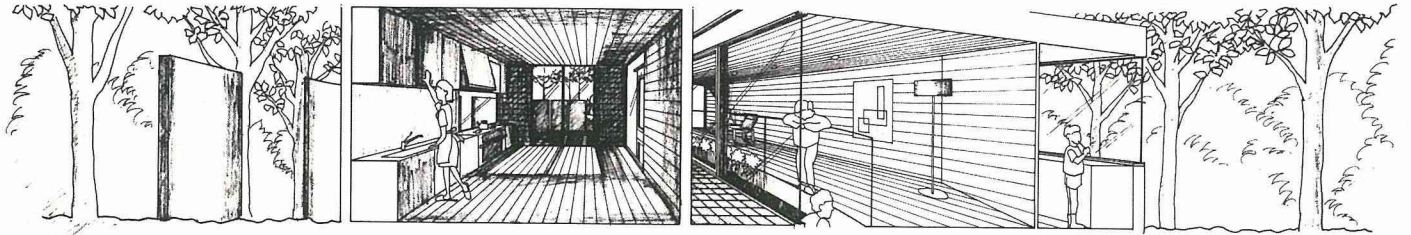
site plan



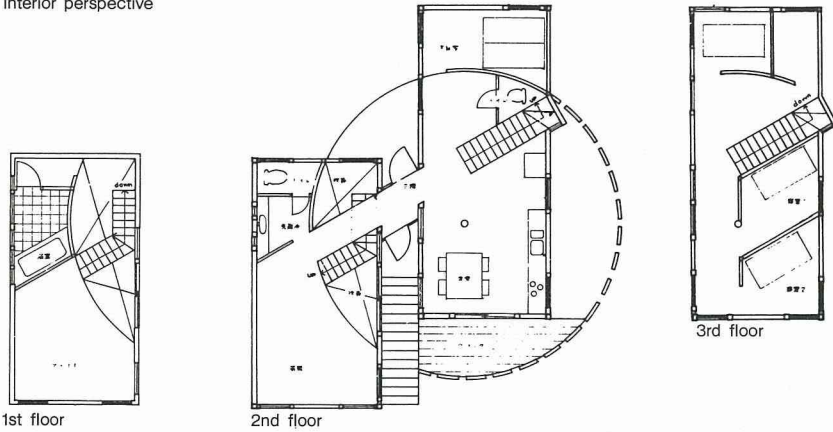
exterior perspective



interior perspective



interior perspective



1st floor

2nd floor

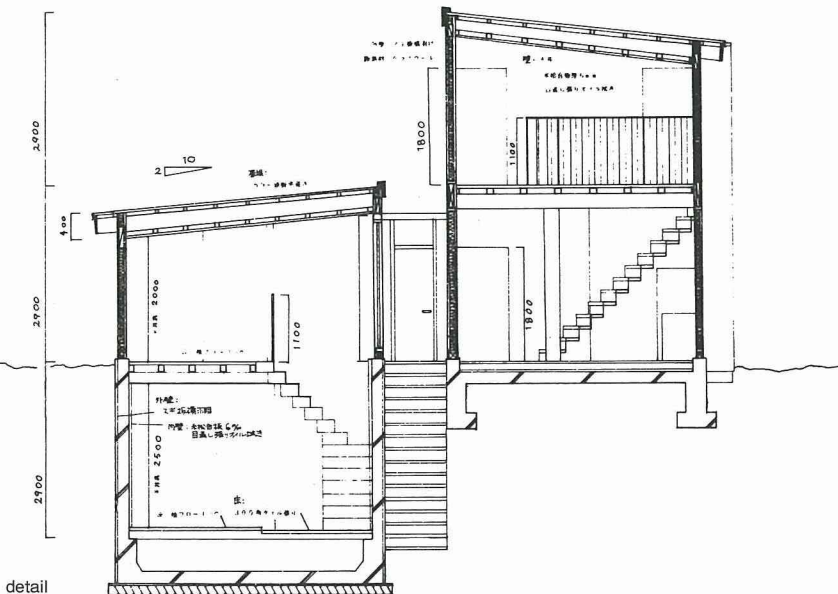
3rd floor



south elevation



east elevation



detail



1995年度設計製図第三(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work : Spring Semester

洗足池周辺に建つ博物館

Museum Adjoining Senzokuike

講評

教授 仙田 満

洗足池湖畔の博物館の課題は、すでに3年続いている。小川一人君の作品は中原街道に面してカフェテリア、ポートハウスを配し、美術館を洗足池の西側に位置づけた案で、そのプレゼンテーションは迫力のあるものである。また各部分のデザインも極めて美しくまとめられている。しかし美術館のスケールは、池の大きさ、周囲の環境にくらべ大きすぎると思われる。

米津正臣君の提案は、コルビュジエ的な平面構成、立面構成が特徴的でまたそれが欠点となっているが、位置、全体的な空間構成は魅力的である。スケッチ、絵もうまい。

馬庭世津子君の「World Human Museum」は上品で美しい立面をもった博物館となっている。配置構成もよい。望むならば、展示イメージを表現したらもっとよかつただろう。内部パースが貧弱である。

大成優子君の「いきもの博物館」は、おおらかで楽しい博物館である。屋上と内部が一体化している構成、動線をチューブ化した展示空間など新しい博物館の提案が評価できる。模型も迫力がある。

松島由林君の「Gather」と題する布の博物館はそのテーマ設定がユニークで、またその表現に個性がある。もう少し丁寧に仕上げると、よりテーマとの関係がでたのにと、惜しまれる。

「水に沈む博物館Ruins」を提案した浦橋信一郎君の建築構成はさわめておもしろい。環境そのものをアートとして成立させることに成功している。模型もなかなかのぞきた。

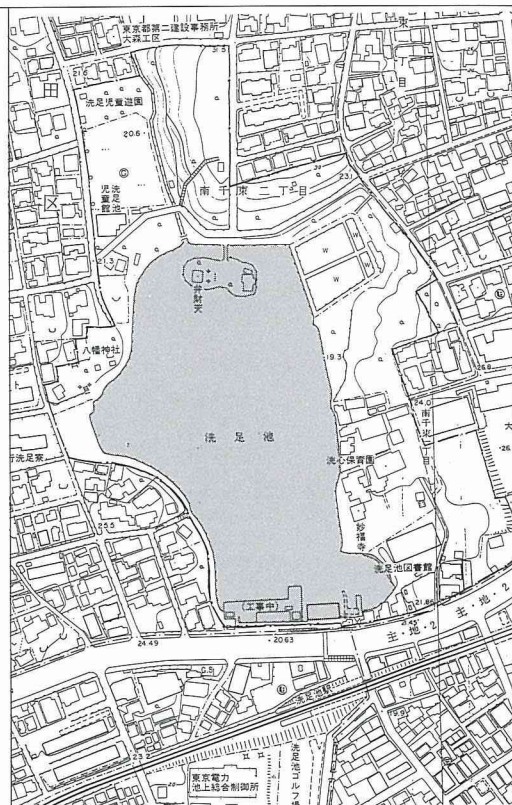
「坪庭のしつらえ」の笠井誉仁君は展示施設だけでなく、レストラン、宿泊施設まで一体的な環境構成を提案している。アイロニカルな空間の表現がオーソドックスな表現でなされているのだが、その乖離が気になる。しかし全体的なデザインのまとまりのよさを買いたい。

●課題

洗足池周辺に自由に敷地を選定し博物館を計画する。博物館の内容についても自由に提案してよい。構造も自由とし、規模は約4,000㎡とする。(敷地選定範囲については別紙参照)

●提出物

- ①配置図(外構・植栽計画も行うこと) 1:500
 - ②平面図 断面図 立面図 1:200
 - ③詳細図(展示室の部分の矩計または平面詳細) 1:50
 - ④パース(内観パース)
 - ⑤説明(800字以内を図面の中に入れよ)
 - ⑥模型(できれば模型写真も提出) 1:500
- *用紙サイズはA1とする。
(縦横自由であるが、どちらかに統一すること)



小野田環君の美術館は力強い、表現的にも内容的にも力まかせなところがよい。

今年の作品は全体的にレベルは高い。年々よい作品ができてきていることは喜ばしいが、テーマ自体の掘り下げという点では不十分である。

講評

講師 團 紀彦

博物館の内的なプログラム編成と、洗足池の環境への対応と、場の構築が求められる課題である。全体の講評を終えた後の印象は、前年度の最初の木造住宅設計課題と比べて格段の進歩が見られたということだ。

大成優子さん提案は、環境への配慮から建築のランドスケープ化をはかっており、内部もよくまとまっていて独創的である。ただ外周立面の処理等に、もうひとつ工夫がほしかった。浦橋信一郎君の作品は、内部構成に強引さがみられるのは気になったが、水との

関わり合いも含めて、優れた場の構築性を示している。笠井誉仁君は、全体を分散配置することによって、多様性をもった場の再構築を通じて、それに秩序を与えようと試みている。実際には分散することによる管理面の問題もさることながら、分散されたエレメント同士の関係性の構築に、一層の検討が必要であるように思えた。

小野田環君の作品は、構成的な手法に基づいて多様性のある場を創り出そうとしている力作である。難点を言えば、形態とプログラムの結びつきの必然性が薄く、エレメント相互の親和力ともいうべき状態にまで構成が到達していないように感じられた。

小川一人君の提案も、モニュメンタルな強さをもつ作品だが、内部空間にもうひとつプログラムに対する必然性と深みが加われば、さらに高い評価が得られたように思う。

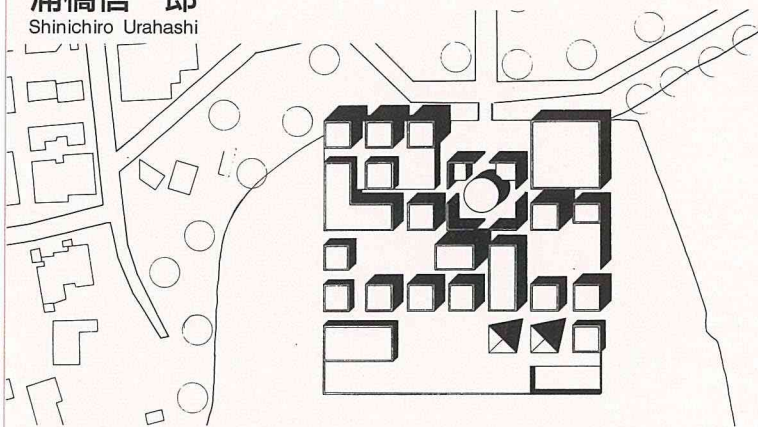
松島由林さんと馬庭世津子さんの提案は、静的な構成の中によく全体のプログラムをまとめている点が評価された。

水に沈む美術館

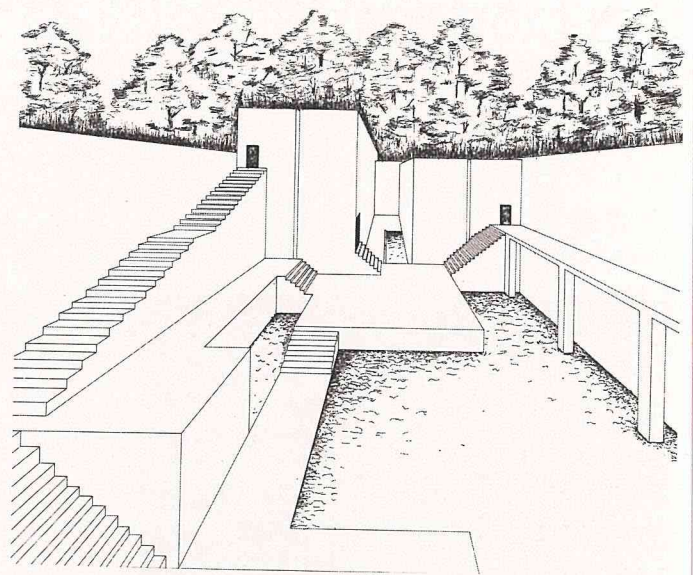
Ruins

浦橋信一郎

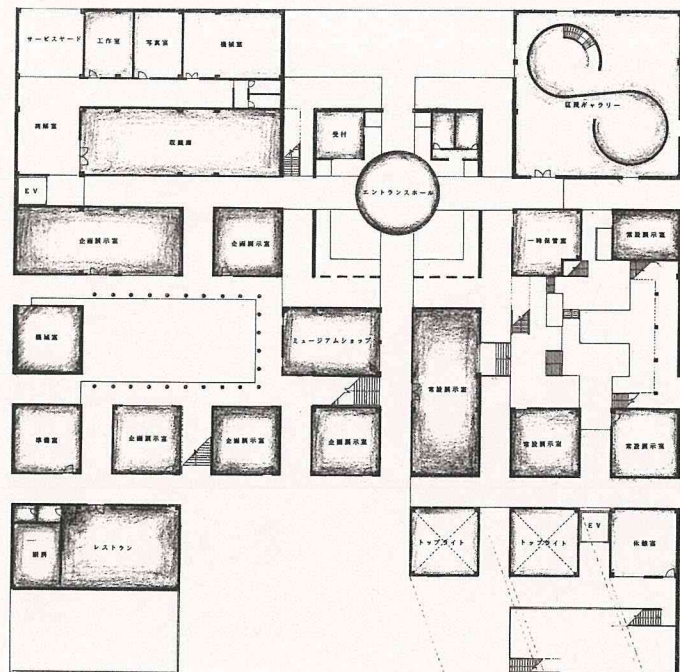
Shinichiro Urahashi



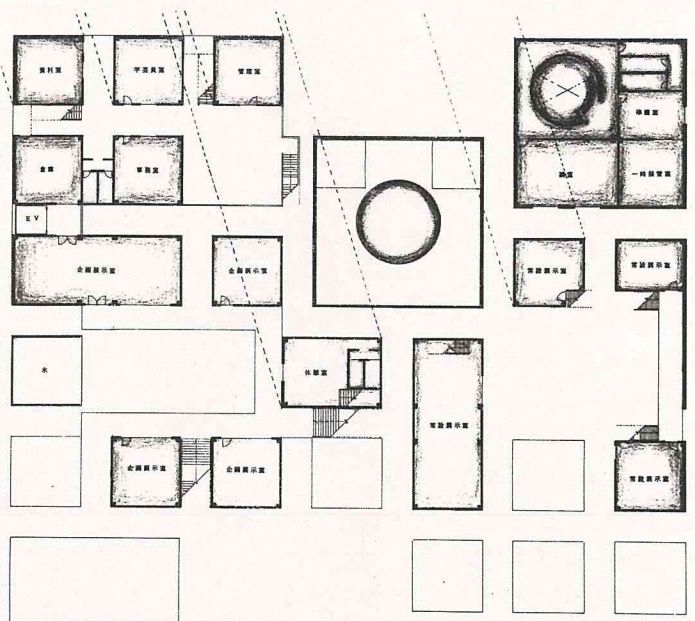
site plan



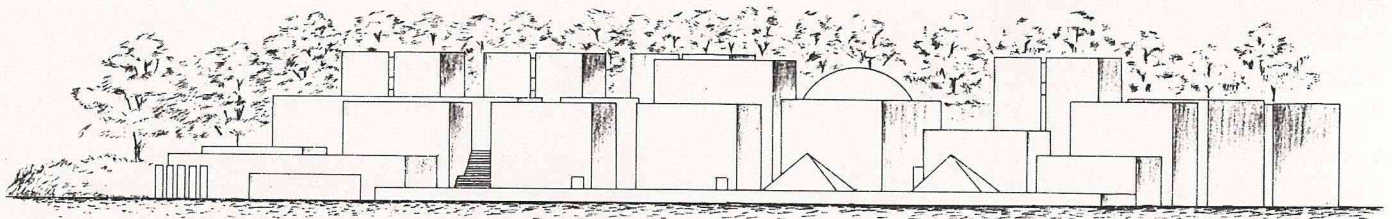
exterior perspective



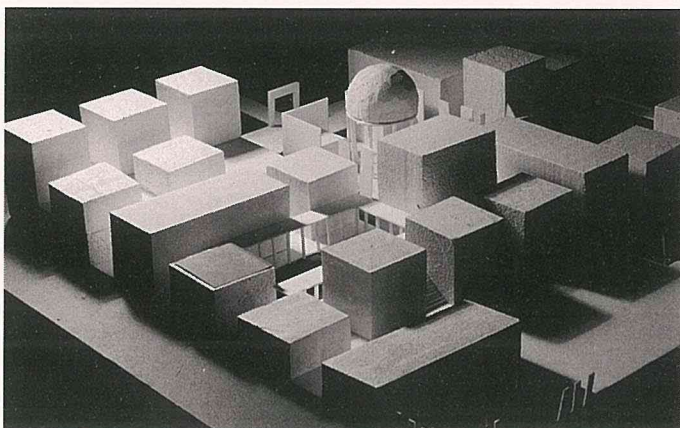
1st floor



2nd floor



elevation



■水に浮かぶというより、沈んでいるように見えるこの美術館は完全体ではない。正方形という単純な形で構成されていないが、その輪郭は非常に不明確である。境界から水という媒体が、そこかしこから浸り込んで一部を覆い隠し、ある種の廃墟的空間をつくりだしている。あるはずだった回廊、壁、列柱、中庭そして彫刻。それらはみな水底に沈んでしまった。■訪れた人はこの廃墟的空間の中で、あるひとつの

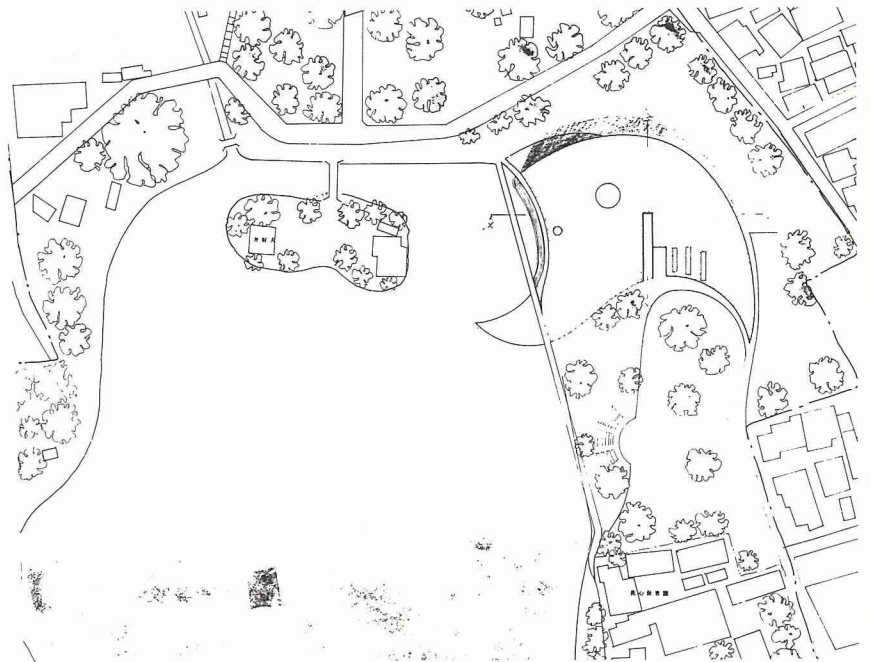
彫刻を偶然に発見する。動けぬ像。そして絶え間なく流れる水。静と動の相反する要素が同時に存在する。「この像もやがて水底に沈んでしまうのだろうか」。発見者はそういった素朴な時の流れを確実に感じると、■洗足池は水と緑といった自然が残る都会の中の異空間である。その中に人間の創造力=芸術を植え込む場として不定形の美術館を配し、さらなる異空間とするべく意図した。

いきもの博物館

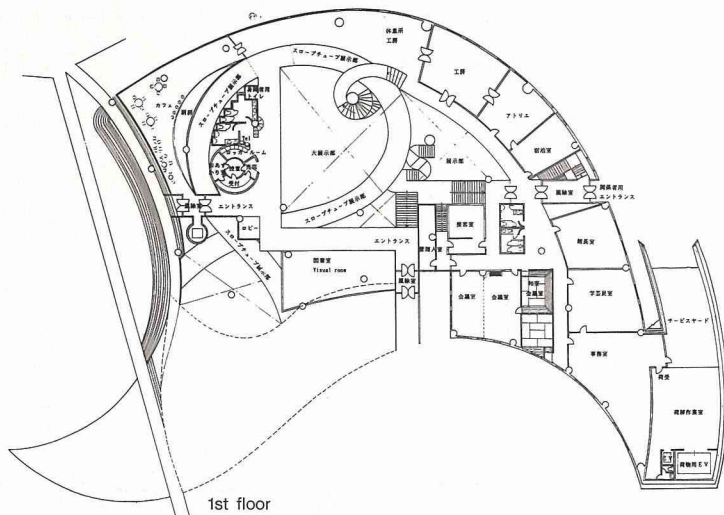
Museum for Living Things

大成優子

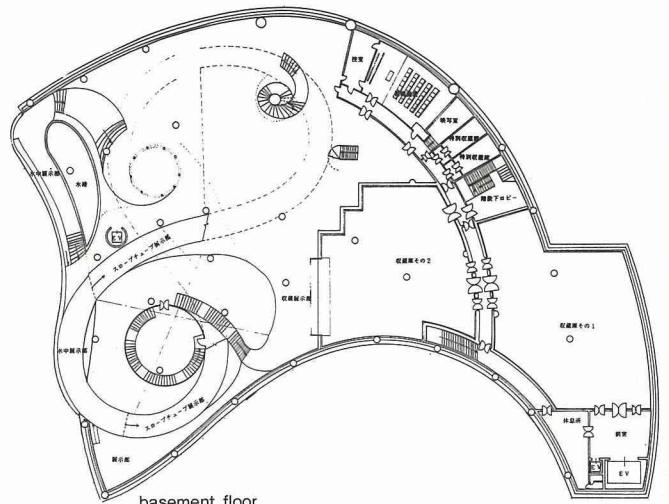
Yuuko Oonaru



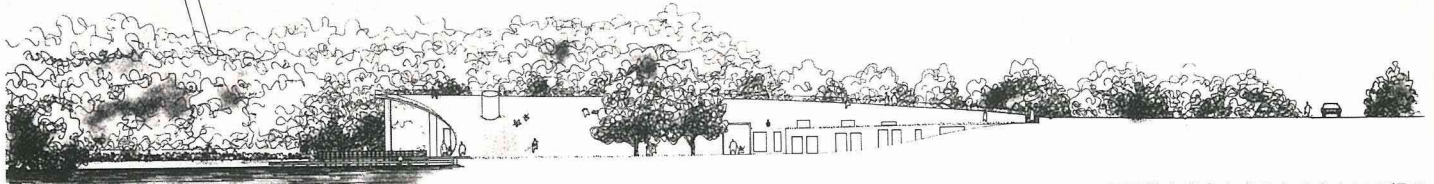
site plan



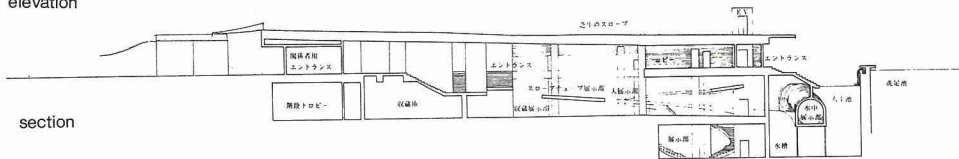
1st floor



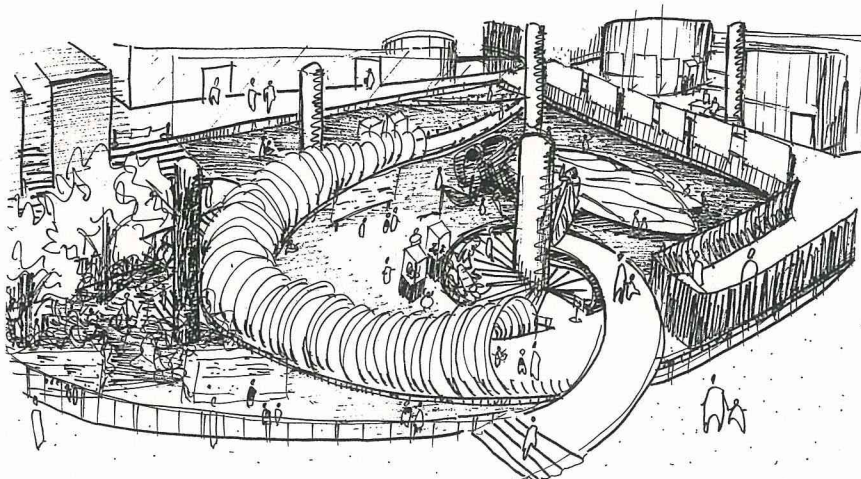
basement floor



south elevation



section



perspective

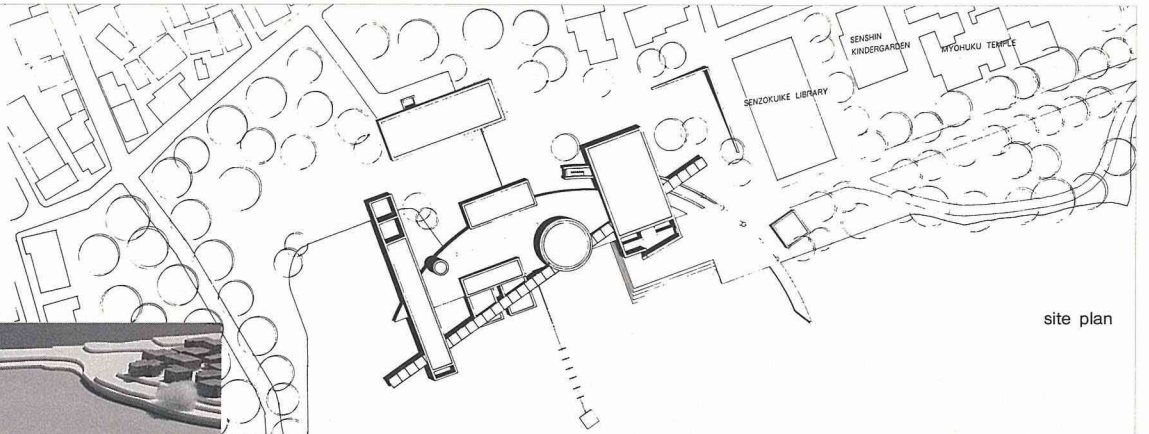
■子供と老人と犬のたくさんいる緑の生い茂った池。都会の中にひっそりと、でもどっしりと居座っている池。洗足池はそんな池です。ここにMUSEUMを建てるなら、ゆったりんびりできる空間がいちばんよい。そう考える私の行き着いた先が、屋敷のできる芝生のスロープでした。■人間を含むさまざまな「いきもの」を通じて、自分という人間の存在を感じてもらえればと思い、テーマは「いきもの」になりました。企画も少し考えてみました。

- ・ある動物を詳しく展示→ゴキブリ、セミなど
- ・ある世界をつくりだす→アフリカ、日本の林など
- ・同時代に生きたふたりの人間を対比的にみせる。

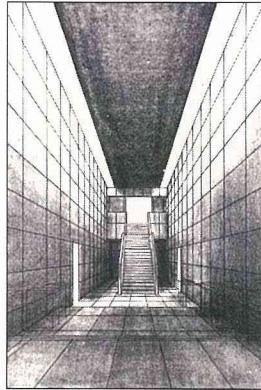
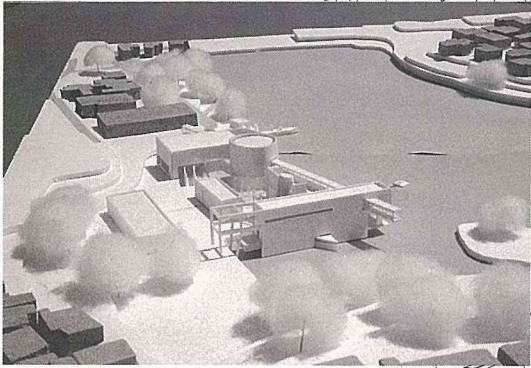
■博物館とはよい展示があって初めて生きてきます。その可能性が少しでも広がるように、チューブ状のスロープが2層の空間をはいまり、水中および収蔵庫の一部も展示として取り入れてみました。あとは演出次第です。

Museum

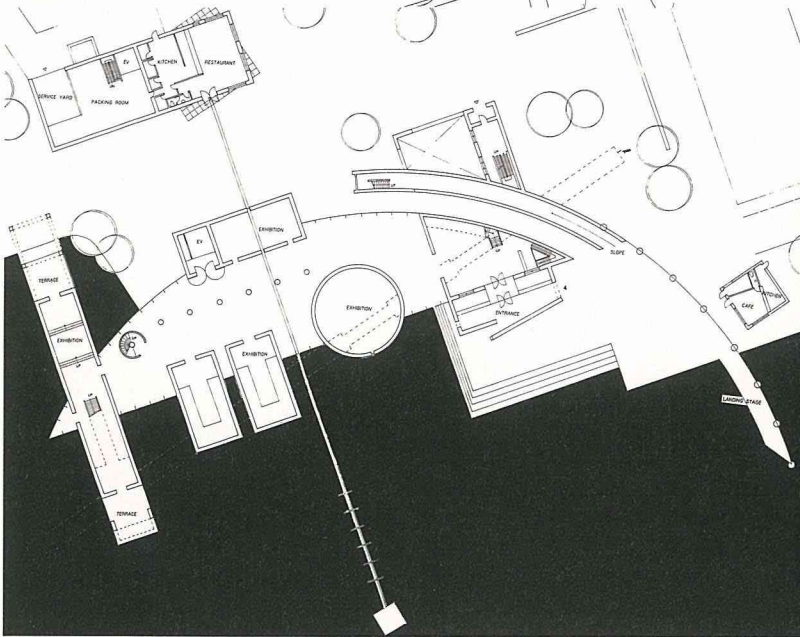
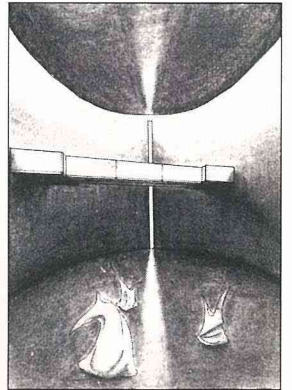
小野田 環
Tamaki Onoda



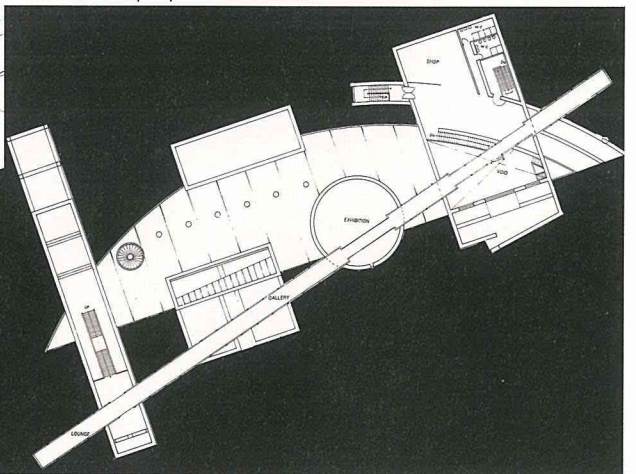
site plan



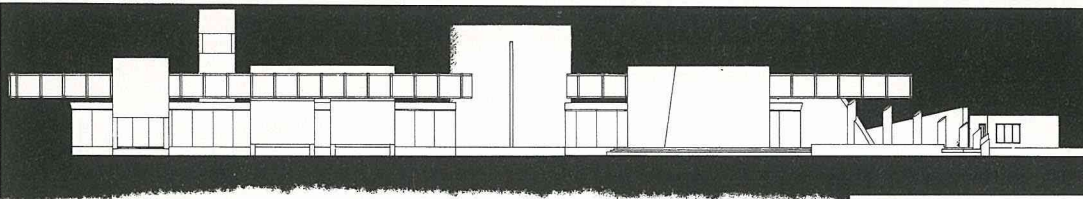
interior perspective



1st floor

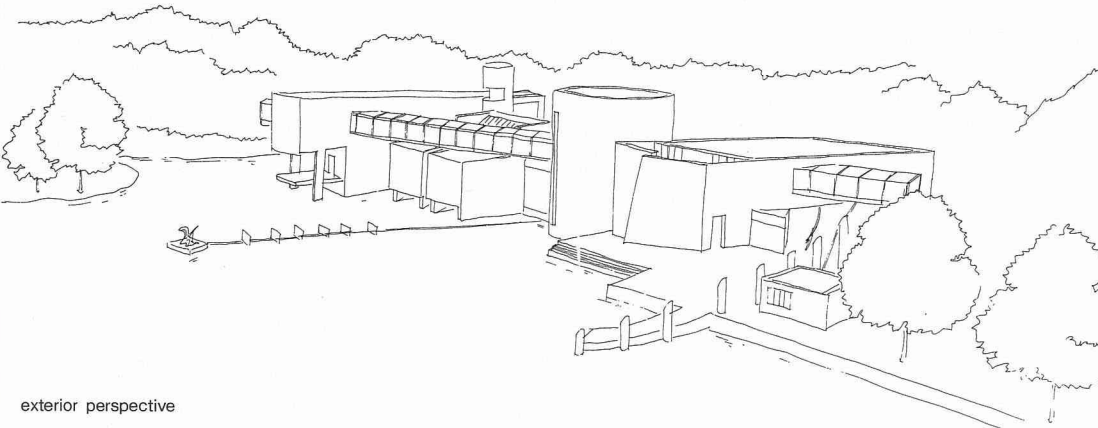


2nd floor



west elevation

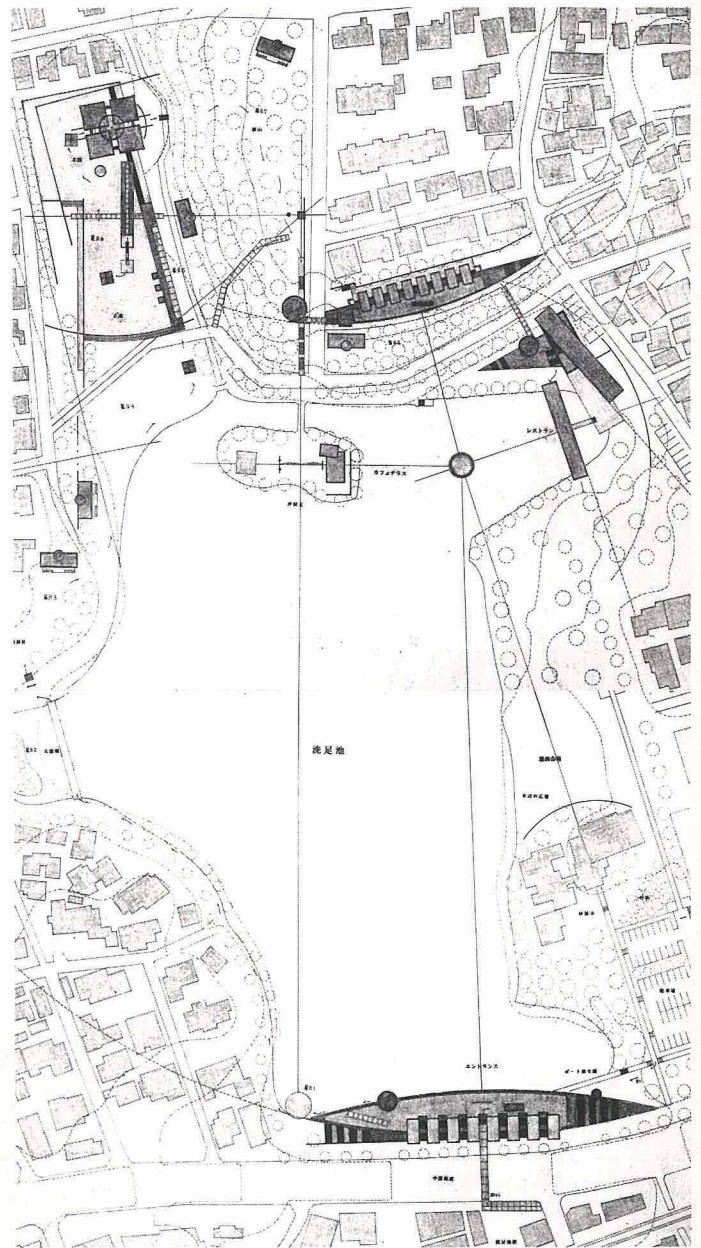
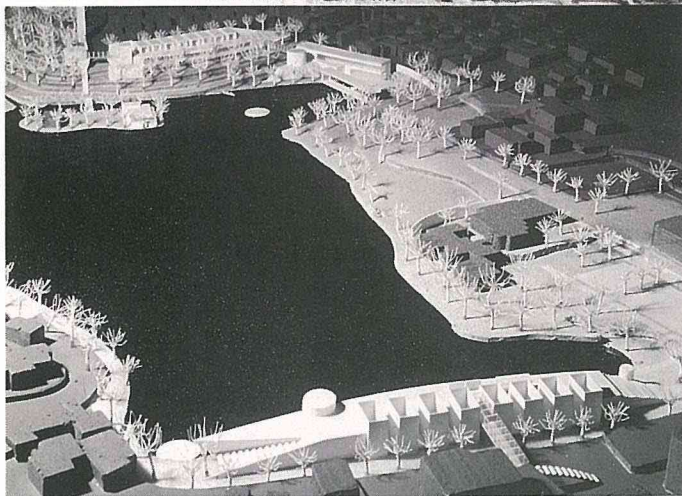
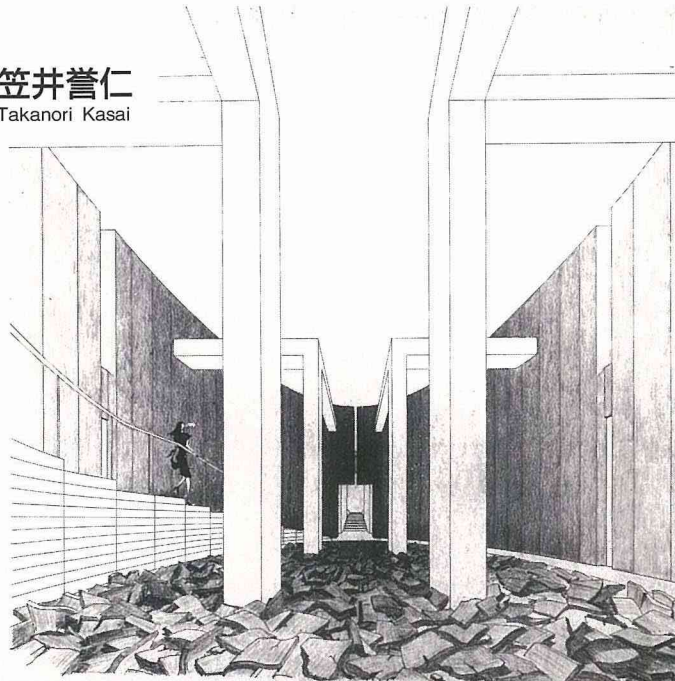
■MUSEUM-glass with light & water. 緑と水の岸辺に降り立つ白鳥。半月型の翼部をもち、光と水の流れ込む容器。水面のきらめきに身を浸す構築物。ガラスの美術館。■その心臓部、展示会場は自然光を取り入れた「明」と壁で覆われた「暗」とのふたつの空間をもち、歩み入る人びとは光と闇のコントラストと水の響きに、深い感覚を喚び醒まされる。■そして階上部のガラスのギャラリー、四方が開け放たれた光の場へ、大気と陽光を切り取った透明な方形の大窓、ひと窓ごとに人びとは展示作品と一体となって、その空間構成に立ち会うかのような。ガラスのギャラリーは、言わばこの建物の眼なのである。■白鳥の頭部のように池中央に延びる細い溝には、先端にガラスのアートを置き人びとの視線を無限へと誘う。夜には照明のもと、建物の半月弧を貫き、池に流れだす光の帯となって、ガラスのギャラリーとやや斜めにクロスする。■白鳥は昼夜惜しみなく人びとに美を振舞うのだ。



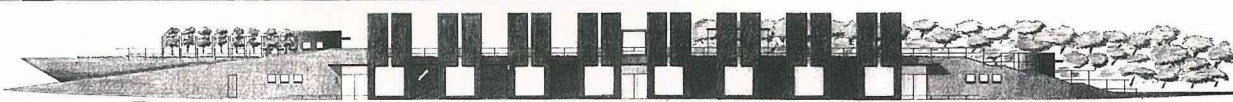
exterior perspective

坪庭の設え ^{しつら} 洗足池周辺美術館計画
 Tsuboniwa Concept (Museum Project Adjoining Senzokuike)

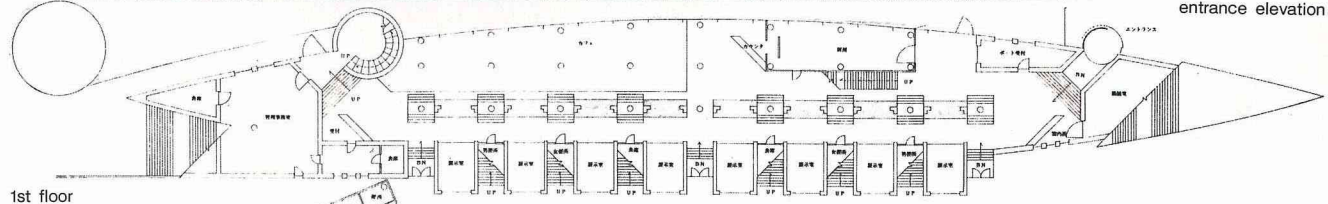
笠井誉仁
 Takanori Kasai



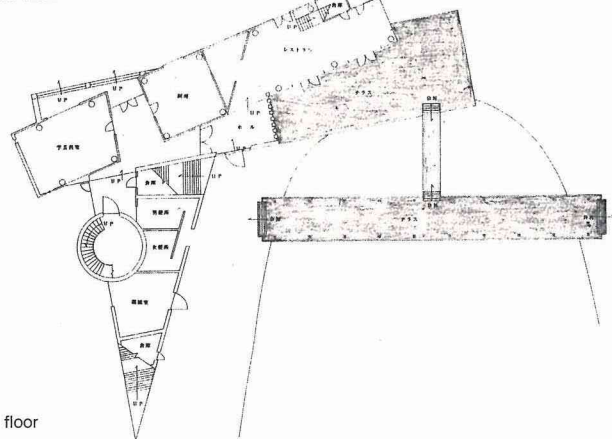
site plan



entrance elevation



1st floor



restaurant 1st floor

坪庭：それは幻想の装置として自然に見せかけながら、最高度に人工の極を發揮した創造物なのである。

『坪庭考』横山 正より

都市の坪庭：江戸百景のひとつにもあげられた洗足池は、周囲を無秩序に住宅に囲まれながらも、ひっそりと情緒溢れる雰囲気、そして四季折々に変化する時間を映し出す鏡として、多くの人びとに親しまれている。坪庭の設え：また近年、橋が架けられたり島が造られたりと、池周辺の開発が盛んに行われている。美術館はその延長として設えられた。

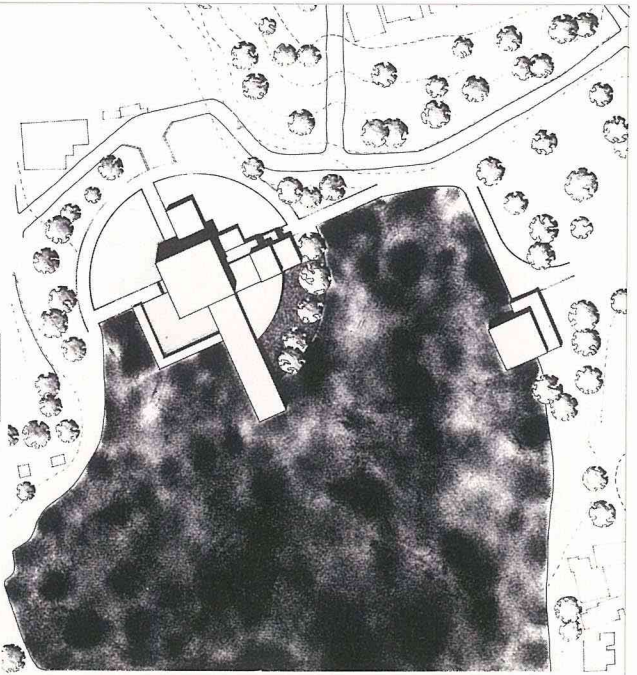
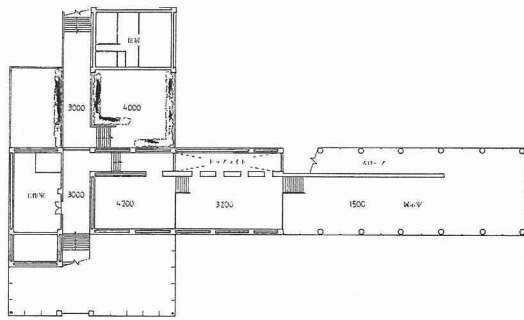
客間：この池がもっとも必要としているのは、ゆったりとくつろげるカフェテラスである。美術館を訪れる人びと、ただ散歩してるだけの人びと、そして芸術家たち、だれもが気軽に立ち寄れるような。

灯籠：後は8人の芸術家たちが、池周辺に芸術を設えてくれるだろう。

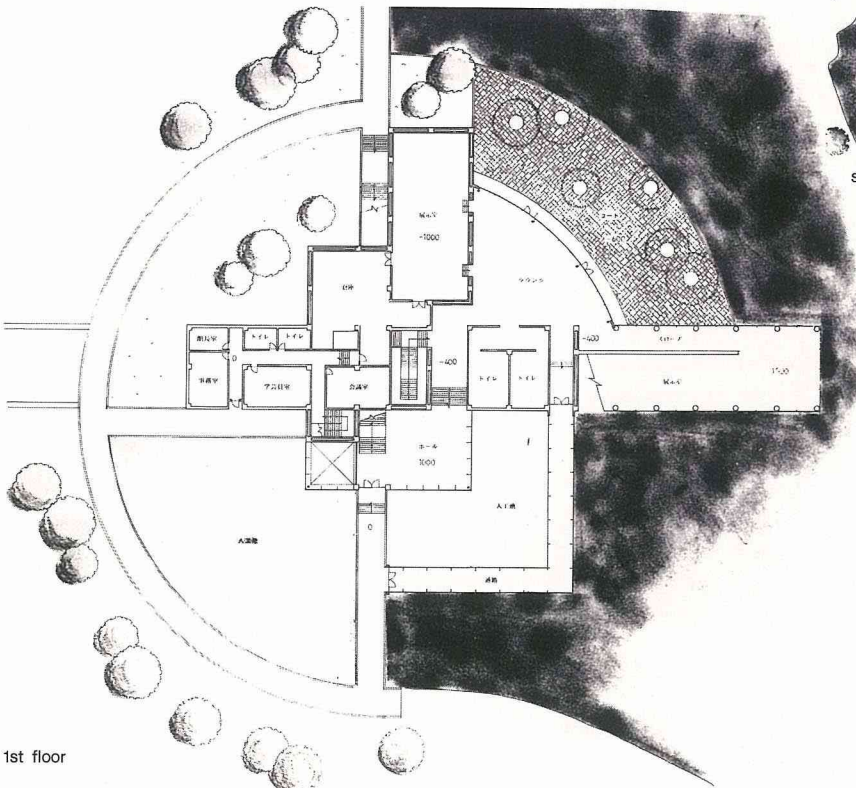
World Human Museum

馬庭世津子
Setsuko Maniwa

2nd floor

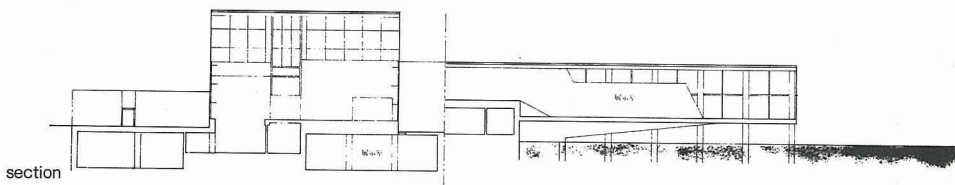
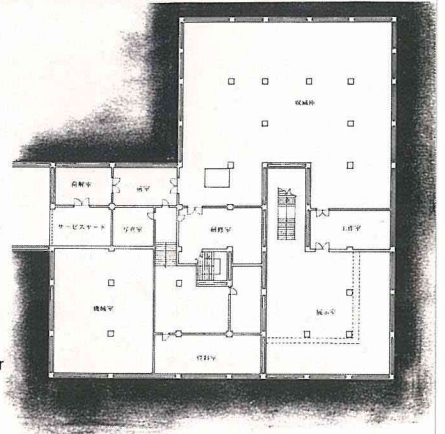


site plan

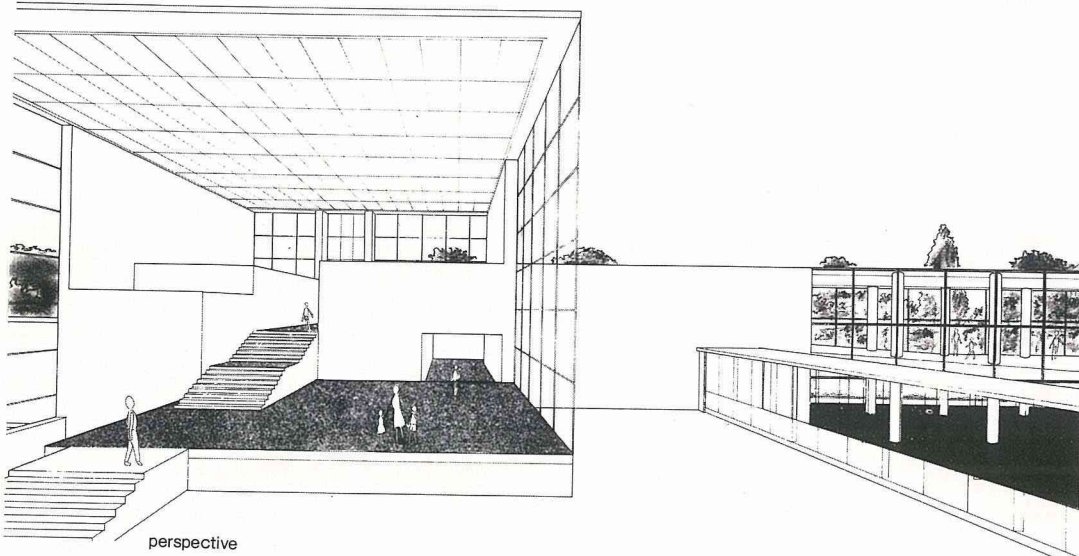


1st floor

basement floor



section



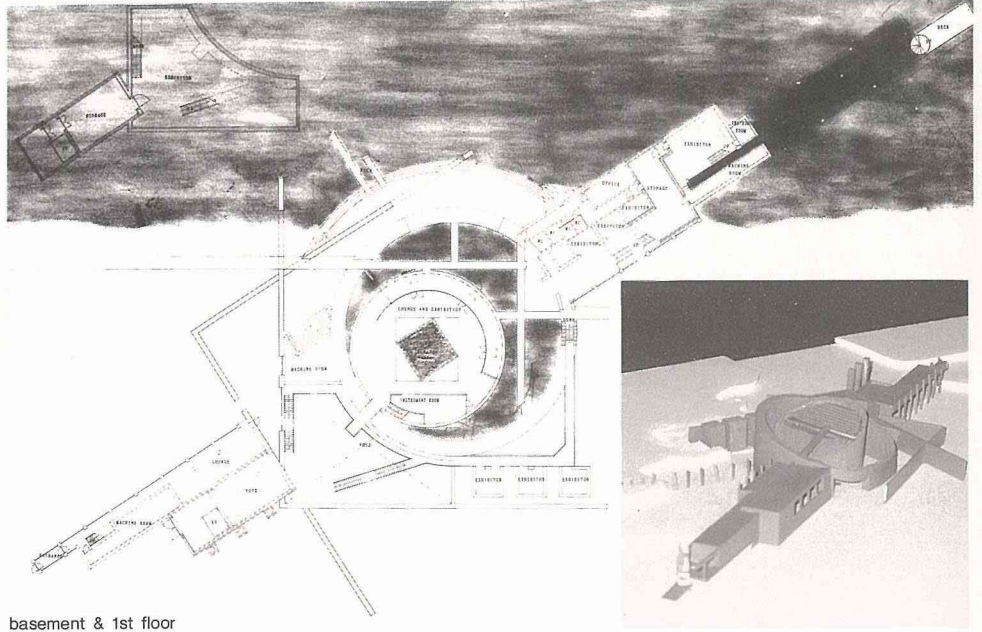
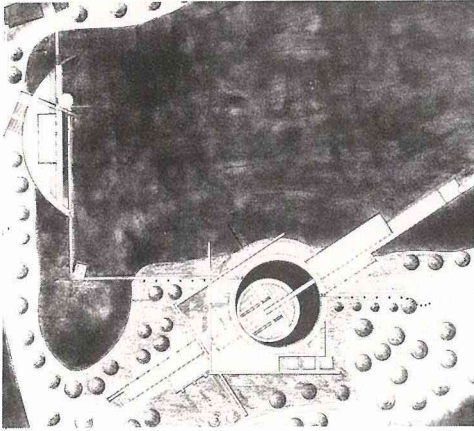
perspective

■人は生きてゆく。人は生きる意味を欲するがゆえに自己を見つめる。人は世界を見つめるたびに己の姿を見つけるであろう。人はここで異文化に触れ、神から授かったもののその豊かさを覚え、世界の広さと自己の関連性を見だし、己の素晴らしさを知り開拓していく。そして、光と水と緑が人を見守っているのだ。■このWORLD HUMAN MUSEUMは異国に触れる場としての施設で、期間ごとに多くの文化、歴史、政治などを紹介する。例えば「中国宮廷料理展」「アメリカ開拓史展」「フランス女性文化史展」「インド芸術展」などの企画があるかもしれない。またそれに関係のある外国人をよんで、その期間滞在してもらおう。それは家族単位でもよい。子供も夫人も一緒に地域に親しむ。学者であったり、料理人であったり、芸術家であったりするその人は、直接その国民性もしくは民族性でもって日本人に語りかける。結局は異国を知って自国を知るであって、この自己確認作業は現代人には必要不可欠であろう。■建物は明と暗の組み合わせ、思考と休息の連続で、眺め歩き、眺め佇む装置である。建物すべてに展示の可能性があり、休息の可能性がある。その中を人はプラプラと過ごす。太陽と池と樹木は人に安らぎを与え、思考と休息の効果は洗足池全体に広がる。ここは豊かな人間をつくるMUSEUMとなるだろう。

Disordinary Space

小川一人
Kazuto Ogawa

site plan

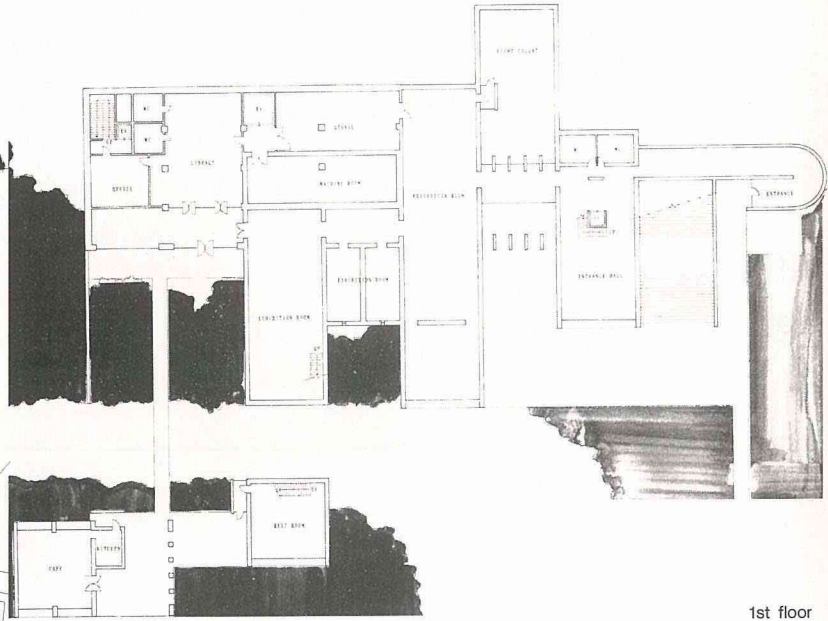
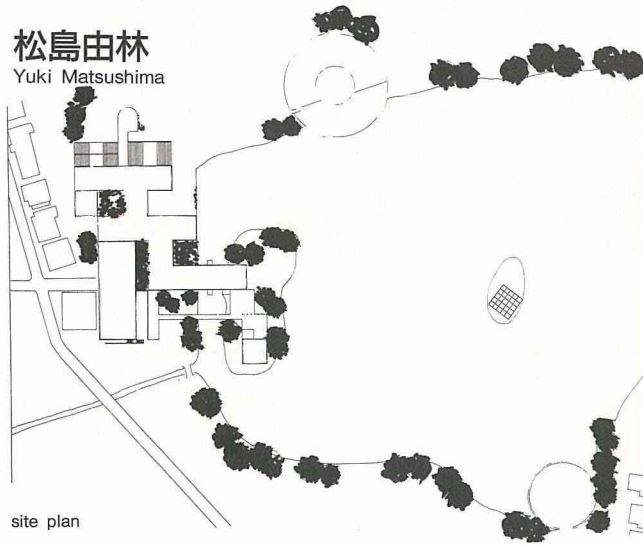


basement & 1st floor

Gather

松島由林
Yuki Matsushima

site plan

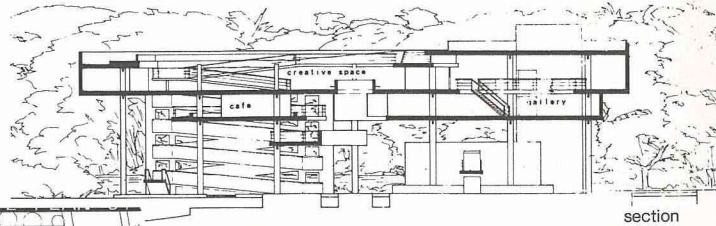
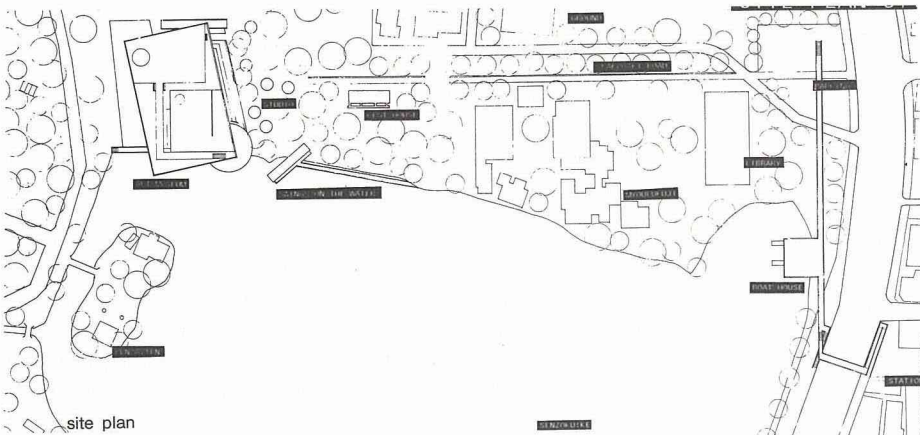


1st floor

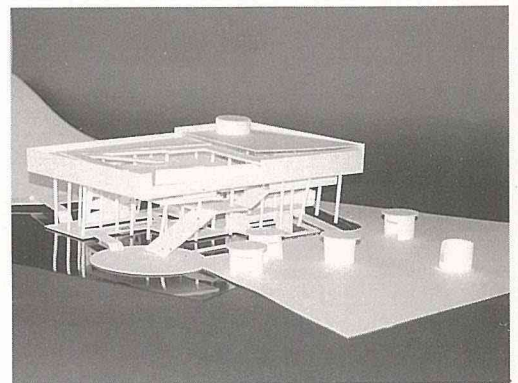
Senzokuike Art Museum (SCENE)

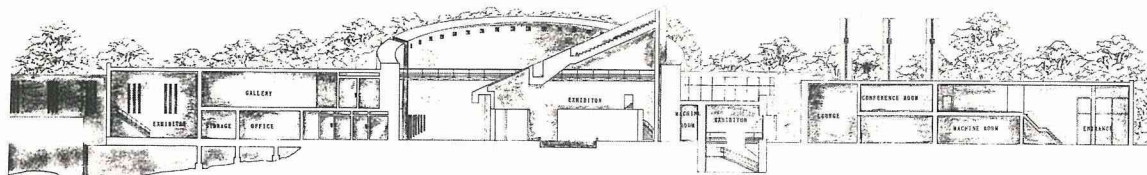
米津正臣
Masaomi Yonezu

site plan

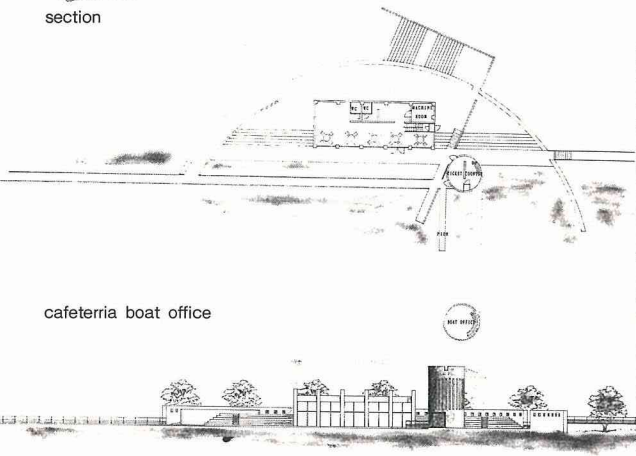


section

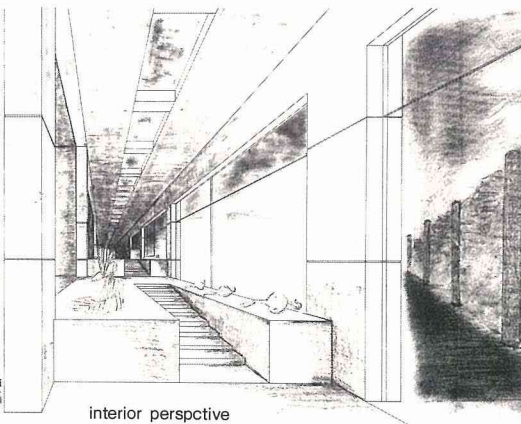




section

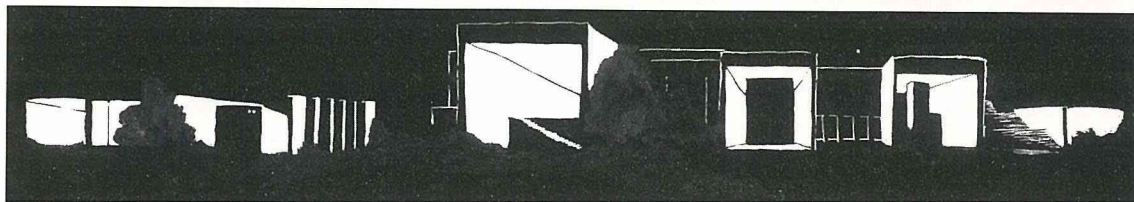
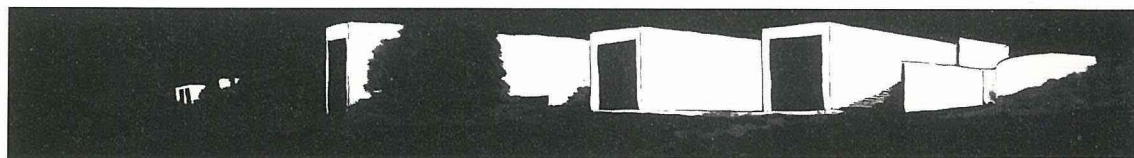


cafeteria boat office

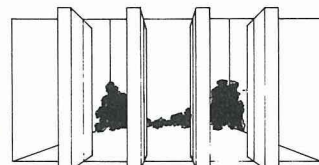


interior perspective

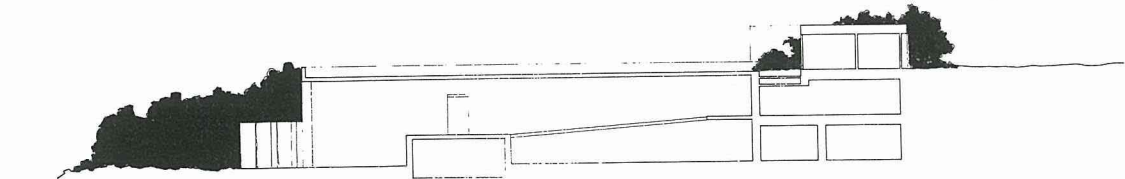
■日常の中を散歩していた。大地を這うような建物が常に気になっていた。列柱に誘われるかのように建物に引き込まれてゆくと、そこには非日常があった。■建物内の空間すべてが非日常的空間アートの連続で、視界の隅に洗足池を感じることができた。歩いていると隙間に光を感じ、ドアを開けてみると、目の前に弁財天と洗足池が広がり、ふたたび日常に戻った気がしてホッとした。■日常と非日常の対比、空間全体はその先にもどのような空間が広がるかわからない、しかしどこかで池を感じる事ができる。そこには緊張感があり、楽しみがある。その間でみる洗足池。この空間は「都市の雑踏の中での洗足池」というものとは違った新たな洗足池の姿、形をつくりだしてくれるだろう。



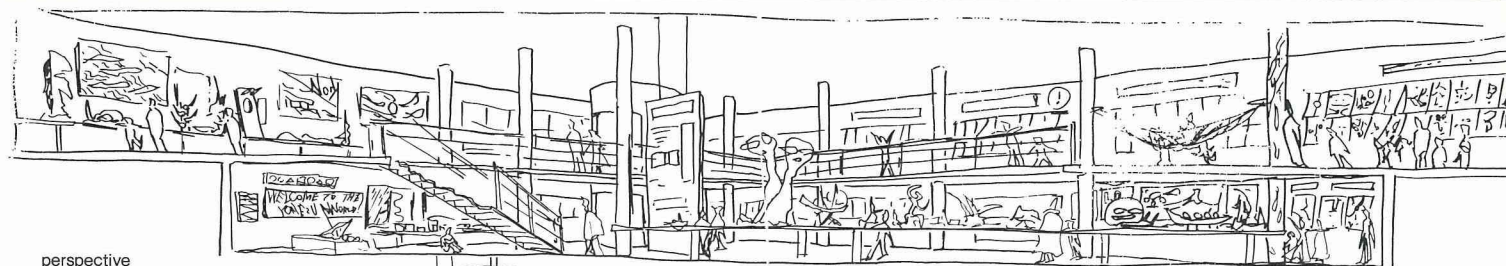
elevation



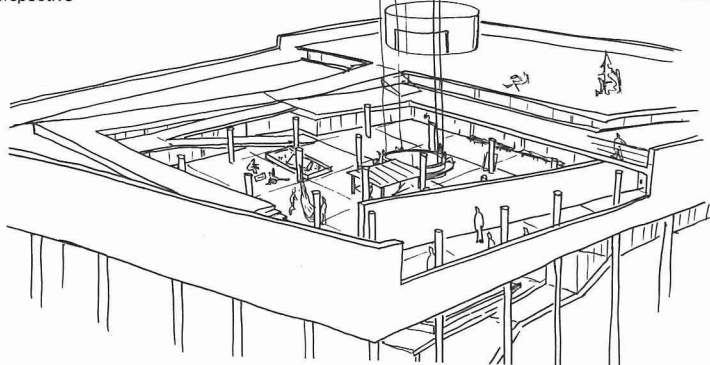
これは布の博物館である。
色・柄・素材。
さまざまな布がここに集められる。
洗足池は白い布のイメージがある。
緑の中で涼しげに風を通す夏の麻。
やわらかなギャザー。
私たちが包む折々の布。
ギャザーには集まるという意味もある。
通りゆく人びとがすれ違う。
それは1本の縦糸。
それは1本の横糸。
今、私たちはすれ違っていく。



section



perspective



■才能のある若者や純粋な子供たちの絵を前にしたとき、多くの人はその絵と素直に向かい合い、その絵自体を「素晴らしい」「かわいい」「おもしろい」と感じることができます。その瞬間は大芸術家の作品を前にしては、時として感じられない、さわやかで純粋な心のときめきです。■いっぽう若者たちは学力や運動能力を競う場はあっても、美的センス・芸術的センスを競う場は非常に限られているため、せつかくの

豊かな感性はその活躍の場の欠如から徐々に蝕まれてゆくのです。■そこで地域住民が自由に創作・発表・批評でき、生活の一部としてもっと純粋に、もっと簡単に芸術とつきあえる美術館を計画しました。また、実際計画するにあたっては、ここにある自然をできるだけありのままの姿で残し、ここにある脱世間的な時間や風を乱さぬよう、主要施設をピロティーで浮かせ、変化のある軽快な空間の演出を試みました。

1995年度設計製図第三(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work : Spring Semester

大空間建築 Huge Space

大架構でおおわれる部分の投影面積が、5,000㎡～8,000㎡の空間を計画する。

●敷地：次の3つの敷地のうち1つを選択する

①大川端リバーシティ地区

②辰巳水泳場地区

③文京区スポーツセンター地区

●機能：自由

スポーツ施設、展示場、劇場、遊戯施設など各自自由に設定すること。

●提出物：

1. 模型 1 : 300

2. 図面 A1版3枚以内におさめること

a. 配置図 1 : 500

・周辺環境との関係が説明できる図面であること。
・必要であれば、周辺地区の既存施設を見直す計画を提案してもかまわない。

b. 平面図 1 : 300

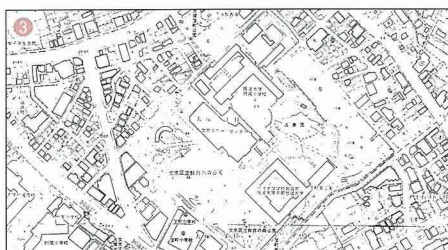
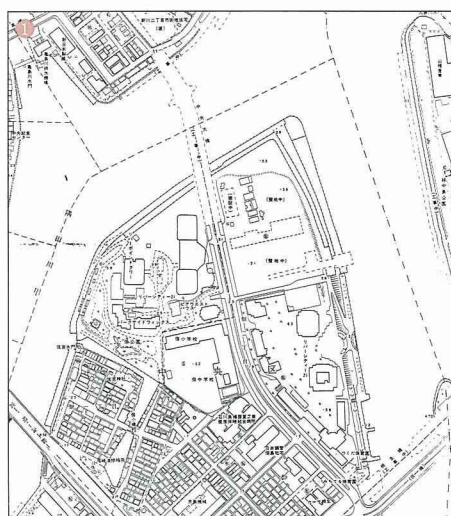
c. 立面図 1 : 300 2面以上

d. 断面図 1 : 300 2面以上

e. 説明図 計画コンセプト及び構造システムの説明

f. 仕上表 主要部分

g. 透視図 外観および内観(着色)



講師 非常勤講師 只野康夫

たとえば、たて・よこのスパンが8m、高さが4mのRCラーメン架構をイメージしてみる。この程度だと見慣れたスケールなので、柱の太さや梁の大きさなどのおおよその見当がつくし、それが規定する空間の大きさも把握できるだろう。

では、このスパンで高さを10倍にしたならどうだろうか。架構は単に10倍の相似形にするというわけにはいかない。軸力は単純比例でいいが、モーメントは10²倍になるから、比強度の高い材料にするとか、アーチや吊り構造といった軸力による架構におきかえないと重苦しく、やぼったい形になってしまう。

また計画的には、投影面積が10²倍、容積は10³倍になるので、想定される機能や利用者数、あるいは必要となる電力や水、空気といった

エネルギー系もそれ相当の量となるわけで、都市計画的観点からの検討、敷地周辺との調和への配慮、あるいは大架構のもつ力強さとか雄大さといった特性を活かしながらも必要などころではヒューマンスケールへのスケールダウンを計るといった工夫が必要となる。

設計製図第三・第2課題の「大空間建築」の意図するところは、以上のような点について身をもって体得することにあると思う。

6月8日の課題説明・スライドレクチャーから7月13日の図面提出、7月20日の模型提出までに、計画エスキス3回、構造レクチャー2回、構造エスキス1回がもたれ、私は構造以外のパートを高田講師と共同で担当したが、結果は率直に言って、優秀作品も含め総体的にもの足りなかった。その原因を私なりに振り返ってみると、先に述べたような大空間がもつ特性ないしスケール感をついにつかみきれなかった点にあり、先例に学ぶ、実例

をみるといった地道な習練をもっと積むべきであったと思う。

神原栄男案は構造的な押さえが十分であり、アンフィシアターなる中味も空虚だが、のびやかな架構が水面と対峙する構成を評価した。

五嶋崇案は荒けずりだが、また平面も稚拙だが、立地条件に対して自分なりの解を提示しようという意欲が表われている点を評価。

鈴木美帆案は課題開始初期にすでに抱いていたイメージを最後まで追いつづけて愛らしい形にまとめあげた点を評価。ただし、やや小ぢんまりとまとまりすぎて、いまひとつ面白みに欠けるのが残念。

山口由美子案は平凡だが大架構建築としてのまとまりがある点を評価した。

米津正臣案は普通の架構と大架構の使い分けがリーズナブルで全体としてよくまとまっている。反面、機能の羅列のようでつまらないという印象が残るのも否めない。

講師 非常勤講師 高田典夫

大空間建築という課題においては、少なくとも次のふたつのことは頭に置いて進めてもらいたかった。このことは、課題を始めるにあたって話したことであるが、あらためてここで述べておきたい。

ひとつは、もちろん構造についてである。いわゆる荷重と呼ばれるものをいかに合理的に地面に伝えるか、ということが問題なのである。これは構造力学の話ではなく、(構造)

只野康夫 TADANO Yasuo

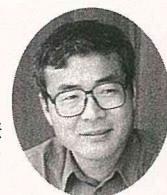
1939年 神奈川県生まれ

1964年 東京工業大学建築学科
卒業 日建設計入社

現在 日建設計東京本社副代表

主な作品：埼玉厚生年金休暇センター、

筑波国際科学博覧会テーマ館、豊洲センタービル、キヤノン下丸子本社、パシフィック横浜・国立横浜国際会議場



デザインの話である。この課題においては構造のディメンションをきちんと求めることより、その空間の中でスケールとしてバランスの取れた構造を見つけ出すことが大事なのである。したがって模型を使ったボリュームの確認、構造システムの検討、断面における構造のバランスのチェックなどを、機能的な平面計画と同時に進めなければならない。残念ながら今回のエスキスチェック時にはそれを行ってきた人はほとんどいなかった。

もうひとつは、敷地と建物との関係である。それぞれの敷地を実際に見て一体何を感じたのだろうか。自分が計画しようとしている建物がその敷地の中に見えていただろうか。巨大なスケールになることがわかっている計画では、それが引き起こす都市的な影響を考慮しなければならない。敷地におけるキーワードは何で、それをどのように解釈するかという自分自身のシナリオが必要なのである。

今回ここに掲載した5作品は、それぞれ特徴をもった興味ある作品である。これらを含めて短い期間にまとめ上げた興味あるいくつかの作品に出会えたことに少し安堵している。

空間を体験しよう。

もっともっと、建築を、都市を、興味をもってみよう。

そして、そのスケールを確認しよう。

講評

非常勤講師 木村克次

ここで言うまでもなく、大空間建築を設計する上で重要な課題は、その規模および使用目的に応じた、その周辺地域におけるシンボル性をどのように演出するかであろう。ある時代においては権威の象徴として発展してきた大空間建築構造ではあるが、現代に求められる要求はそのようなカリスマ性をもったものでもなく、ファシズム的なものでもない。もはや主人公は神や行政ではなく住民であり、むしろ穏やかな表現の中にいかに中央集権的な機能をこの住民のためにもたせるかである。

高田典夫 Norio Takata

1951年 東京都生まれ

1974年 東京工業大学建築学科卒業

1976年 同大学院修士修了 同大工学部助手(長津田計画室)

78~90 横総合計画事務所

90~91 レンゾ=ピアノ・ビルディング・ワークショップ・ジャパン

91~ ヘルム建築・都市・コンサルタント取締役

主な作品：中野坂上本町2丁目地区第1種市街地再開発('96年竣工予定)、関西国際空港旅客ターミナルビル、東京体育館、慶応義塾日吉図書館、都営多摩ニュータウン南大沢団地



近年大空間建築に対する設計コンペが多く行われている。そのあり方は自治体が国から助成金を受けるための手段として使われている場合が多く、本来住民がどのようなものを望んでいるか曖昧なものが多いように感じられる。建築家はその曖昧な点を形態的・機能的に具象化する役割を要求されている。そのことを怠り、単純な村おこし的な発想の域をでない場合、現在多くのものがそうであるように、さまざまな雑誌でも取り上げられた屋内イベント場が、最後にはゲートボール場と化してしまうのである。その意味で現代の建築家は過去における建築家よりも重責を負っていることを認識しなければならないと思う。

五嶋崇君の作品は、合理的か否かを除けば、構造的にもユニークな外観を形成しているものであり、構造家とともに参加したいと思わせる興味ある作品となっている。ただしプランを見るときれいにまとめすぎた感があり、将来の使用目的の多様化への適用性に疑問が残る。神原栄男君と米津正臣君の作品は、全体を覆う大屋根構造とその中に独立した諸室を配するという最も難しい計画に挑戦されている点は評価に値する。が、その回答としては若干もの足りない気がする。私自身の理解不足かもしれないが、区切られた空間をなぜ大屋根で覆う必要があるのか、示したプランが数多いフォーメーションの一例としてもなお疑問が残る。山口由美子君の作品は、キールアーチを架けて力の流れを明確にするというものであるが、藤沢や幕張に見られる構造形態と基本的に同じものとなっており、学生という自由な発想からもうひとつ工夫が欲しかった。鈴木美帆君の作品は、大屋根の外皮は文字どおり貝殻状になっており、多くの提出作品の中でもシェル構造として成り立つ可能性を秘めた少ない大屋根の形態を採用している。ただしこの作品の中ではこの外皮は構造体ではなく仕上げ材として取り扱われているのが残念である。

最後に、学生諸君も参考にしたであろう現在急激に増えつつある大空間建築は、単にコ

木村克次 Katsuji Kimura

1940年 秋田県横手市生まれ

1964年 日本大学卒業

1993年 東京工業大学にて工学博士取得

現在 東急建設構造設計部長



ンペで優秀作品と評価されたにすぎず、それが現在あるいは今後どのような役割を果たしていくのか、5年後あるいは10年後に住民たちがだすであろう答えを確認していくことも、学生諸君を含むわれわれ建築に携わる者にとって重要な役割であろう。

講評

非常勤講師 久保寺 勲

東京工業大学建築学科3年生の建築設計製図第三課題「大空間建築」の作品をすべて見せていただいた。全体的に感ずる点は、でき映えの良否にかなり大きなバラツキが見られることである。当課題は3年連続して見せていただいているが、年々バラツキが大きくなっていくように感じる。これは各年の学生気質の変化によるものかもしれないが、世に優秀な建築家を送り出す目的からは、むしろ好ましい現象と思う。大空間建築の計画に際して、まず全体的な空間イメージを大まかに設定した上で、次に各々の目的をもたせた空間構成要素を、バランスよく組合わせて整合性のある大空間に構築してゆく、センスに富んだ作品がいくつか認められた。多分これらの鋭い感性は生来身につけている素質に負うところ大で、学習や訓練で磨き上げるには大変な努力を要するようになる。

しかし残念なことにこれらの作品が力学的に不可能な構造となっている例も多い。力学的にバランスのとれた構造計画は、1Gの重力加速度下で生きてきた幾世代にも渡る本能的な経験から、構造力学の基礎的な知識さえ身につければ、高度な解析技術を学習しなくても得られる感性であると思う。

したがってせっかく優れた空間に対する感性を備えている学生は、もっと力学の基礎を学び、部材のアクセントや力の流れに対する感性を身につけるべきであると切に感じる。力学的に成立しない設計は、どんなに優れた意匠計画もすべてを無にするに足る欠陥であり、優れた空間に対する感性や才能も宝の持ち腐れに帰すことになる。

久保寺 勲 Isao Kubodera

1944年 長野県塩尻市生まれ

1969年 名古屋工業大学建築学科大学院修士修了

1969年 巴組鐵工所(現巴コーポレーション)建築構造設計部

1983年 同構造設計部部長

1986年 東京工業大学にて工学博士取得

1989年 巴コーポレーション取締役

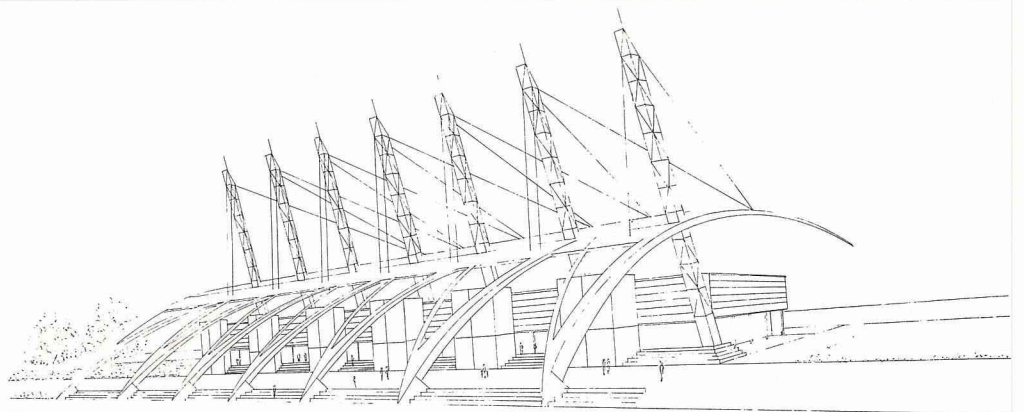
1993年 同常務取締役

1994年 同代表取締役専務、現在に至る。

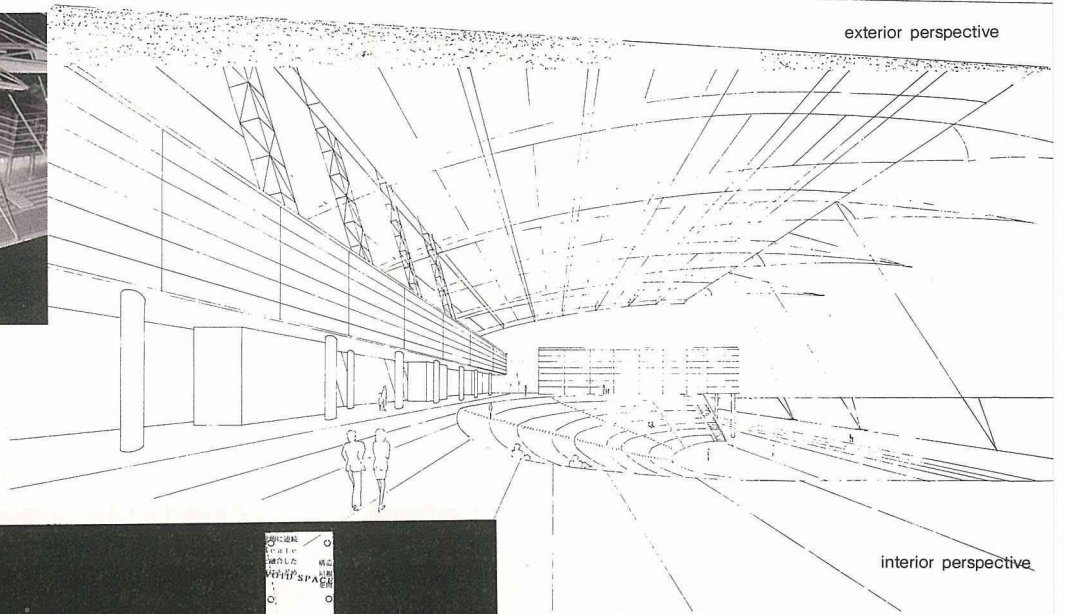
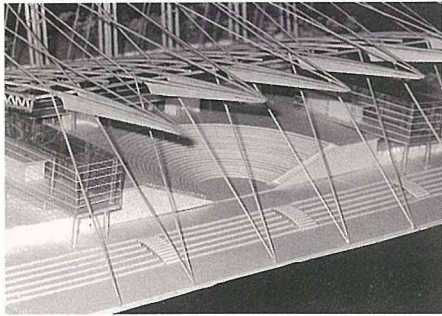


Tatsumi Plaza

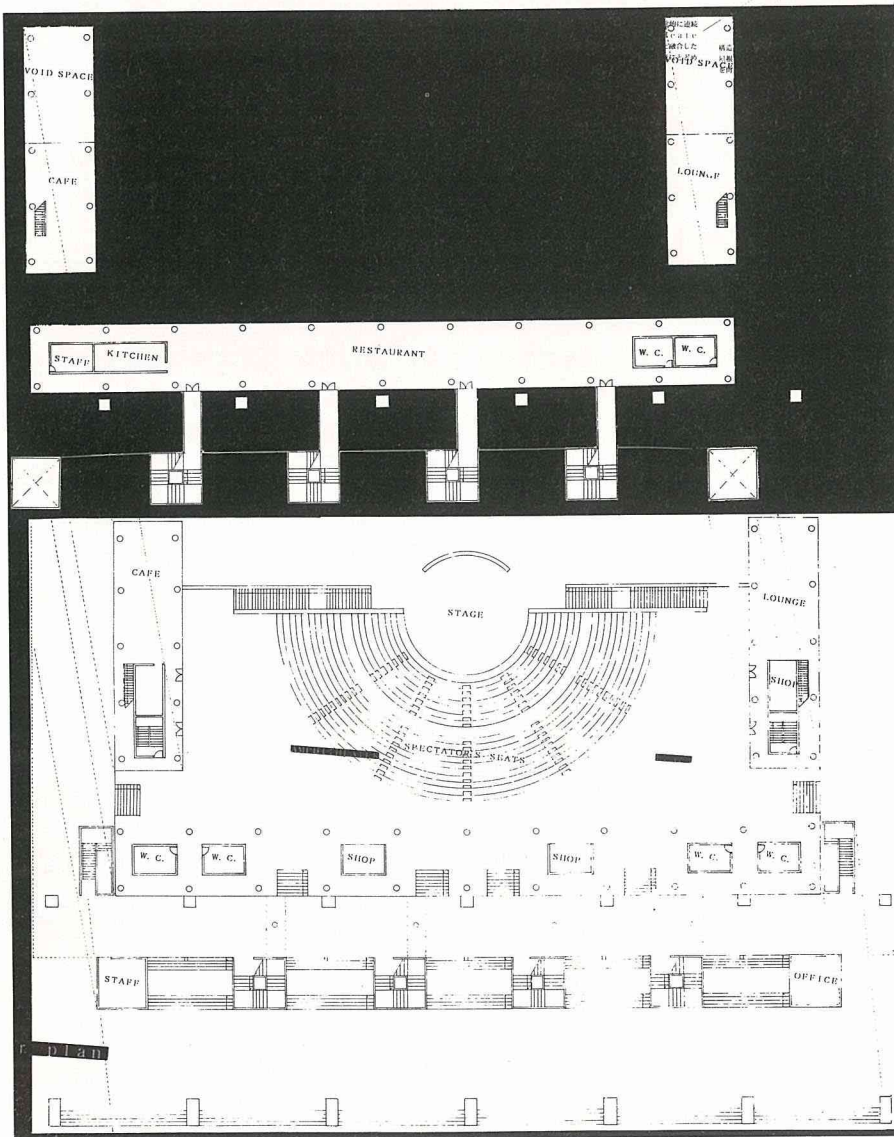
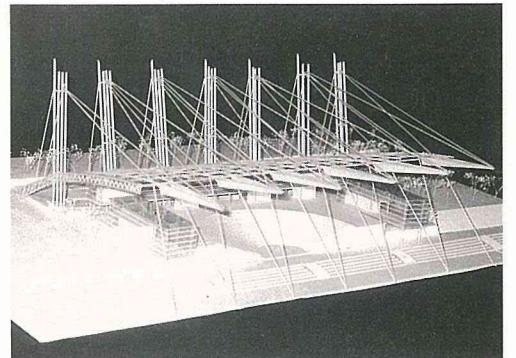
神原栄男
Yoshio Kanbara



exterior perspective



interior perspective

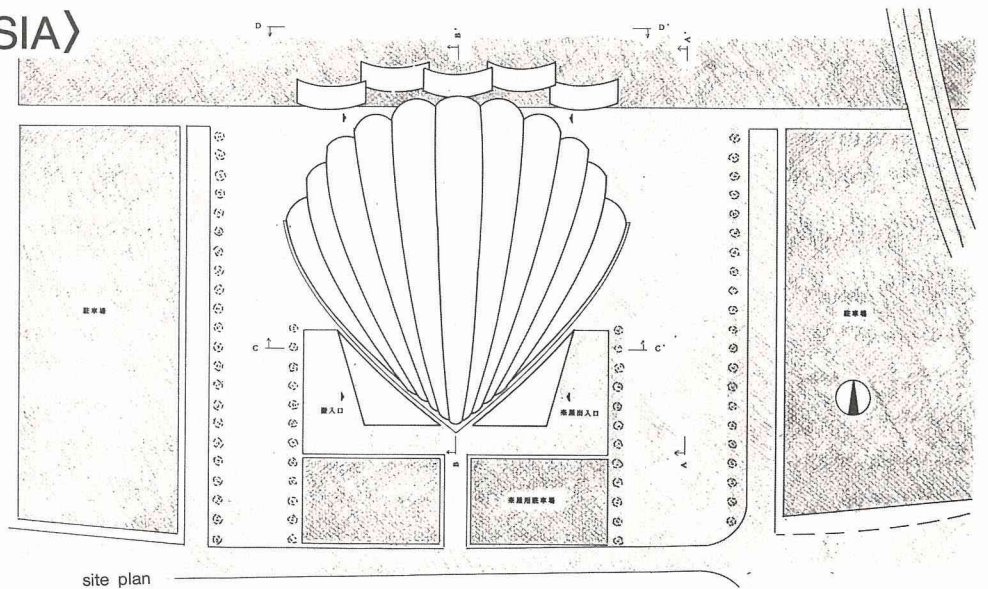
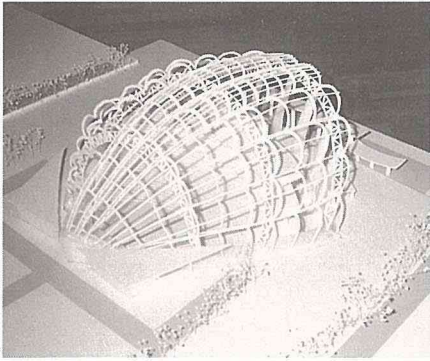


1st floor

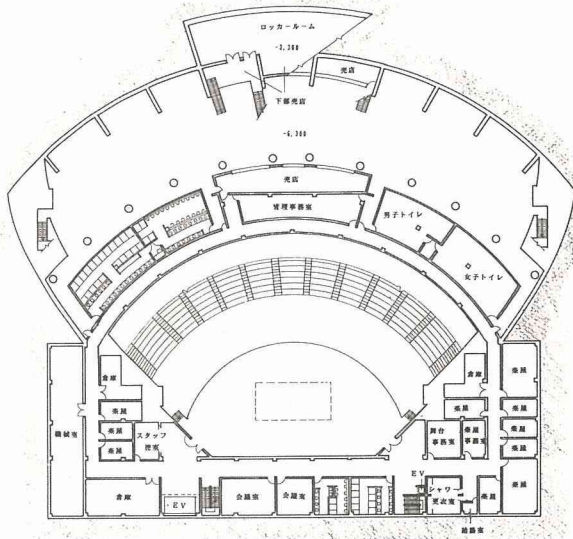
■空へ高く突き上げる7つの鉄骨の塔、海へ迫り出す屋根、海と連続したamphitheater…人びとの活動を誘発する装置である。■今日の東京湾における臨海開発地域は、人びとが余暇を享受できるようなエリアとして成長している。人びとはこのエリアを訪れることで、余暇のあり方を再認識する。■辰巳地域は、臨海副都心開発地域である有明から連続したひとつのレジャーエリアを形成する。そして、夢の島公園と緑道公園と隣接したplazaにおけるamphitheaterは、海に臨んだ開放的な空間であり、人びとが集うeventspaceである。また、このエリアを訪れた人びとの安らぎの場であり、時々刻々と変化する風景と同化する。■人びとは海と視覚的に連続であり、このamphitheaterにおいて、eventを海と融合したひとつのsceneとして記憶にとどめるであろう。

Concert Hall<FANTASIA>

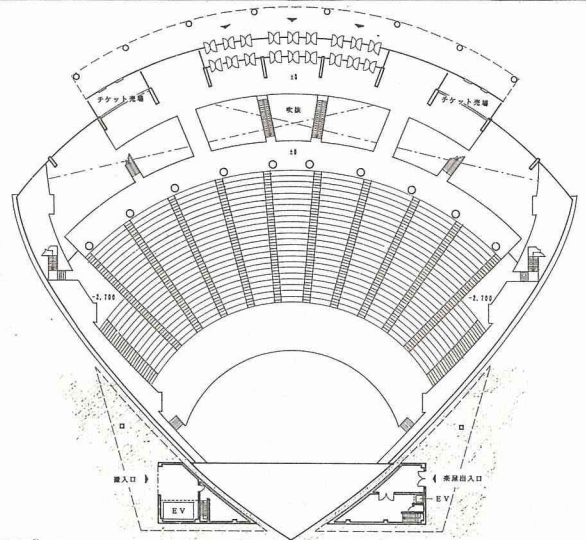
鈴木美帆
Miho Suzuki



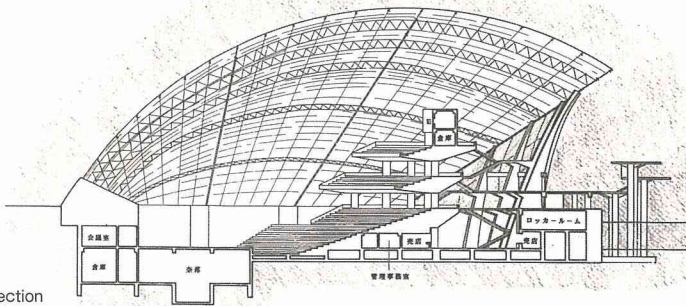
site plan



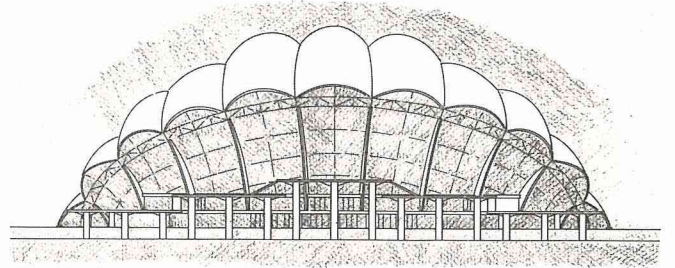
basement floor



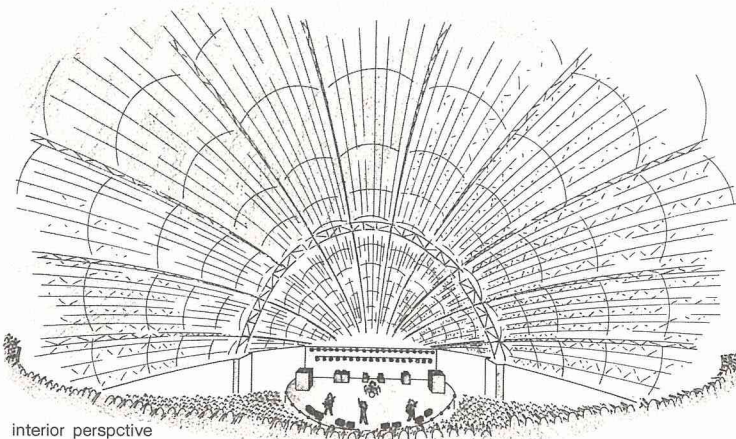
1st floor



section



elevation



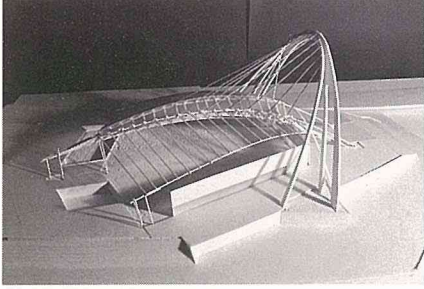
interior perspective

■周囲に住居が少なく、交通アクセスのよい辰巳にコンサートホールを設計した。この辰巳という敷地の特徴は、すぐ脇を鉄橋や高速道路が走っており、電車や車の中から非常に多くの人々がここに建つ建築を目にする、ということだと思った。■そこで、ホールの屋根をガラス張りにして、観客が野外コンサートのような雰囲気味わうだけでなく、ライブの最中にガラスの屋根にさまざまな色のスポットライトが反射

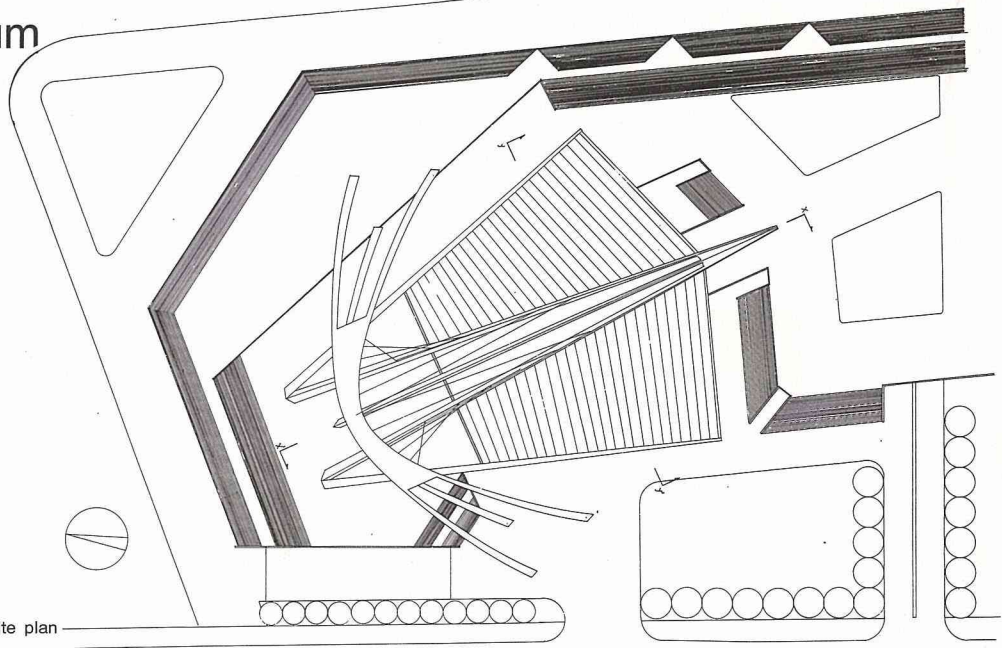
される幻想的な光景を、外から眺める人にも味わえるようにした。■このホールはアーチの上に波形の小梁をのせて立体感のある貝殻を形づくっており、観客は貝殻の口から中に吸い込まれ、宙に浮いた観客席にたどりつく。水の上に張り出したホワイエは、貝殻のホールに向かって打ち寄せる波をデザインしており、ライブ開始前のひと時を楽しめるようになっている。

Tsukudajima Gymnasium

五嶋 崇
Takashi Goshima



site plan

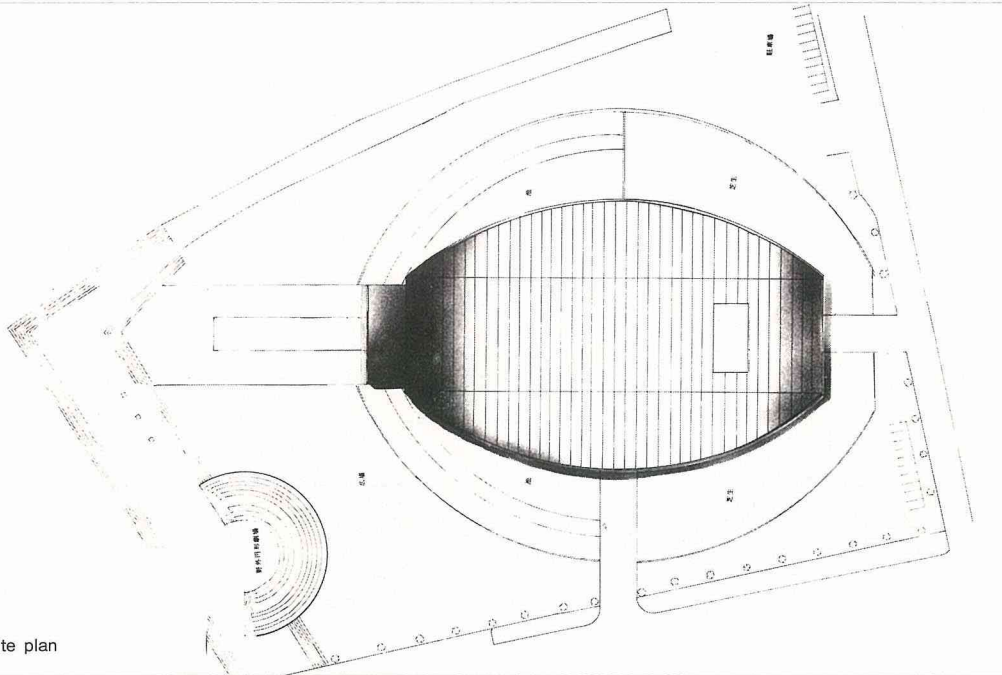


Riverside Hall

山口由美子
Yumiko Yamaguchi



site plan

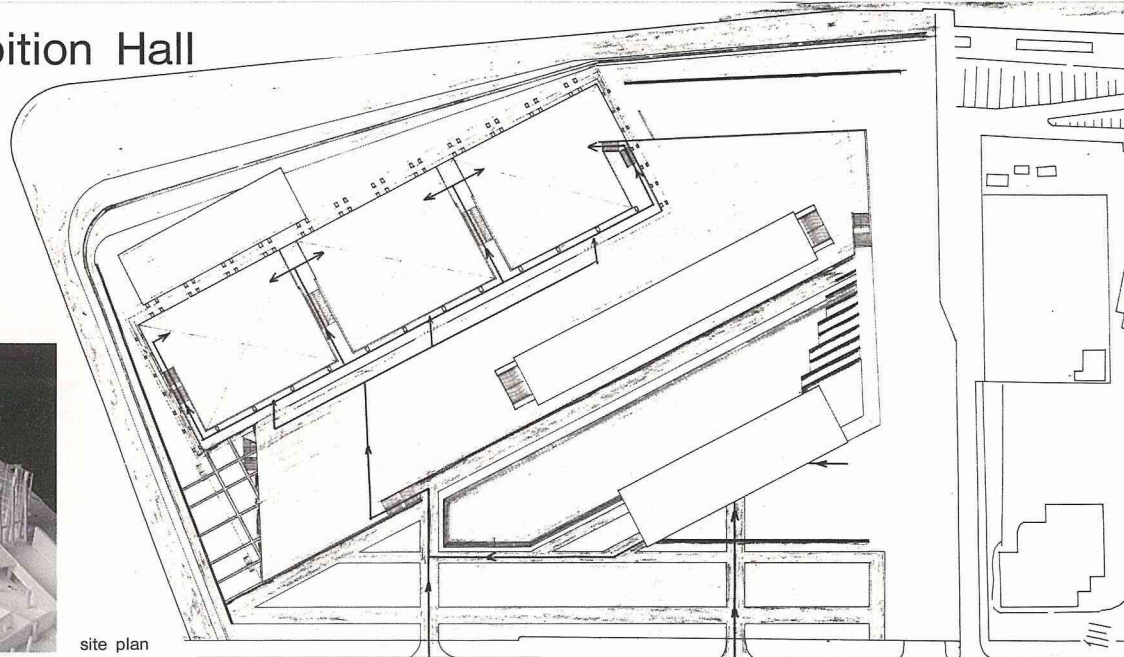


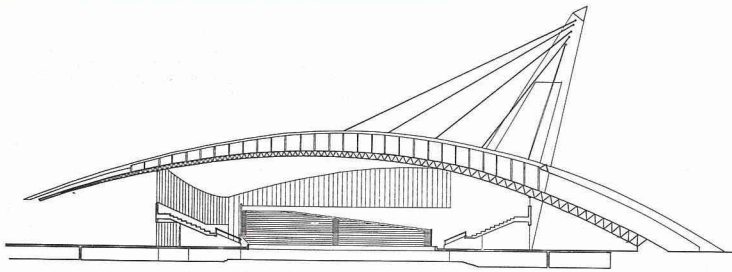
Tsukishima Exhibition Hall

米津正臣
Masaomi Yonezu

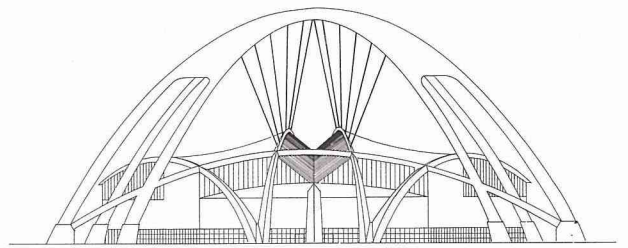


site plan

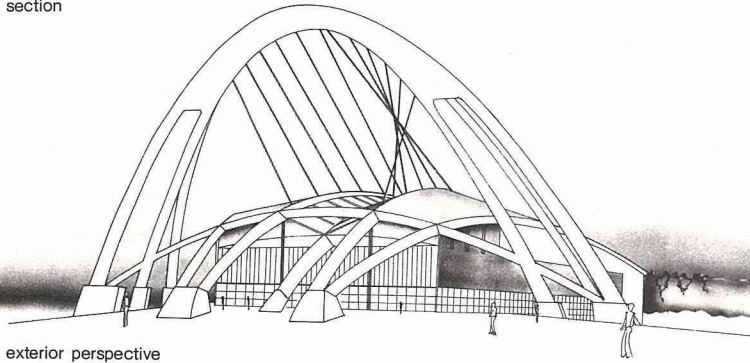




section



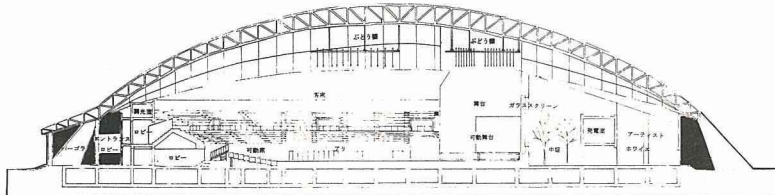
north elevation



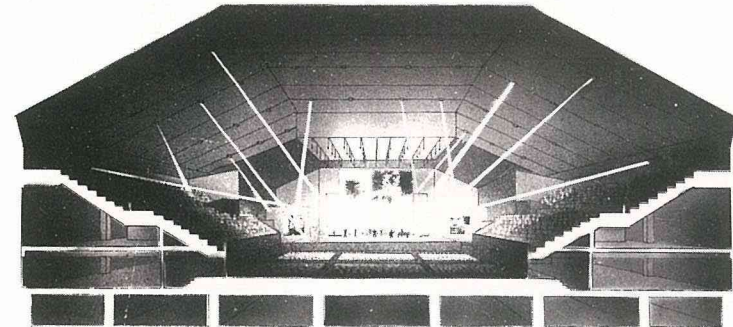
exterior perspective

■古い街並の続く下町から、高層住宅の立ち並ぶ近代的な都市へ生まれ変わってゆく大川端リバーシティ。この地域の住民たちの生活は、さまざまな制約や条件の下で営まれている。それゆえに他人との交流の場も自ずと狭められ、年代や地域の枠を超えた交流をもつ機会の乏しい都市社会を生み出してしまふ。■そこで住民が気軽に利用することの可能なスポーツアリーナを計画し、流動的で希薄になりがちな人びとの交流を活性化させることを意図

した。■外観の特徴として高さ50mのアーチがあげられるが、これは隅田川からの遠景や中央大橋からのアプローチの際に、人びとに「新たな都市」へ踏み入れることを意識させようとしたものである。■構造面では、一端を地面に固定したキールを吊り上げるというメインアーチの形式が、ダイナミックな外観と海側に開かれた内部空間をつくりだした。なお、吊構造の吹上対策として浮かしたキールの端をケーブルで補強した。



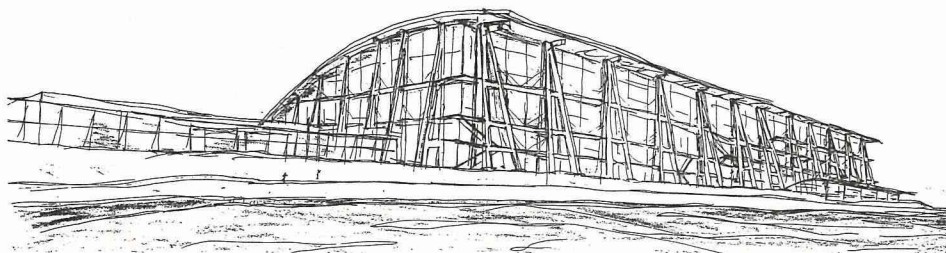
section



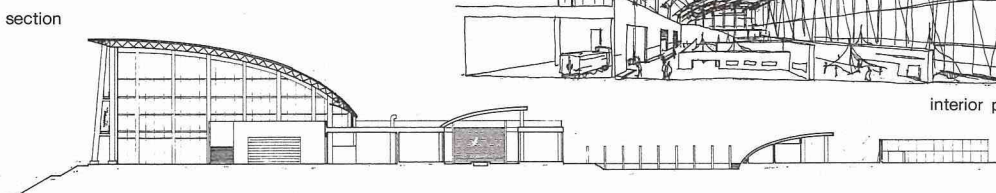
interior perspective

■近年の音楽イベントでは大規模なコンサートが頻繁に行われ、それらは武道館や横浜アリーナ、代々木体育館などのスポーツアリーナで開催されている。そこで、5000人以上の人びとが演奏者と一体となって時間や空間を共有できる充実した舞台、音響を備えたアリーナスタイルのコンサートホールを考えた。コンサート以外でも、スポーツや展示ホールなどの利用も可能な多目的イベントホールとしても対応できるように、アリーナ部分の席は可動式とし、1階部分を平土間としている。■敷地は、大川端リバーシティの一面で、隅田川に2方向面している。ここは、都心からのアクセスもよく、近

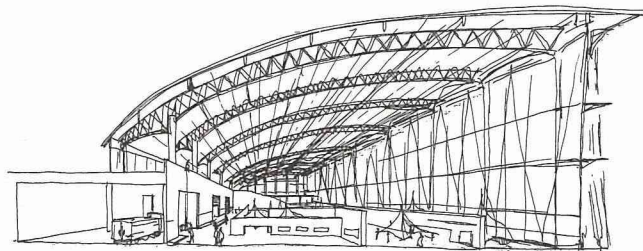
年中高層住宅が続々と建てられ再開発が盛んに行われている。このような、これから期待される月島にコンサートホールを建てることで新しいシンボルとして、この地をますます活気づける手助けとなることを期待した。■構造としては、2本のメインアーチを4隅に配した巨大な4本の柱で支え、アーチ部分を大屋根として架けている。さらに、サブアーチを両側に傾けて客席部分を覆っている。夜景の演出効果を上げるために、屋根の下のロビ一部分に大きな開口を設けた。舞台の奥にあるガラススクリーンを通して中庭が見え、舞台装置の一部としても使用できる。



exterior perspective



section



interior perspective

■都心の雑踏から離れた静かな月島に、多くの人を集める大空間建築を計画する。主となる展示場に加え、それと絡み合うようにさまざまな店舗やレストランを配置し、さらに多目的に使える広場や中庭、美術館などを計画した。都心からやってきた人びとが、長い時間を過ごせるような、総合的な計画が必要だと考えたのである。■この地域の交通の便の悪さを考え、車で訪れる人にも配慮した駐車場やエントランスを計画。展示場からの川への視界を遮らないよう、搬入路を施設の内側に組み込んだ。■フラットな広場では、フリーマーケットやスポーツなどさまざまなイベントに対応できるようにしたり、ファサードのデザインではマーケットから見える部分や、川辺や対岸から見える部分との変化を意識して、その周辺でたむろす人びとに、多様な表情を見せるようにと考えた。

学生コンペ 作品紹介

Competition Winners from T.I.T.

コンペへの挑戦 教授 仙田 満

コンペの時代ともいうべき状況が社会的に到来した。設計者がコンペやプロポーザルによって選定されることが多くなっている。若い人はコンペによって設計のチャンスをつかまえることができる。そういう点では若者はコンペに積極的に挑戦せねばならない。

学生を対象としたコンペは、日本建築学会のコンペをはじめ数多くある。また実施を対象としたものでも学生や大学院生が応募することも可能なものもでてきている。近年東工大の学生、院生のコンペの入賞者も多くなった。学生、院生がコンペに挑戦し、腕試しすることは貴重な体験である。

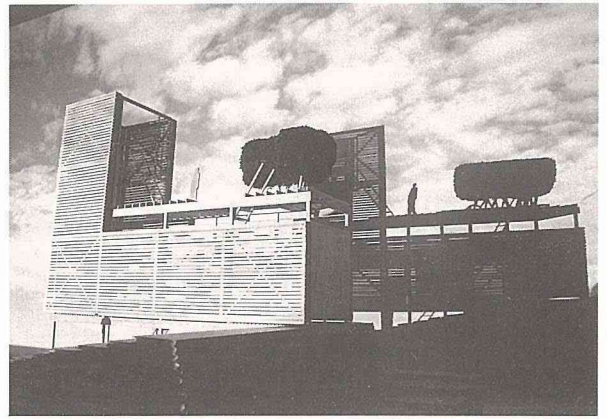
『華』も通常の課題の他に、コンペの入賞者のための紹介を本号から行うこととした。これがまた刺激となって多くの学生が積極的に挑戦し続けることを期待したい。

空のある 住まい

Living with the Sky

コンペ名：空のある住まい
主催：日新工業株式会社
審査員：大高正人（委員長）
黒川紀章
鈴木了二
芦原太郎
内藤 廣
相臺淳吉

提出日：1995年10月4日



都市の中で周囲に塀を巡らせ土地に執着する住宅に、空は獲得できない。

■1等

伊藤泰彦 仙田研究室修士2年
Yasuhiko Ito

斉藤和也 仙田研究室修士2年
Kazuya Saito



■「プランの断面化／土地からの遊離」

一般的な住宅平面の構成を断面に用いて縦のボリュームに住宅をおさめ、土地からの呪縛から逃れる。

■「都市に帯を挿入する」

細く長い敷地に、スパン3mのフレームが建ち並び、地盤面はパブリックスペースとして開放され、都市の通路空間となる。

■「空の立面」

フレームには2種のパネルが取り付け、いっぽうの、ハーフミラーのパネルに通行人は虚像を見る。

■「プログラムと構成」

もういっぽうのパネルに収納や水まわりなど、設備が取り付け、パネルは住み手によって決定され、住宅のプログラムの変化に応じて付け替わる。

3世代家族を つなぐキッチン

Kitchen Serving Three Generations

コンペ名：第3回C.H.C.マーベル

デザインコンペ

主催：C.H.C.マーベル

審査員：林雅子（委員長）

曾根真佐子

石橋利彦

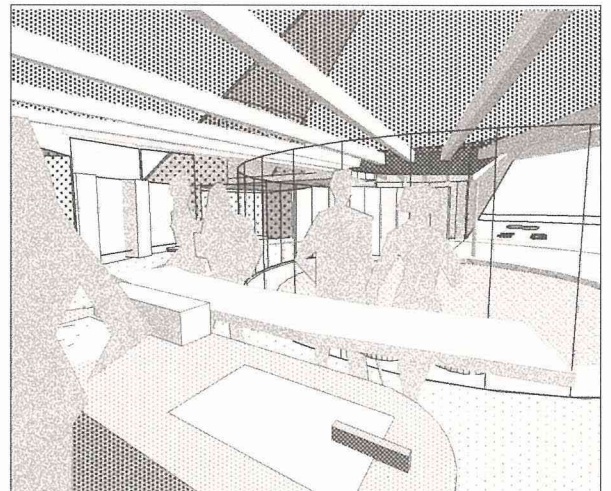
提出日：1995年6月30日

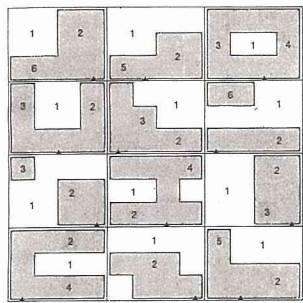
今日の家族はそれぞれ各々の社会に属しながら、それぞれのリズムで生活してはいるが、日がのぼれば、朝起きて、朝食を食べ、日が高くなれば、お腹がすいたと、昼食を食べ、日が沈めば、夕食を囲んで、団らんする。皆同じように“ハラどけい”をもち、“ハラどけい”で繋がっている。

このキッチンは時計仕掛けで可動することで、時間の変化とともに空間が変化し、各シチュエーションに適した空間の広がり、キッチンに対する親近感を生みだす。

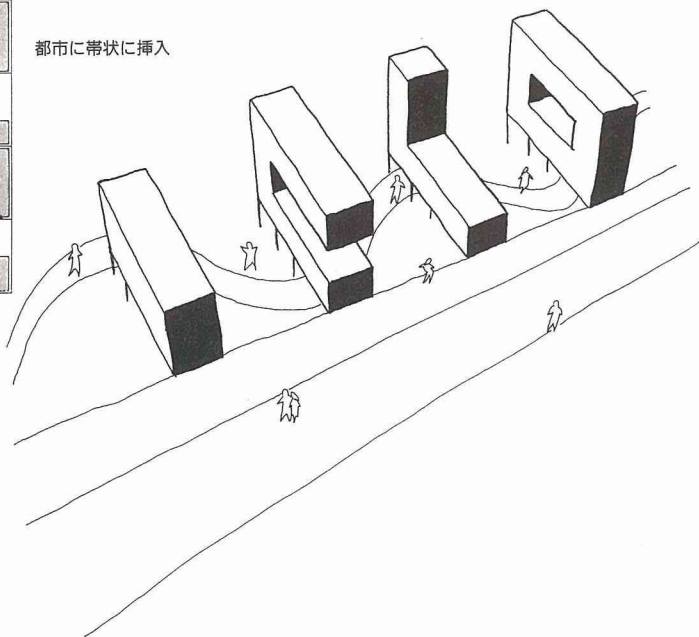
■銀賞

藤井正喜 八木研究室修士2年
Masaki Fujii





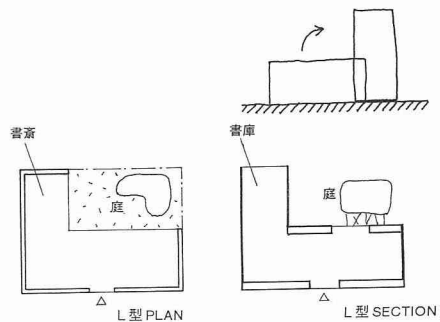
都市に帯状に挿入



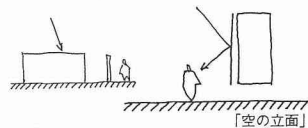
住宅の空間構成パターン

- 1 庭
- 2 リビング
- 3 和室
- 4 個室
- 5 書庫
- 6 倉庫

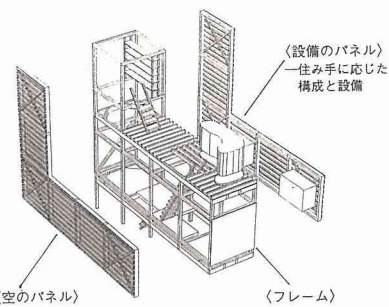
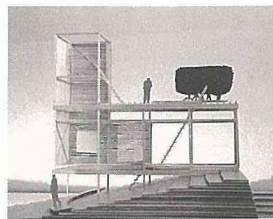
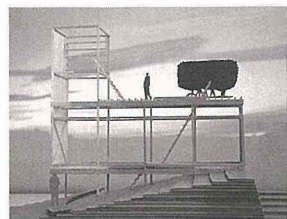
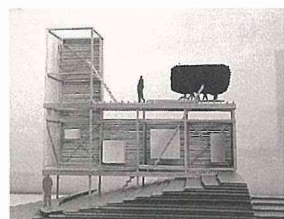
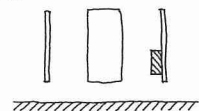
1 平面を断面に起こす



2 地盤面と空の公共化



3 空のパネル/設備のパネル



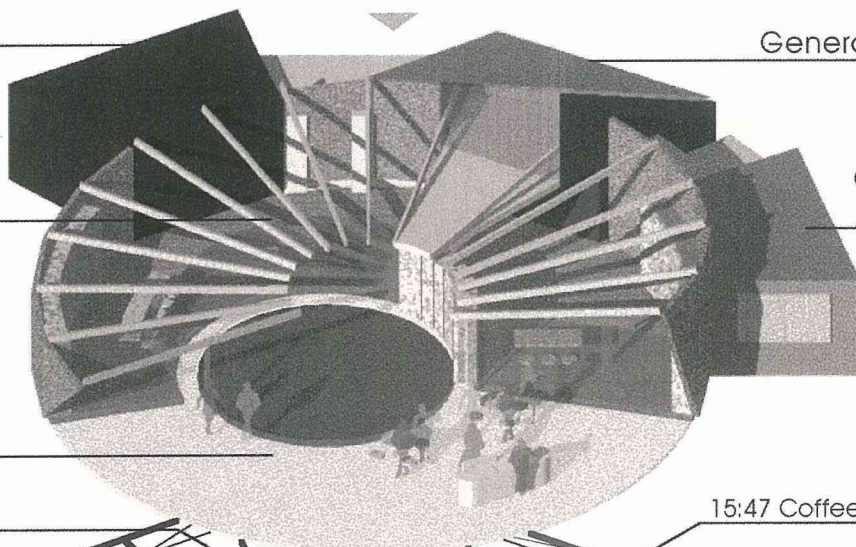
Generation1's Room

Generation3's Room

Kitchen

Generation2's Room

Terrace



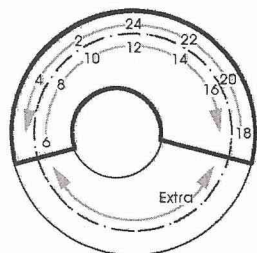
12:06 Lunch

15:47 Coffee Break

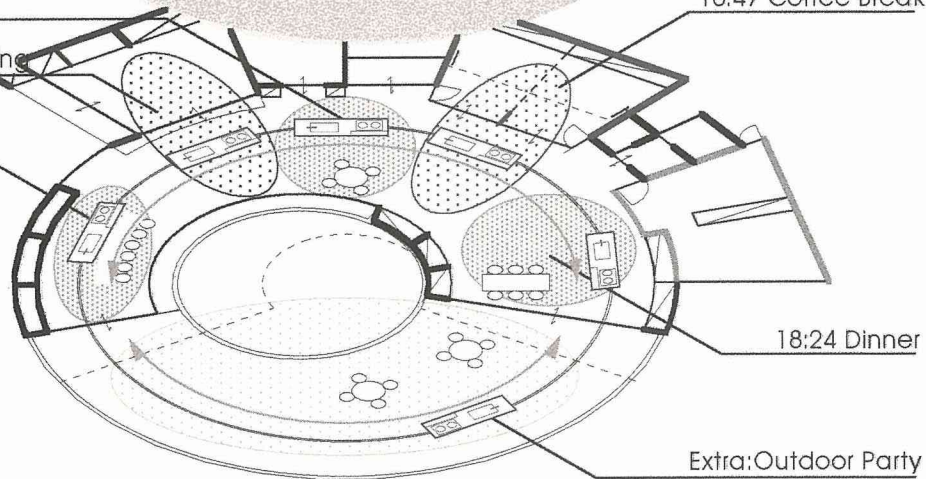
09:55 Neighbor Coming

07:34 Break Fast

18:24 Dinner



Clock Routine



Extra:Outdoor Party

単一性／複合性

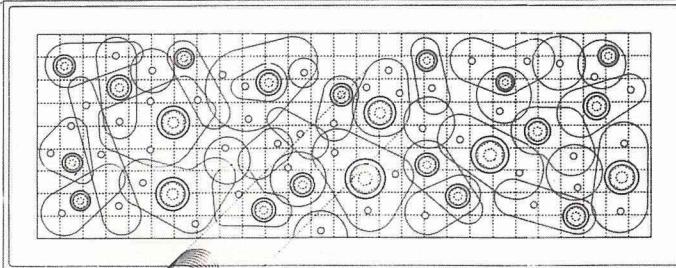
Simplicity & Complexity

コンペ名：新建築住宅設計競技
 主催：新建築社
 審査員：ジャン・ヌーヴェル
 提出日：1995年10月16日

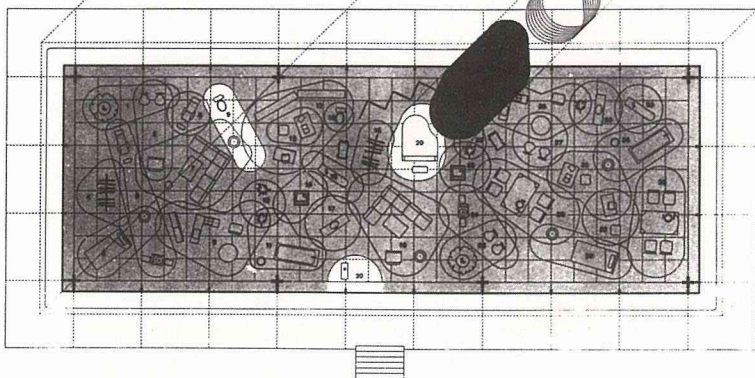
■1等
小林真紀 宮本研究室修士1年
 Maki Kobayashi
永井 牧 東京理科大学94年卒
 Maki Nagai



roof plan

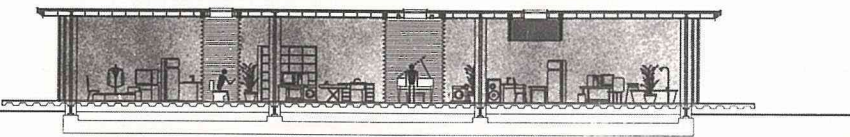


plan

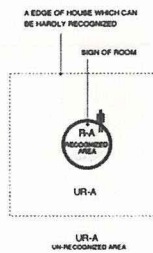


単一の座標，複合化される記号
 認識空間と非認識空間

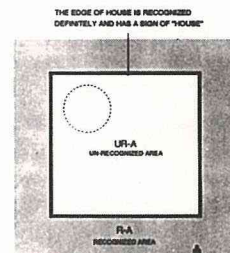
■一般に住宅は，単一的な機能に基づく概念がある「部屋」の複合化によって成立する。しかし，ここで提案される住宅は，住宅内のあらゆる座標上の物理的空間を共有することによって，予期せぬ複数の記号（＝行為）を許容する「部屋」の概念を解体することをもくろんだ。住宅内のある座標空間には複数の記号があり，固有の機能はない。時間によって，異なる住人によって，空間の意味は絶えず変化し，記号は常に解体され続け，複合化される。「部屋」という記号は「認識領域（R-A）」と「非認識領域（UR-A）」の境界の表現であり，機能を細分化し，住宅の空間を分解するものでもない。■プレゼンテーションの方法論としては，固定された空間のイメージを与える模型写真や，パースなどの手法はあえて避け，ハードウェアとしてのデザインではなく，ソフトウェアとしての住空間のシステムの表現に重点をおいた。



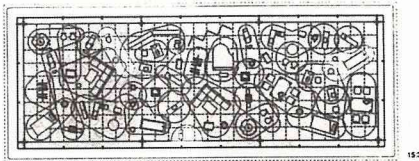
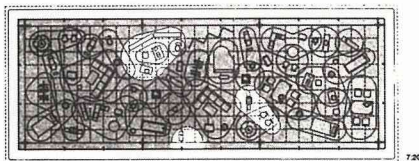
single coordinate, composite sign
 recognized area and un-recognized area



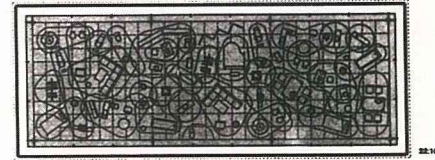
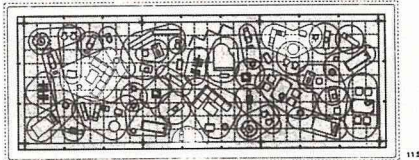
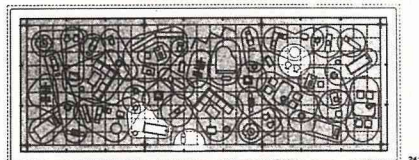
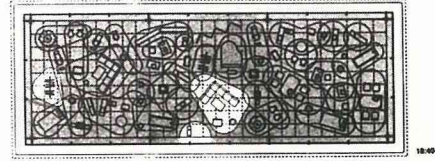
(Fig. 24) know with you



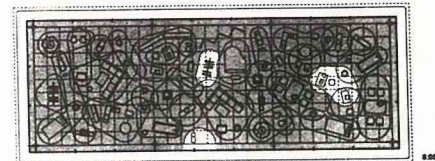
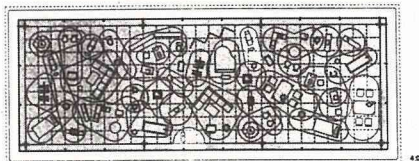
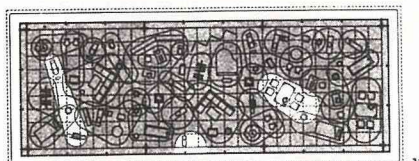
(Fig. 24) know without you



The space that is a bathroom at 8:50 is space same as space that is a kitchen at 9:20.



Coordinate space meaning a living room for person A is a lavatory for person B.



■入賞

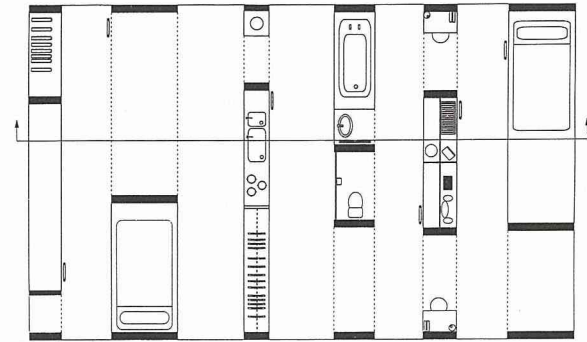
太田啓介 坂本研究室修士1年
Keisuke Oota

芝田義治 藤岡研究室修士1年
Yoshiharu Shibata

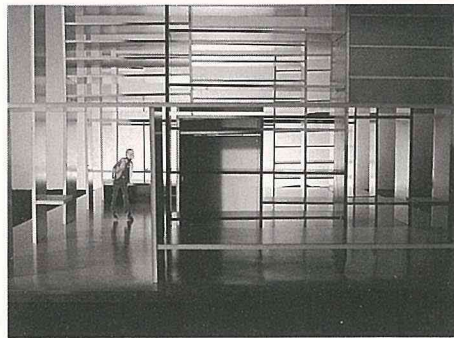
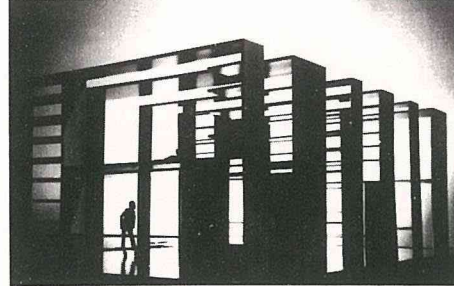
中鉢朋子 坂本研究室修士1年
Tomoko Chubachi

協力

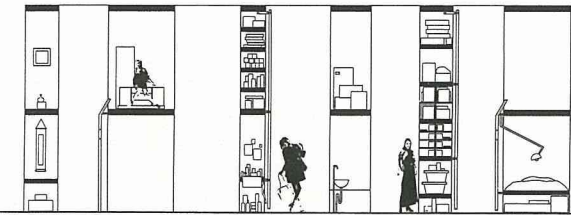
梅野圭介 仙田研究室修士1年
Keisuke Umeno



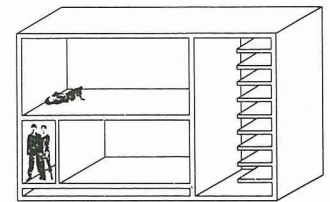
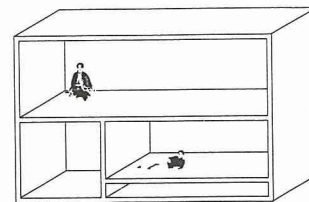
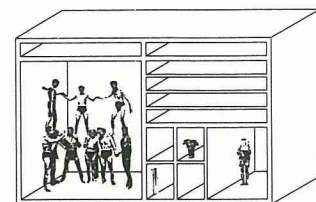
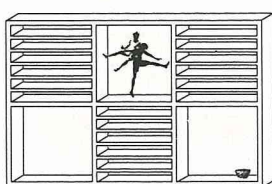
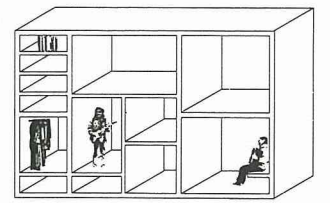
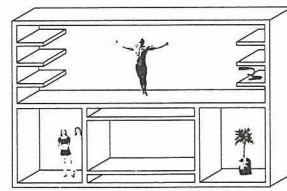
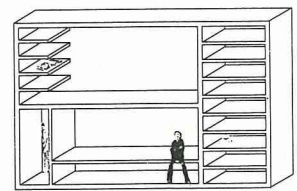
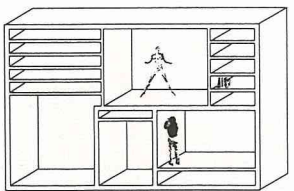
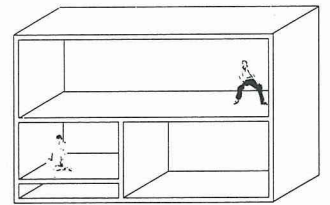
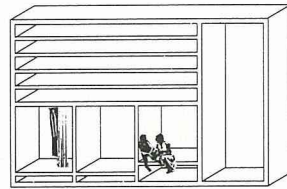
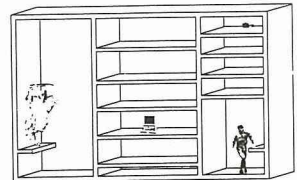
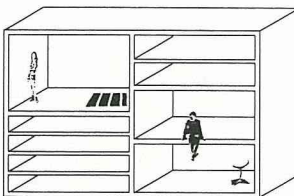
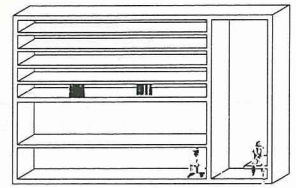
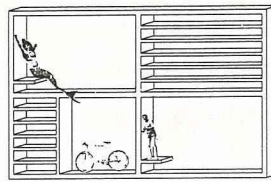
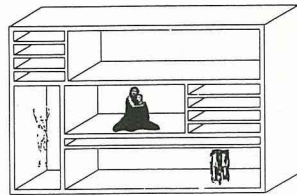
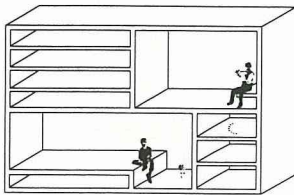
example plan



この案は、ものに囲まれたわれわれのライフスタイルから「棚」に注目し、複数の棚がつくりだす系（システム）を建築の骨格とする。個々の棚の奥行きや棚板の配列は、収納する物品や住み手の行為に応じてさまざまに決められる。ここでの複数の棚による系は、屋根や外壁などの荷重を担うハニカム状の構造体、ベッドや机、書棚などの家具、空間の緩やかな間仕切り、水回りスペースや個室といった複数の役割を果たす。



example plan



大切な人に贈る 小さな小さな家

Tiny House for Someone You Love

コンペ名：大切な人に贈る小さな小さな家
主催：リビングデザインセンターOZONE
審査員：内田 繁 柏木 博 沢田知子
島森路子 妹島和世

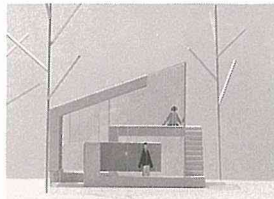
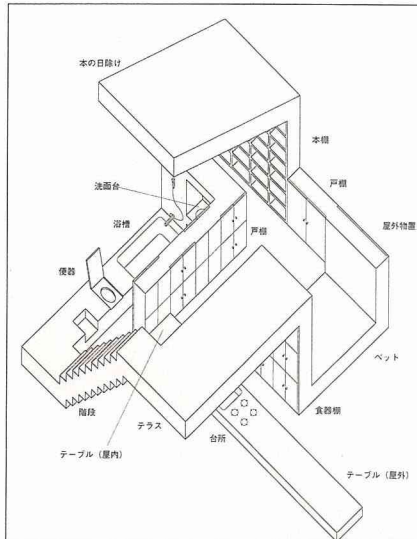
提出日：1995年7月31日

賞金：大賞 1点300万円

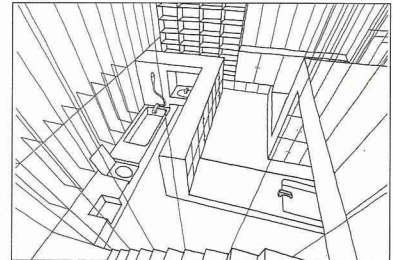
準大賞 2点各50万円

入選 17点各10万円

■大賞
足立 真 坂本研究室博士1年
Makoto Adachi



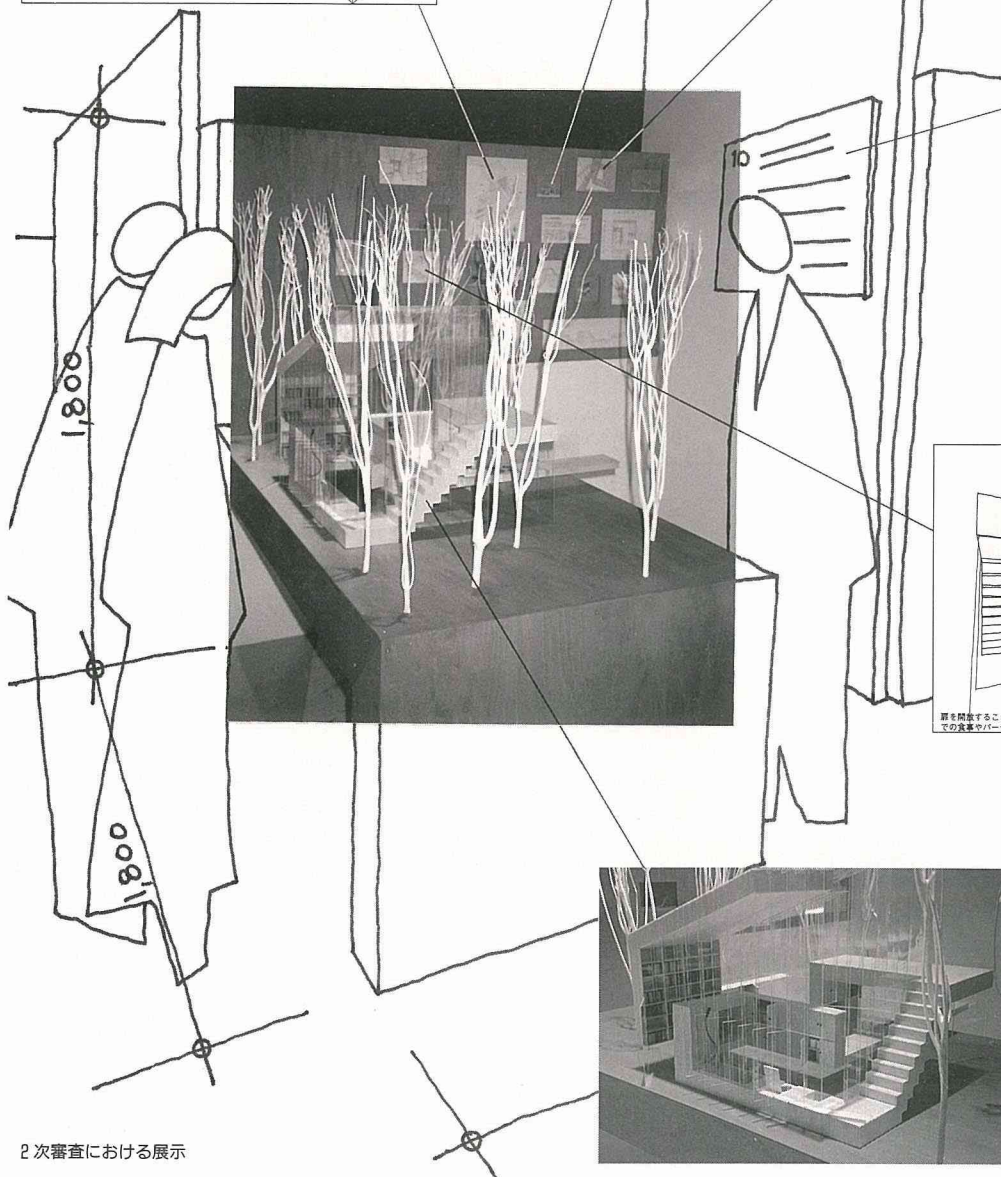
東立面



階段より見下ろす

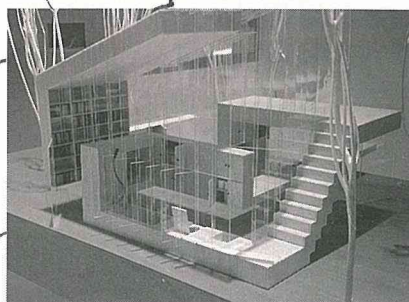
小さな小さな別荘

■私の両親を住人として想定した30㎡弱の小さな小さな家(別荘)である。
■最小限の家だから、余分なものは入らない、人目の気にならない森の中に、そこでの生活を補助するための家具をひとつ置く。
■それに沿うように雨風を凌ぐためのガラスの殻を架けることによってこの家につくられる。
■生活と密接に絡み合うような全体は、個人の家としての完結性と、大自然の中での開放性を同時に成立させている。
■小さいけれど、自然の中で余暇を過ごすにはとても快適である。



扉を開放することで台所は外壁と一体化し、屋外下の食事やパーティーも楽しめる。

外から台所を見る

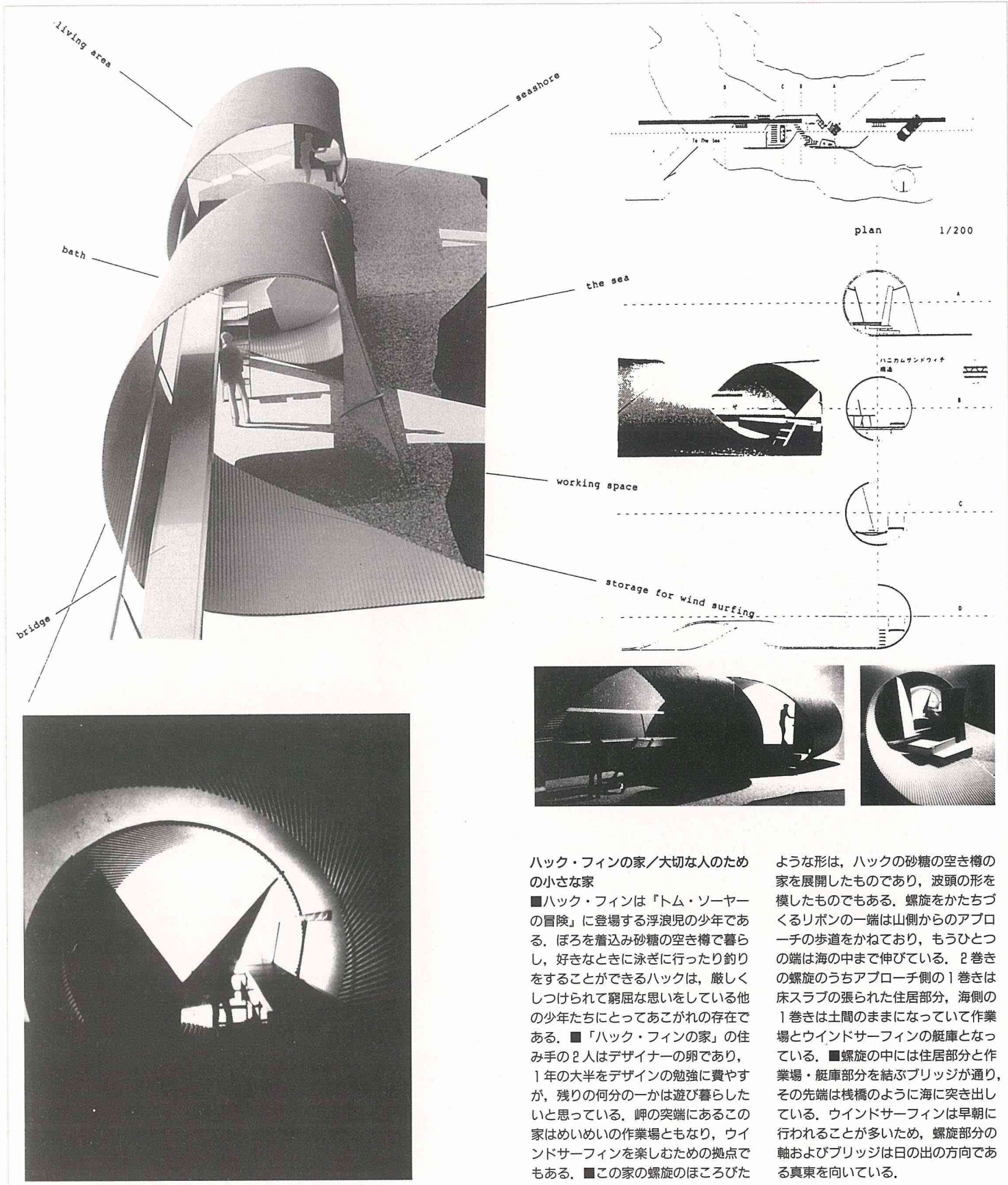


模型写真

2次審査における展示

■入賞
梅野圭介 仙田研究室修士1年
 Keisuke Umeno

中鉢朋子 坂本研究室修士1年
 Tomoko Chubachi



ハック・フィンの家/大切な人のための小さな家

■ハック・フィンは『トム・ソーヤーの冒険』に登場する浮浪児の少年である。ぼろを着込み砂糖の空き樽で暮らし、好きなときに泳ぎに行ったり釣りをすることができるハックは、厳しくしつけられて窮屈な思いをしている他の少年たちにとってあこがれの存在である。■「ハック・フィンの家」の住み手の2人はデザイナーの卵であり、1年の大半をデザインの勉強に費やすが、残りの何分の一かは遊び暮らしたいと思っている。岬の突端にあるこの家はめいめいの作業場ともなり、ウインドサーフィンを楽しむための拠点でもある。■この家の螺旋のほころびた

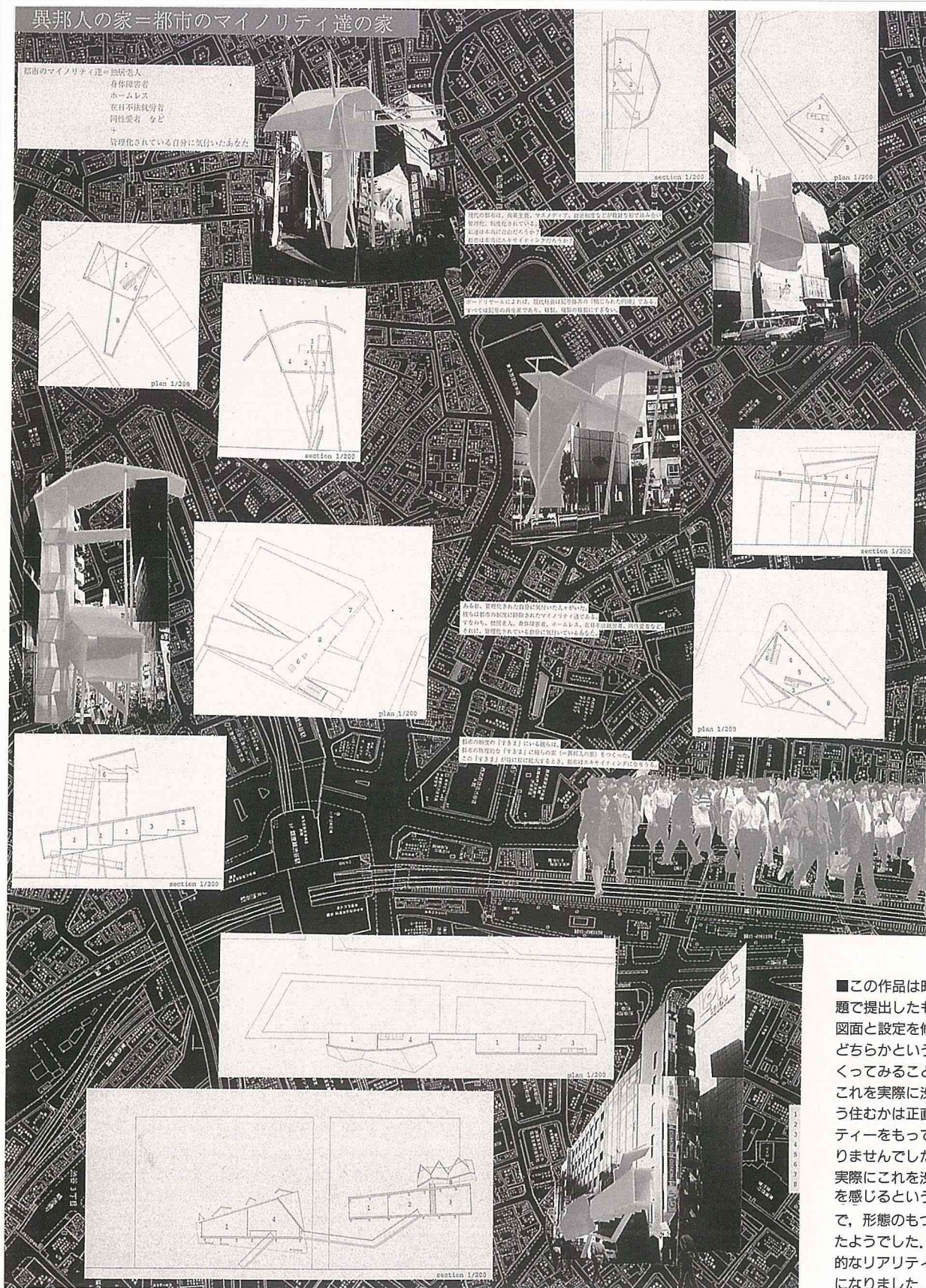
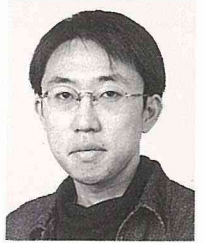
ような形は、ハックの砂糖の空き樽の家を展開したものであり、波頭の形を模したものである。螺旋をかたちづくるリボンの一端は山側からのアプローチの歩道をかねており、もうひとつの端は海の中まで伸びている。2巻きの螺旋のうちアプローチ側の1巻きは床スラブの張られた住居部分、海側の1巻きは土間のままになっていて作業場とウインドサーフィンの艇庫となっている。■螺旋の中には住居部分と作業場・艇庫部分を結ぶブリッジが通り、その先端は栈橋のように海に突き出している。ウインドサーフィンは早朝に行われることが多いため、螺旋部分の軸およびブリッジは日の出の方向である真東を向いている。

異邦人の家

House for L'Etranger

コンペ名：DYNAX建築学生・設計大賞95
 主催：ダイナックス
 審査員：宮脇 禮（委員長）
 堀池秀人 大江 匡 竹山 聖 團 紀彦
 提出日：1995年9月20日
 賞金：大賞 1点 150万円
 準大賞 2点 各30万円
 優秀賞 7点 各10万円

■準大賞
安森亮雄 坂本研究室4年
 Akio Yasumori



■この作品は昨年後期の竹山先生の課題で提出したもの（華10号に掲載）を、図面と設定を修正して頂いたものです。どちらかという一度形態を自由につくってみることに主眼をおいたもので、これを実際に渋谷につくることや、どう住むかは正直言ってそれほどリアリティーをもって考えていたわけではありませんでした。公開審査のときにも実際にこれを渋谷に建つことには疑問を感じるという声が聞かれたいっぽうで、形態のもつ象徴的な面が評価されたようでした。■この課題以降、社会的なリアリティーを冷静に考えるようになりました。

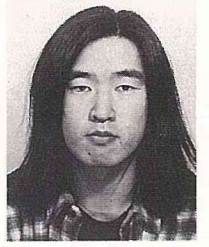
■優秀賞
梅野圭介 仙田研究室修士1年
Keisuke Umeno



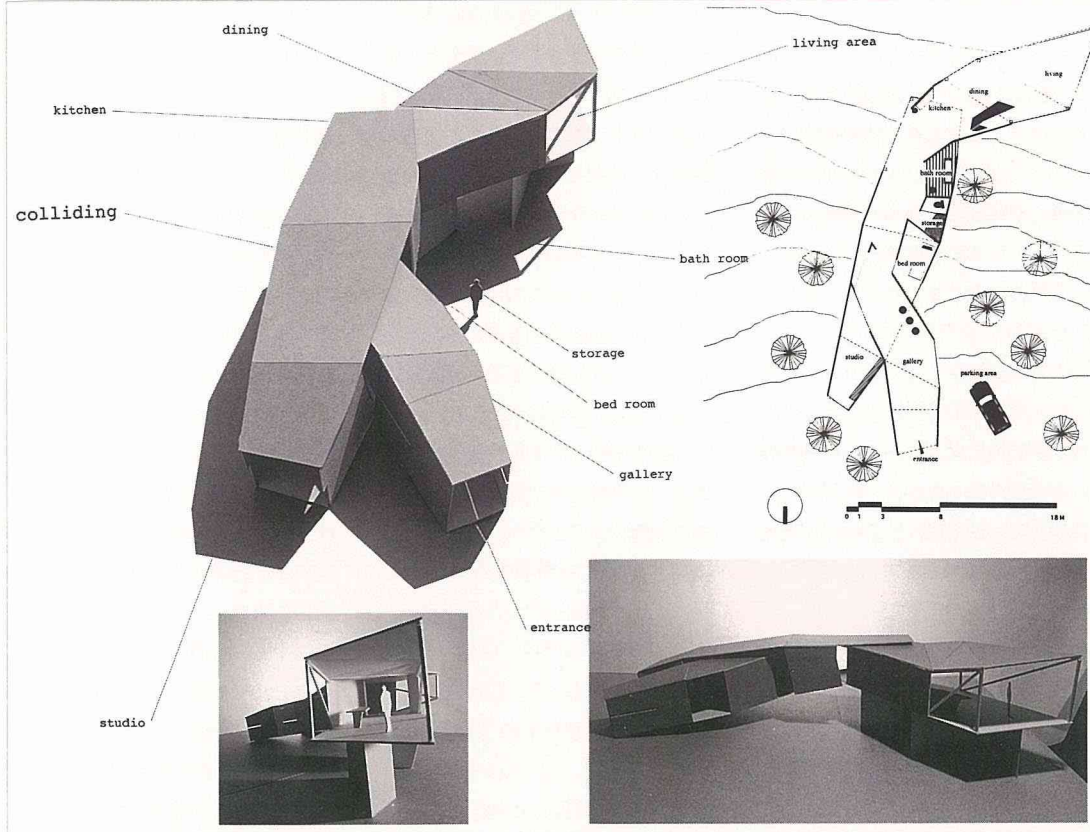
■優秀賞
久野靖広 坂本研究室4年
Yasuhiro Kuno



田中聖子 日本女子大学
Seiko Tanaka



柳博通 坂本研究室4年
Hiromichi Yanagi

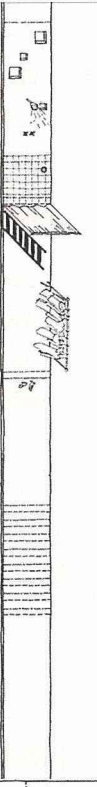
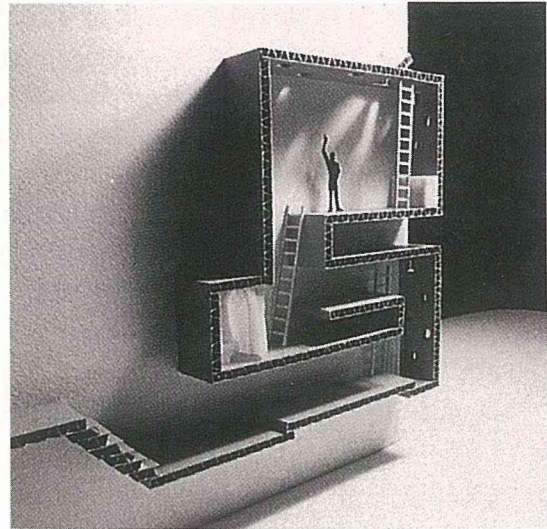
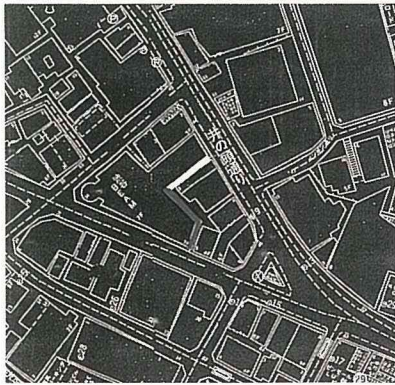


明晰であることを求める人間へ

■カミュは『シーシュポスの神話』において「不条理」の概念を「この世界が理性では割り切れず、しかも人間の奥底には明晰を求める死物狂いの願望があり、この両者が相対峙したままである状態」と説明している。カミュによると不条理はある行動とそれを超える世界、あるいは人間と世界のような？項の比較から生じ、人が「異邦人」となるのもこうした不条理のひとつの現れである。このような存在である異邦人にはどのような家が必要なのか。

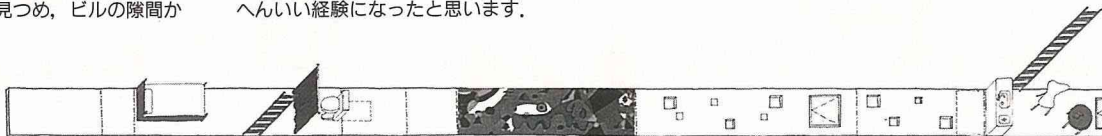
■この家では異なる価値をいったん受け入れながら対置的に衝突させる。人はそこで、生存の不条理性を不可避なものとして認め、知力によって自分の力を越える現実と格闘し、その中に生の意味をかちとろうとする。人間の奥底にある明晰への願望は決して満たされることはないが、かといって意識的反抗を放棄することは、問題の回避にすぎない。

■この家では3つのポリウムが衝突、重層、対立する。この「衝突」という操作によって作られた建築は、ただ対峙する空間を生みだす。ここでは、住み手は極限的な緊張、孤独な努力によって意識的であり続け、思考する中で自分の生の意味をかちとることができる。



■この作品はまったく時間が無い時期に2日間ほどで非常に集中して作り上げたものです。■私たちが考えた異邦人はごく普通にいる人びとです。現在の都市に棲む人びとは、少なからず制度というものに縛られて生きています。それがあからこの複雑な社会でスムーズに生きられるのかもしれませんが、この家はそういった人びとが本当の自分というものを見つめ、ビルの際間か

ら自分がさっきまでいた街を眺めることで氾濫する情報の中で自分が本当に必要としているものを再認識する場と考えました。またそれが都市の中で増殖していくというイメージも持っています。■われわれのプレゼンテーション不足から十分にそれを伝えることはできませんでしたが、多数の人びとの前で自分の考えを表明したことはたいへんいい経験になったと思います。



共用空間の創造

Creation of a Common Space

清田育男さん

Yasuo Seita

インタビューに先駆けて、先生の作品であるピラ・フレスカとピラ・セレーナを先生の案内で見学させていただいた。集合住宅であるこの2つの作品は、道路を挟んで並んで建っている。住戸単位の小さな箱をランダムに積み重ねたような外観は、2つ並んで特別な雰囲気を作りだしている。敷地の中央には4ヵ所のブロックに囲まれた吹き抜けがあり、階段やエレベーター、ブリッジがあり、変化のある共用空間を作りだしている。インタビューはピラ・フレスカの1階にあるアトリエで行われた。お話を伺う前に先生の作品と興味をもっていらっしゃるイタリアの集落のスライドを見せていただいた。お話だけでなく、作品やスライドなどを通して、先生の建築観に深く触れることができた。

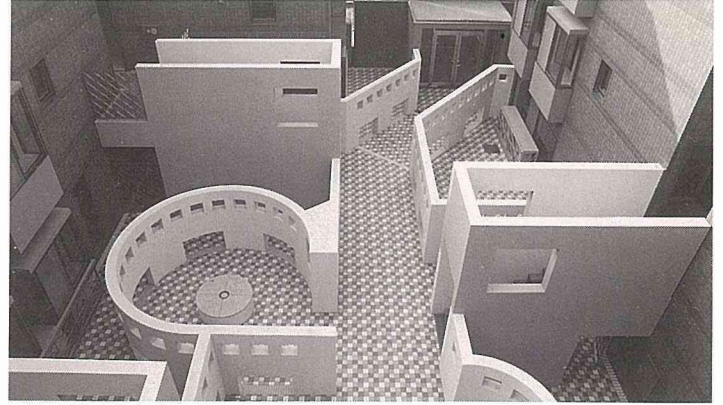
清田先生の学生時代のお話を聞かせてください。

研究室は清家研で、卒業が32年です。その頃というのは清家先生の住宅作品が最も個性的だったように思います。僕がちょうど学生の時に竣工したのが、「斉藤助教授の家」や「私の家」などで、清家先生の持ち味がでていた作品を発表していました。研究室にはその頃篠原さんや、今イタリアにいる高浜さん、林雅子さんたちがいて、夜になるとOBの人も

いろいろ集まってきて、アトリエ的な雰囲気がありました。清家先生からは改まってはあまり建築論的な話を伺った記憶はありませんが、作品を見たり雑誌などから、先生の言わんとしていることが伝わってきて、大変勉強になりました。

卒業後、坂倉事務所に勤められたわけですが、そこでのお仕事はいかがでしたか。

坂倉事務所では、いろいろな種類の仕事をやりましたが、いちばん印象に残っているのは、上野の西洋美術館です。コルビュジエの基本設計で、コルビュジエの弟子であった坂倉さんと前川さん、吉阪さんが日本でその実施設計の仕事を共同でやっていました。コルビュジエの原案を実施の図面に移す。入所して最初の仕事ということもあって、非常に印象に残っています。コルビュジエの生の図面が手元にあるというのは刺激的で、モデュロールを使って図面を作りました。アトリエ事務所だと、先生がスケッチしたものをもとに所員が実施の図面を作るというのが一般的でしょうが、坂倉準三さんの場合は、スケッチを描いて、所員に渡すということをして、僕の記憶ではあまりしませんでした。事務所の組織が、チーフがいて、スタッフがいて、という縦系列ではなくて、全部横にいてその中から仕事の内容と規模によ



▲都市型集合住宅「コートハウス八雲」

って担当が選ばれます。そして、坂倉さんのコンセプトやイメージが担当者に提示されて、それを担当者が自分なりに図面化して、坂倉さんと打ち合わせしながら作っていきます。担当者はできあがるまで、その仕事に一貫して関わるというやり方でした。結構、建物を創る楽しみをもちながら、鍛えられました。効率は悪いのかもしれないけれど、所員側にとっては勉強になるし、力がつきますね。いま思い出すと結構ためになったと思います。

そして坂倉事務所で集合住宅として最初に担当された作品が、ピラ・セレーナになるわけですね。

集合住宅を担当しろと言われたときには、これは建築作品にはならないな、と思いました。実はやな仕事だな、つまらないな、と直感的に思ったんですよ。

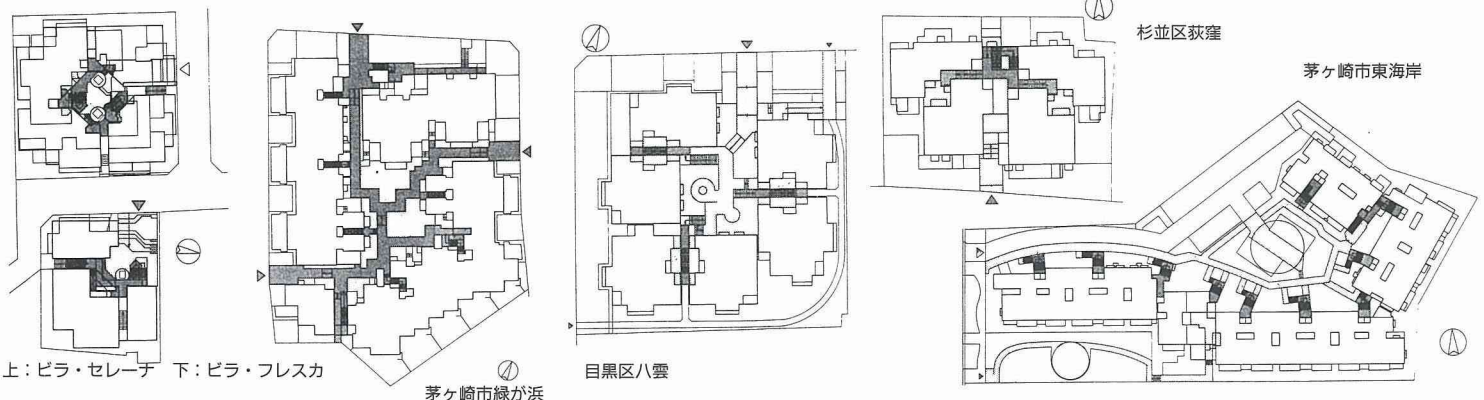
その頃、集合住宅はまだ建築家の領域ではなかったと思いますが、

そうですね。建築家が集合住宅をやった例というのは非常に少なかった。ほとんどなかったように思います。だからやだな、と思ったんでしょうね。でも、やるからにはテーマを決めないといけない。どうやってやったらいいのかなと一所懸命考えていたんです。一般的には建築というのは学校や病院など建物の用途で考えています。当然それはそうなんです

が、ちょっと見方を変えると、たとえば学校を考えてみれば、教室とか、職員室とか、学校建築の機能的な部分とそれ以外の生徒の溜まり場などの共用的な部分があります。この共用的な部分に着目して建築を作っていたらどうかと、その頃そういうふうには思っていたんです。街をみても広場と道の部分、家が建っている部分というように、個人の領域と公共の領域という分け方ができるわけです。共用の領域をどう作るかと考えると、何か建築が作れるんじゃないか、と思って作ったのが最初の集合住宅です。そのような見方をしていくと、建築はだいたいできるように思えてきて、それ以後は集合住宅以外でもそういうやり方で作ってきました。これが私のひとつの設計手法になってきています。

独立するきっかけはどういったことだったんでしょうか。

長く勤めると設計をやるというよりは、営業的なことや事務所運営のことなどの雑用がでてきます。若い頃は一所懸命自分でスケッチして、それを実施にしてという仕事が非常に楽しい。だけど若い人たちが育ってくれば、仕事の内容も設計以外のものに移ってきます。だからなるべく自分で建築をつくれる環境に、というのがやめた理由です。



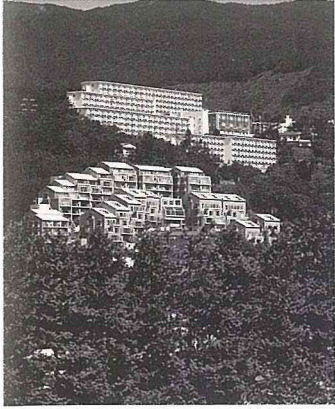
上：ピラ・セレーナ 下：ピラ・フレスカ

茅ヶ崎市緑が浜

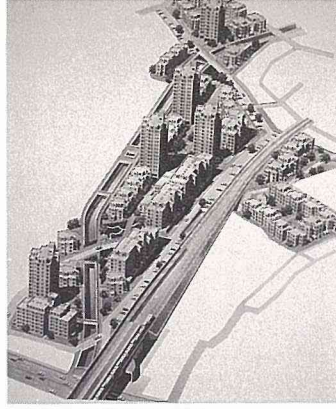
目黒区八雲

杉並区荻窪

茅ヶ崎市東海岸



▲斜面地集合住宅「ロイヤルビラ・熱海」



▲都営T団地建替基本計画



清田育男 Yasuo Seita

1933 神奈川県生まれ

1957 東京工業大学建築学科卒業

57～69 坂倉準三建築研究所

69～76 株式会社建築研究所 (74～76同所取締役)

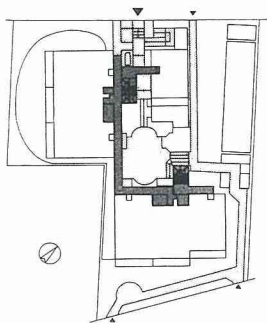
76～81 株式会社TRIAD建築設計事務所代表取締役

81～ 清田育男計画設計工房設立

工学院大学・神奈川大学・東京芸術大学・名古屋工業大学で非常勤講師。現在、東京理科大学非常勤講師。ピラ・セレーナ、ピラ・フレスカなどの都市型集合住宅やガーデン国立、ガーデン目黒などの都市型低層集合住宅を手掛ける。著書『都市型集合住宅』(井上書院)、『都市型低層集合住宅』刊行に向け作業中。

イタリアの集落などは住宅全体が地になっていて、敷地が図として入り込んでくるような作り方がされていると思います。清田先生の場合は、住宅が地になっていて、図として通路であるとか、共用の部分が入り込んでくる作り方なのでしょうか。それとも住棟の組み合わせが先にあって、その隙間みたいなところで共用部分を作っていくという作り方なのでしょうか。

最初の発想では、共用部分を図にしようと思いました。普通だと住宅部分を優先的に作って残りが外部になり、共用になるんでしょうけれど、そこを意識的に図にしよう。だから最初のスケッチの段階では、住宅の中の細部についてはほとんど考えていません。共用部・共用空間をどう作るかというところから始めているわけです。敷地のどこに、どのような形で共用をとろうかと考えます。残りが住宅です。それは僕の場合は割と一貫しています。ただ、これは高密度な都市型の手法と考えています。都市の中でも郊外で割と密度の低いところでは共用空間の作り方も当然違ってきます。そのつど、諸々の条件によって変えてはいるけれど、意識としては共用の方に着目しているというのが僕の作り方です。



江戸川区船堀

先生の作品の中で、都市型の集合住宅の場合は、街路や中庭空間、コモンスペースのようなものを住戸が囲っていて、外側から閉じて中を作っているような感じを受けたんですけども。

私の場合、囲んで作るという集合住宅はいくつかありますが、意識的に閉じたというわけではなくて、閉じていながらスリットで外とつなげる、街区と連続させようとする意識はあるわけです。閉じて完結するというふうには絞っているわけではないですね。街区から住戸へ導入する中間の空間という位置で考えています。

集合住宅の内部のコモンというよりは、集合住宅の住戸と外部をつなぐ中間領域のような位置づけなんでしょうか。

そうですね。領域の質としては、個人の領域と公共の領域の中間に位置しますが、空間の作り方としては、いろいろなケースによって違ってくるわけです。スケール、住戸密度、敷地の広さ、環境で違ってきます。あまりその辺は、こうでなければいけないというふうには決めてはいません。都心で作っているのは、空間のスケールもとりにくいので、コモンの性格は共用スペースとしての性格が主となりますが、郊外型であったり、規模が大きくなったりすると、コモンとしての性格がより強くなります。敷地規模が大きいものは、複数棟の集合になりますし、超高層住棟などに対しても、もっといろいろなパターンができないかなど、今そういうことを新しい作り方、考え方としてやっていきたいと考えています。

スライドを拝見させていただいて、その共用部分にかなり重点をおかれているように感じました。

最近やっているのは、公営で割と規

模が大きいものです。規模が大きくなれば、当然複数棟が建ちます。そこには複数棟が建つことによってできる場があるわけです。今、テーマとして重要視していることは、そういう場を、住環境を考える上で、どのように作るかということです。一戸建てだとテーマは住宅そのものにあるわけですが、ある程度規模が大きくなると、個々の棟も重要だけれど、その集合によって生まれる場が住棟によってつくられる外部空間が大切になってくるのです。建物を計画していながら、実は建物のない外部を考える、そういうところに興味を感じています。もちろん、場を作るためのスケール、プロポーシオンというのはあると思います。そのプロポーシオンというのは、場を作るためのもので、かっこいい建物を作るためのプロポーシオンではないということです。

最近のお仕事は公営のものが多いようですが、民間のものとか作り方に違いはありますか。

公営の場合は標準設計プランみたいなものがあるわけで、それは住宅を考える上ではかなりの制約です。そういう意味では制限されている部分はあります。ただ最近公営住宅においても意識が変わってきていますね。ただ効率だけを考えて住宅を作ろうという意識はなくなってきているように思います。公営というと、無駄のない、余裕のないというか、箱を積んだようなイメージにすぐつながってしまうけれど、そういう意識はなくなってきていると思います。いいものをどうやって効率よく作るか、という意識をもつようになってきているように思います。その辺は僕らも提案しやすくなりました。だから、いい提案があれば民間、公営

に関わらずそれは可能なわけです。こちら側がそういう提案をしていけば、当然実現化に向かうわけですから、そういう意味ではどっちが自由度があるということはいえません。しかし、やはり一般的に公営というのは、差をつけてはいけないということがあります。ここでは質のいいものを作り、ここでは普通でもいい、というような性格のものではないわけです。公営住宅というのは質的に一律であるということが求められます。広さや採光、天井の高さなど住宅の中の質の差をつけないというのが、一般的な考え方ですからね。そうするとみんな同じになってしまうということになるけれども、そうではなくて、やはり建てる場所が違うわけですから、場所場所によって個性、そこに違いをだします。住宅の性能的なことはなるべく統一しながらもね。だから僕が集合住宅を作るときにテーマとするのは、住宅の個の部分ではなくて、それはどうしても一般解にならざるを得ない。それは個ではない部分をどう作るかということです。その方にどうしても集合住宅のテーマが向くわけです。

最後に、今の学生にアドバイスをお願いします。

やはり建築に限らず、いろいろなものに興味をもつというのが大切だと思いますね。そういうことが将来、設計をする上で肥やしになるでしょうね。それと、今は僕たちの学生時代とだいぶ違う。ずいぶん情報も多い。自分から手を伸ばせばいろいろな作品が近くにあるわけだから、積極的にいろいろなことに参加することが大切でしょうね。そういった建築的な環境を自分で作って、周りにそういうものをたくさん用意しておくとういいます。

みんなリード・ギター

"Everybody Is a Lead Guitar"

「みかんぐみ」

Mikan

5人の出会いのきっかけは

竹内：3人は東工大出身（坂本研究室）。加茂さんは1年先輩で、僕と曾我部が同期。

タルディッツ：僕は東大の楨研にいて、坂本研とは学生の手伝いなどで関係があった。あと、知り合いのフランスの研究生が坂本研にいて、フランスの若い建築家のコンペを坂本研でやって発表した。それが最初の出会いだった。

熊倉：僕は竹内さんと仕事をしていて、そもそも出会ったのは6、7年前に『建築文化』のコラムを書くスタッフとして、月に一遍くらい会議やプライベートで会っていて、そのうち一緒にコンペをやりだし、実施の仕事も去年までやっていた。

竹：NHKのコンペをみんなでやるという話になって、たまたま事務所登録をしていなければならないという条件があった。また、個人では大手事務所のように多くの人数やお金がかけられず、時間も短かったのだから、みんなで集まってやればその辺が克服できるだろうということがひとつ。もうひとつは、各自の建築に対する考え方がいろいろな分野に散っていて、それをお互いに交換することで自分の建築観を形成するのに役立つんじゃないか、ということがあった。

グループの構成や各自の仕事のスタンスは

タ：リーダーはたくさんいるね、少なくとも5人だね。

曾我部：逆に言うとみんなリーダー。イニシアチブを誰も取ろうとしないからね、少なくとも一人がイニシアチブを取り続けているという状態はない。

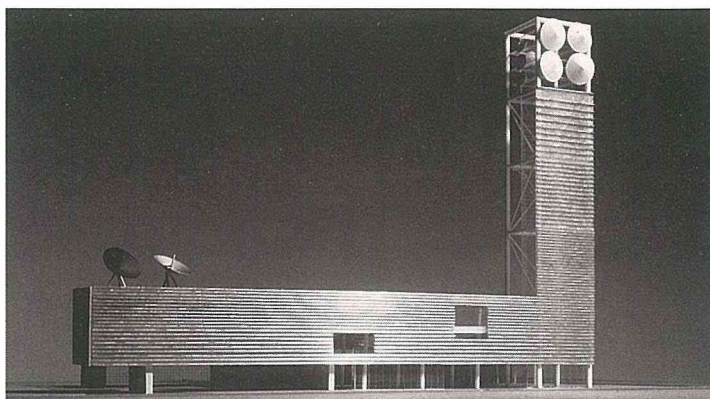
熊：取っても無駄だということをみんないちばんよく知ってる。

曾：全部共同でやってるわけではな

くて、ものによっては個人でやっている。セラヴィをやっていた2人は、以前からやっている住宅の仕事も今でもまだ続けているし、熊倉は今自分の家を設計している。

タ：熊さんはコンペも一人でやるのがある。^{*2}そういう個人の仕事も、場所は「みかんぐみ」と一緒に、ここでやっている。自分の事務所とみんなの事務所は、ベースは違うけれど両方動いている。

曾：建前上は、今とりあえず5人いるけど、5人が5人でなくてもいいというのものもある。個人でやったら個人の名前になるけども、2、3人一緒にやったら「みかんぐみ」としてだ



▲NHK長野放送会館

す。必ずしも5人全員一緒にやる必要もない。逆に増えて6人目がくる可能性もある。

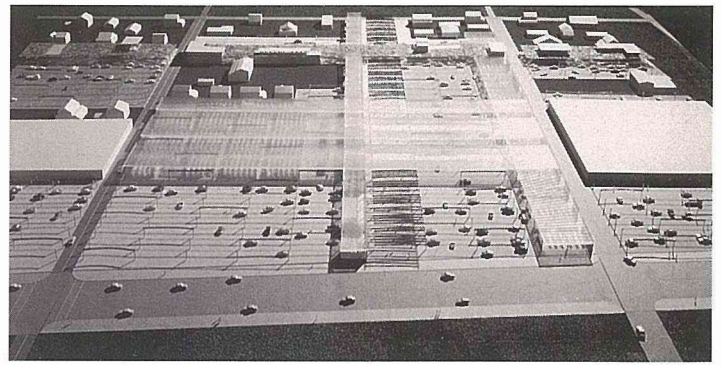
タ：たとえば仙台のコンペ^{*3}では「みかんぐみ」でだしているけども、実際は3人しかやってない。バリエーションはいくらでもある。

曾：将来、メンバーが出入りして、最初にやった5人のまったくはかり知れない組織が「みかんぐみ」になっているかもしれないよね。

タ：ロック・グループは名前は残しても、メンバーは替わってる。

竹：でもみんなリード・ギターなんだよね。で、ソロでやることもある。

話し合いの進め方は



▲八代ショッピングセンター

曾：コンピューターが全部ネットワークになってるんだけど、一人書いてメールで送ってというふうには、ひとつのデータをみんなでいじっていく。誰がどの発言をしたのかわからないんだけど、5人の中での応答という形で膨らんでいく。本人もだいたい言うのを忘れるから、誰か何言ってるか最後までわからない。

竹：「これ書いたのお前だろ」とか言っていると「俺じゃないよ」とか。曾：自分で言ったのに自分で答えるって場合もある。

竹：人数が一人多い！

加茂：昨日書いたのと違うことを次の時書いたり。

形態の決定について（プログラムとの関わり）

竹：形態をあまりいじってないよね。曾：形態そのものが5人のいちばん興味のあるところではないから、ただし関心がないわけではない。外形だけを趣味的に決めるというやり方はしてない。極端に何かを表現したいというふうにはやってないから、プログラムを解決してある図式を導きだして、図式そのものを平面構成に置き換えようってやり方もしてないんだよね。批評的な表現にはしてなくて、ただ「必要なことはなにか」をずーっと考えていって、いちばんいい解決方法は何かというのを選んでいく。プログラムに興味があるし、大切な扱い方をしてるんだけど、それがそのまま建築の表現になってるとは僕は思っていない。

タ：形態を決める段階で誰かの案になるということはない。それは何か月かのプロセスが少しずつたれた案と言える。一発で最初の日みんな持ってきて「じゃあこっちだ」というのなら、それは誰かの案と言えるけれども、長いプロセスの間にアイデアを混ぜたり、誰かがだしたアイデアを他の人がとって、もうちょっとアレンジをして……そういうプロセスされた意見、何かシンクタンクみたいなもの。そういった意見は最後に誰か（一人）の意見にならない。

曾：各人の案が5個並行してるというやり方ではない。5人いることで、どちらかというひとつのことを考えてる。一人の頭の中でもいろんなパターンを考えるけど、それに近い。タ：意見と言ってもいろいろあって、形に対するもの、プログラムに対するもの、パターンに対するもの、いくつかのレベルの意見がでてくるわけですね。その中で、わざわざ形そ

曾：5人集まって始めると、誰かがいないってことが結構ある。5人集まって打ち合わせするのは実は難しく、こういう形をたまにとる。

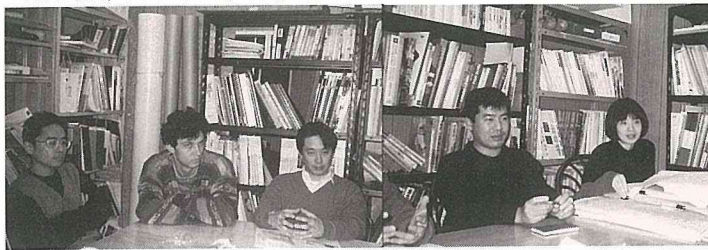
顔を合わせた話し合いで、意見の対立がでた時は

曾：もめるんだよね、やっぱり……。加：こわいくらい。

曾：大変なんだよ、それは。

竹：効率悪いよね、やっぱり。2、3人でやるのがいちばん早い。5人の意見が最初から同じ方向向かっていうのは、よっぽど偶然が重ならないとありえないから。

竹：話題は一応重なってるよ。でも、ものは決まらない。



いる」「限りなく発展する未完の組織」「魅力的な館」「トマト銀行」といった親しみやすいネーミング」「柔らかい塊」など、さまざまな解釈がある。決定には2週間ほ

どもめた模様。加茂紀和子：東工大大学院修士課程修了，坂本一成研究室（07）／久米設計勤務／セラヴィアソシエイツ設立（92）

みかんぐみ MIKAN
95年1月「NHK長野放送会館設計競技」当選。95年3月有限会社みかんぐみ一級建築士事務所設立。5人がイコールパートナーであることを基本理念として、全員による共同出資・共同代表で運営。基本的に合議制で全ての物事を決めていく。多数決ではなく、また全員一致の案でもひっくり返る。事務所は、二子玉川にある木造の旧トランス工場を改装。事務所環境は、8台のMacintoshをEthernetでつなぐ(*)1。製図台はない。グループの名称は、タルディッツ・加茂夫妻の娘さんが通っていた保育園のクラス名から採られた。意味としては「アップル・コンピューターにあやかって」「房がたくさん入ってひとつになって

のものを狙ってないけれども、少しずつ形もでてくる。

加：たとえば八代のプロジェクト*4なんて形態ないもんね。結果として全体を覆うシステムという形で模型をだしているんですよ。NHKの場合はL字型というのが結構強くて、非常に形態的な部分もありますよね。まああれも最終的にはその形でおさまっているけれども、もしかしたらそれもひとつの時間の断面であったかもしれない。

曾：あんまり美学的にこの形を完結させたいっていう意図は最初はなく、最後に中途半端な形になるよりは、単純な形にした方がいいんじゃないかというくらいのことで、これは逆に議論しなくても何となくみんな共通してもっちゃうんだよね。あんまり美学的な水準での議論はない。ドライなわけでもないけど、すごく意識してるんだけど、やっぱり言葉で議論しているからか、そっちの方にあんまり議論がいくことはない。夕：L字型はいろんな人を見ると、逆にはっきりした形態に見られるけど、形態を逃げたから、あんな単純明快なサインになってるとも言える。加：T字型では納得しなくてもL字型なら、という時もあったんじゃないかなという気がする。でっばったりするのか嫌だったんだよね。みんな、それは何となく5人とももっている。全然違っていて言いながら、どっかで共通するものも……あの時はもめなかったね。

■ めざしている建築像

曾：毎回でいいい一所懸命考えるだけで、何か際立った建築家的テイストみたいなものを表に立てて、それを一所懸命維持していくというやり方ではない。今、僕らの目の前にそういうことをやってる人はいっぱい

いるわけで、そのバリエーションをひとつ増やすことよりも、そういう人たちのいろんな視点というのは良く言えばわれわれの財産であるから、必要な視点を借用してきて使っても構わないし、それを延長して新しい視点をもってても構わない。そこでまた新しいオリジナルなひとつのものをつくるよりも、われわれは、今まであるいろんなやり方や考え方をベースにして、一つひとつの状態に合わせて毎回考えなきゃいけないことをピックアップして発明していく。常に一定したものは多分ないと思う。そうすることによって得られる何かって言うと、「必要な条



▲「せんだいメディアテーク」応募案・佳作入選

件を全てきちんと取り扱うこと」がある。何がそこで求められているかを最初から丁寧に考えていく——ということはみんな共通してるはず。何かひとつの方向で硬直化するのって嫌じゃない。だから手法としての方向は定めない。

■ 学生へのメッセージ

熊：学生の時、他の大学にいる人たちはどういうふうにやってるんだろうとか興味があったから、なるべく自分の環境にどっぷり漬からないようにしていた。逆にそうなるまでには他の人よりずっと長く研究室にいたから、かえってそう思ったのかもしれないけど、ある程度自分の今や

らなきゃいけないことをしっかりとやったら、よそにも目を向けてみるのがいいんじゃないかと思った。もともと竹内さんと一緒に仕事やろうと思ったのも、自分の学校以外の人たちと何かやってみたいと思ったから。とりえず学部や修士の頃まではとにかく与えられたことを一所懸命やる、そしてある程度やったらもうそこから抜ける、というのがいいんじゃないでしょうか。

曾：東工大に去年1年間いて思ったけど、われわれの頃と比べて外部とのつながりが少ないよね。どうしても自己完結してる。今たぶん世の中は、自分のオリジナルの世界だけで全て

が作られるって方向には少なくともいってないし、その限界も十分みえちゃってるから、そういう意味ではもう少し拡がりをもたせやすい状態を自分で作った方がいい。少なくとも君たちにとってわれわれというのは10年も前の世代なわけだから、そこであった可能性をもう一回繰り返す必要はないんで、自分たちが今可能ないちばんいい方法というのを考えだした方がいいと思う。

加：とにかく仕事をし始めちゃったりすると、建築も仕事になってしまうわけで、もちろん建築を考えてる時間は非常に楽しいんだけど、半面食べていかなきゃいけないというの

熊倉洋介：都立大大学院博士課程修了，小林弘充研究室（93）／熊倉洋介建築設計事務所設立
曾我部昌史：東工大大学院修士課程修了，坂本一成研究室（88）／伊東豊雄建築設計事務所勤務／東工大園紀彦研究室助手（94）／ソガバアトリエ設立（94）
竹内昌義：東工大大学院修士課程修了，坂本一成研究室（89）／ワークステーション勤務／竹内昌義アトリエ設立（91）
マニユエル・タルディッツ：パリ国立建築学校（ユニテ・ペタゴジックNo.1）卒業（84）／東大大学院修士課程修了（88）／横文彦研究室（88）／セラヴィアソシエイツ設立（92）

が前提でしょ。だからやっぱり学生の時期が羨ましいってというのは、そういう時間があるってことですよ。いろんなところに首を突っ込むというのが、できる限りの可能性を上げることなんじゃないかなっていうのがあるし、あとは半面、研究室の研究にどっぷり漬かるってのもそれはそれですごくいいと思う。結局、将来建築をずっとやるのかどうかわからない時期で、極端な方向でどっちもいけると。私の考えでは、やっぱり一生こういう職業でやっていくのかなって思ったら、いろんなところに首を突っ込んで、いろんな人と会ってみるのが、学生時代の時間を使うための方法だと思いますね。夕：他の人のアイデアを聞いて、少しずつネットワークを作ると、結構豊かなアイデアとかグループのまとめ方ができる。「みかんぐみ」はそういう塊としてはいい例。何となく個人ですと少し狭くなるんじゃないかと思えますね。柔らかい塊、みかんの柔らかさみたいなもので、学生のレベルでも、他の人のアイデアを聞く必要がある。そうして豊かな意見がでてくるかなと思いますね。まあ、頑張ってくださいということですね。竹：まじめに答えようかなー（笑）。共同でやるっていうことの最初は学生時代だったんじゃないかな。研究室単位でなくても、とにかく共同で何かやることはいい。卒業制作は実力のある後輩に手伝ってもらうのが成功への第一歩。学部のとき思いっきり遊んでもいいから、大学院になると一所懸命やらなきゃヤバイ。

*1「みかんぐみ」のCAD利用に関しては雑誌『パドマ』1995 vol.4に詳しい。
*2八代市のバス停コンペ、最優秀賞受賞。
*3せんだいメディアテークデザインコンペ
*4八代ジョビングセンター「GAJAPAN 17」

Absolutely Different?

ペーター・ベドナー

Peter Bedner



仙田研究室・博士課程2年
ドイツ出身
ミュンヘン工科大学大学院修了

ミュンヘン工科大を卒業する前だったが、一度日本に滞在していたことがある。私は、京都に象徴されるような寺社や庭園などの歴史的な建築ばかりでなく、東京という都市にたいへん刺激を受けた。それは私にとって、独特の文化と言語をもったアジアの国に触れる初の機会であり、その時私は、もっとこの国についてよく知りたい、必ず再び日本に帰って来ようと思ったのだ。

あまり知られていないようだが、私は建築家ではなく、ランドスケープと都市計画の専門家である。日本での私の興味の中心は、都市の隠れた領域、インタラクティブな公共空間、特にそれが混在するときの空間の関連性などにある。日本人の感性や要求を理解するためには日本の伝統と慣習を理解する必要があり、またそれが私が研究テーマとして江戸東京の歴史を選んだ理由である。

西欧の都市には多くの整備された公園や広場、広々とした通りがあり、実際人びとは散歩やカフェで一息、はたまたピクニックなどと実に頻繁にこれらを利用する。日本人には、この類の楽しみの習慣がみられない。しかし歴史的にはよく似た伝統をもっていたと考えられる面はある。たとえば神輿の出る祭りのような、西欧で言えばストリートフェスティバルとも呼べるものや、公衆の面前での刑罰がその例だが、そのような「イベント」が直接の都市計画の要因になっていたとは考えにくい。私は研究に際して歴史的な要素を実地調査によって収集し、浮世絵、屏風絵などを分析することにより、この都市での生活を描きだした

いと思っている。また、私の大学がある都市ミュンヘンと比較考察を行い、最終的には東京という都市に対して、あるいは日本の一般都市に対して計画的な提案を行いたいと思う。

東京は決して日本の一般的な都市とは言えない。そこには明らかに西洋建築からの多大な影響があり過ぎるほどにあり、それが人びとの行動にも影響を与えている。人びとは今後これまでにない、新しいタイプのオープンスペースを必要とするだろう。しかし私のねらいはそれをデザインすることにはない。私は、東京がこれからいかにオープンスペースを新たに創り出し、あるいは以前からの空間を活かして、それらを未来に遺せるかという可能性と機会を明らかにしたいと考えている。今日でも、西欧人は日本人よりもプライベートのためや家族や友人のために時間をつかう。しかし将来的には日本でもこの傾向は強まり、両者の差は小さくなっていくと思われる。もしそれに対応する空間を提供できなければ、東京は新たな問題を抱えるだろう。ショッピングモールや映画館だけでは解決にはなり得ない。

とにかく日本に来てから1年が経った。やるべきことはたくさんある。私はこれまで私を助けてくれた、学生の皆に感謝している。外国での研究はたやすいものではないが、そうはいつでも大変楽しいものである。ドイツの教育システムは日本とは大きく違い、私立大学は数えるほどしかなく、国公立大でも予算不足のために海外から客員教授や講師を招くことは困難になっている。私の大学では学生が基金を組織し、企業から資金を集めて海外から建築家や芸術家を招いていた。また日本では、修士の学生は研究室に所属し多くの場合個人の机が与えられる。ドイツでは研究テーマにより指導教官を一人選択するが、研究室に所属するという形式はとらなかった。

ところでドイツを離れて私が心から懐かしく思うものがある。それは大好きなジャーマンランチではない。トレペを小脇に抱え素早いスケッチを描いてくれる人が東工大ではお目にかかれぬことである。(訳：永田恵子)

日米建築教育の違い

The Influence of Architectural Education A. and J.

大島・ケン・正

Tadashi Ken Ooshima



八木研究室・博士課程1年
アメリカ出身
カリフォルニア州立大学
バークレー校大学院修了

建築の教育は建築家の数だけ異なっています。アメリカの東海岸ではハーバード大学の学部生として、日本の東京工業大学では研究生として、そしてカリフォルニア州立大学バークレー校では西海岸の考え方を修士学生として、3つの大学で建築の教育を受けてみて、各大学の共通点よりもむしろ特色の方が私には強く感じられました。同じ大学の中でさえも、一般化して考えることは難しいことであります。しかし、この驚くべき多様性のおかげで、私はどの課程でも非常に面白い経験を受けることとなりました。

私はハーバード大学の学部生の時に初めて建築の教育を受け、そこでブロード・リベラル・アート課程を専攻しました。私は日本の建築にとっても興味をもっていました。それは東アジア研究と視覚的および環境的な研究に関わる広くて学際的な専攻でした。

実際、ハーバード大学には学部生に対する特定の建築の専門分野はありません。多くのハーバード大学の学部生は修士課程に進学するので、建築やビジネス、法律、機械といった学部生のための専門分野はないのです。むしろ建築は、絵画、ドローイング、映像制作、彫刻を含み、また、カーペンター・センターと呼ばれるコルビュジエ設計の建物にある、視覚的および環境的な研究分野に含まれます。教育の信念は、特定の専門的能力よりも一般的な美術に関する基礎的な考え方を身につけることです。そして、他の関連した題材を学ぶことはその人自身の勉強——この場合は建築——を豊かにするという考え方にに基づき、このプログラムが作られていました。さらに、イェール大学の建築の修士学生が私に次のように話してくれました。「もしもあなたが建築家になりたいと思うのなら、学部生の時に何か違うこと(彼の学部での専攻は天文学でしたが)を学び、そして大学院で建築を勉強した方がいい」と。

この広くて学際的な専攻のおかげで日本の経済史や、絵画から現代美術の歴史まで、すべてを学び、これらの題材全部を一緒に扱い、

2年生優等学位論文で日本の戦後における住宅建築を分析しました。この論文のおかげで学部卒業後に文部省研究生として日本の東京工業大学で研究することとなりました。

東京工業大学では、実際の授業以外で多くの建築の教育が行われていることに驚きました。中でも多くの学生たちが設計事務所アルバイトをしていたり、コンペに熱心に応募したり、先輩たちの論文を手伝っていたりしていました。アメリカとは対照的に、授業時間外の時間が教育の中心を占めていることを知りました。また、アメリカの建築の学生は非常に個人的で、時として競争的な場合もあるので、お互いに教えたり、教わったりする東工大生の協力的関係に非常に感銘を受けました。しかしながら、東工大では建築は工学の一部でなので、ハーバード大学に比べて技術的な性格をもつように思いました。

東京工業大学での2年間の研究を終え、カリフォルニア州立大学バークレー校で建築の専門教育を修了するために私はアメリカに戻りました。バークレーは西海岸にあるので、東海岸よりも過ごしやすい気候で、学校としても地域としても新しいため、建築も自由な雰囲気があります。

バークレー校の建築教育は、環境デザインのカレッジで行われています。そこには建築、ランドスケープ、都市計画が含まれます。これら3学科はきわめて近接しているため、学科間同士の交流によって想像力を豊かにしています。たとえば、多くの建築のスタジオは都市計画やランドスケープの問題に対して重きをおいています。事実、この3分野は同じ基礎的なデザイン哲学によって不可欠に結びついているという信念に基づき、この学校が創立されたのです。

しかし、このデザイン哲学は教授陣の間では根本的に多様です。デザインに非常に興味をもつ教授もいれば、いっぽうではホームレスや障害者といった社会的問題により関心をもつ教授もいます。さらには、クリストファー・アレクサンダーといった、建築がデザインされてから建てられるまで全体の移り変わりに興味をもつ教授もいます。

結果的に、学生たちは数多くの異なった建築デザインを学ぶこととなります。研究室単位に学生が所属している東京工業大学とは違い、バークレー校の学生は学期ごとに異なったスタジオで異なった教授のもとで学びます。また、論文で建築の研究に専念する学生もいれば、通年単位のデザイン・プロジェクトのテーマに取り組む学生もいます。

これらの3校を経験し、建築の異なった形態を生みだすものは、その人が受けた建築教育によるのだと信じるにいたりしました。われわれの教育には、真に無限の可能性にいたる扉が開かれています。コンピューターの革命や情報分野の技術と同様、全世界経済における沈滞によって、建築分野の職業のもつ性格は急速に変わってきています。建築はもはや単なるドローイングのアートではなく、きわめて多くの技術と結びついています。建築教育は、したがって、未だイメージされていない何かをデザインするための準備なのです。

(訳：加用雅信)

環境づくり

Environmental Design

朴 俊錫

Park Jun Seok



藤井研究室・博士課程2年
韓国出身
漢陽大学大学院修了

日本に留学してからすでに1年という時間がたった。今あらためて考えてみると、初めての外国での生活からくる緊張感には慣れてきたが、当初文化的な違いがそんなにはないだろうと思っていたのに対して、毎日の生活の中で出会ったことに驚かされることも多く、新鮮な経験が続いている。「日本」との出会い、母国で大学院に進学した時に、室内空気質に関する日本との共同研究を始めたことであるが、この研究が日本への留学の動機の一つでもあり、現在の研究テーマにもつながっている。

韓国では工業化と経済成長一辺倒の政策がある面ではかなりの効果をあげたが、それにとともなうさまざまな問題も当然あった。その中で最も大きな問題は自然破壊であり、ソウルを中心に各都市にある工場、各種の産業施設などからの化石燃料の使用による大気汚染と光化学スモッグも含まれる。このことは室内の環境にも影響を及ぼした。経済成長により高層ビルが次々に建設されたが、そのビルに導入される空気は汚染されており、さらに、省エネルギーのために導入外気量を削減したため、ビル内の人びとの室内空気質に対する不満または健康への影響が問題となってきた。現在の韓国では快適で健康な室内環境をつくるのが重要な課題となっており、多くの研究者が研究を進めている。

東工大での留学生活では、研究室の学生たちと一緒に「健康な室内環境づくり」を目指し

て研究を進めている。漢陽大学では学部4年時には卒業設計だけで論文は修士論文しか経験がないが、東工大では学部生から研究に取り組んでおり、自分自身を奮奮させるに十分な彼らの意気込みが感じられる。留学という言葉が学問を修めるだけではなく、もっと広い意味で文化・精神・人びとの理解などを含むのであれば、快適な空気環境をつくるための研究とともに、人との環境づくりも進めたい。

日本で

In Japan……

エーメン・アイサ・アブドラール・アライム

Abdelalim Aymen Eissa



青木研究室・研究員
エジプト出身
アシュート大学大学院修了
現：講師

外国に住む人が他の国のことについて書くとき、自国の文化と他国の文化を比較して書くのが一般的だ。しかし、ことエジプトと日本に関しては（私がみてきたように）、2つの国の間に何かしらのつながりがある、と感じとることができるであろう。そのつながりは、あたたかい気持ち、外国人を歓迎する心の中にあり、特に日本人は、素敵な笑顔の中にみることができる。

日本に来たとき、私には重大な問題があった……。どうやって日本は先進国となったのか？日本での2年間で、正しいかどうかは分からないまでも、私はこの問題に対する答えをみつけた。私がみたところ、日本が発展するわけは大きく3つある。1つは規律のシステムである。大きな大学を管理するかのように小さな店を管理する、そんなすべての物事を管理できる完璧なシステムをみることができる。2つめは、日本人はグループの一員として仕事を進めていくということだ。もちろんそのグループはシステムの一部となっている。これは日本の発展の、注目すべき大変重要な理由である。3つめは、日本人は非常によく働くということだ。ふつう、人は家庭で自分の生活を送る。しかし日本人は仕事の中に彼らの生活があるのだ。

以上の3つのことは、いかなる国が発展していく上でも重要になると思う。日本人には、人を助けるという大変すばらしい心がある。街なかでさえも道徳心から態度をただし、身勝手といわれる人でさえ、親切にしてくれる。それは私がみた日本の素敵な一面であり、私はもっと見て知ってみたい。

新しい環境建築：太陽エネルギーからサステナビリティへ

New Environmental Architecture: Solar to Sustainability

デイビッド・ミラー

David E. Miller

ここでは同タイトルの大学院の講義で示した、いくつかの論考について展開する。環境のためのデザインというテーマは、設計プロセスの問題を検討する私の数多い講義の中のひとつである。講義を要約すると、大きなスケールの概念レベルから小さなスケールのディテールまで、建築のデザイン・プロセスの連続性を扱っているのである。

建築家や建築の教育者は、概念的イメージの創造、デザインの展開、そしてそれらを支えるコンセプトの背後にある基本的な行動を、区別して考えることがしばしばみられる。しかし実際、大切なディテールの発明というものは、建築の基本コンセプトと等しく重要な設計プロセスの行為であり、われわれはこのことを、建築の設計教育に際して認識する必要がある。

加えて、デザイン・プロセスは、パッシブ・ソーラー、アクティブ・ソーラー、サステナブル・デザインといった環境問題に対する関心も含むべきである。サステナブル・デザインとは、エネルギーの効率と運用を改善し、環境の悪化を少なくし、組織と人びと、たとえば従業員と顧客のニーズに対応するといった、統計化された基本的な手法である。それは建築設計や建設と、その活用・運営という、長期にわたる密接な関連に焦点をあてたプロジェクトの計画に基づいている。

サステナブル・デザインの目的は、より長い時間いることのできる場所、生活したり働いたりするのにより快適で、環境に対して配慮された場を創造することなのである。

●
建築家は設計を行う中で、絶え間ない改善と学習を通して、環境的な長所を得ようと努力しなけ

ればならない。ここに建築家の使命のひとつとして、「環境宣言 (Environmental Mission Statement)」を掲げ、主な設計の目標を3つ列挙してみる。

1. 設計や建築などが行われてゆく間の影響を最小にすることによって得られる環境的な利益。
2. 長期の運営費を減らすために、効果的な解決案を定めることによって得られる経済的な利益。
3. プロジェクトの公開説明や教育機会を通して、公共性への自覚やコミュニティへの親しみを増すことによって得られる社会の利益。

建築家はプロジェクトを魅力的にした上で、クライアントが抱える開発の問題に対し、この3つの目標を満足させるようなサステナブルで統合的なアプローチを与える計画をつくりだしていかなければならないと考える。

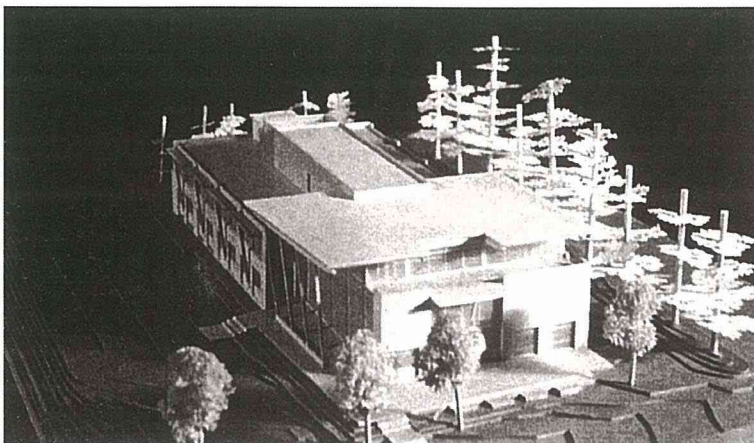
次に環境計画のためのデザインと関連している問題を概説する。この環境計画は以下の3つの局面をもっている。

- I. 評価 問題の分野は、地球レベルでの汚染・地域相互間の影響・エネルギーや資源の使用、屋内環境がおおまかに規定される。そしてこの評価は、設計の優先順位と性能 (パフォーマンス) についての規準を設定している。
- II. 規準 性能についての目標は、上記の種類の問題に対応して設定される。
- III. 設計 汚染の制御やエネルギー・資源の効率において設定された目標を達成するための設計。以下はさまざまな部門において設定された、目標を達成するためにプロジェクトの中で扱われた典型的な問題である。

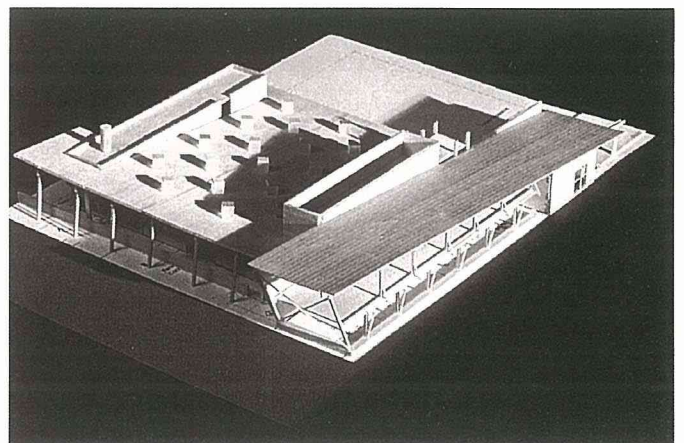
- ①太陽や風のエネルギー、自然の採光・遮光、排水など、敷地内にある資源を生かして利用するための計画。
- ②家具の取り付けから建物の建設にいたるまで、局所的あるいは世界的影響を少なくするための有効な資源の使い方。
- ③設計から破壊、あるいは再利用までの建物のライフサイクルを考慮した、随所でのエネルギー浪費や材料浪費の最小化。
- ④エネルギー効率を考えた建物の殻 (外壁) の設計。
- ⑤屋内環境の質の高さ、特に空気の新浄化を達成するための材料の使い方や設計計画。
- ⑥居住者の健康安全と生産性を最大にするための設計。
- ⑦無駄の削減やリサイクルをサポートする操作とメンテナンス・システム。
- ⑧単一の輸送機関の使用を最小にするロケーションとシステムの計画。たとえばもっとも適したかたちの従業員の交替や顧客輸送を行う。
- ⑨有限資源としての「水」の管理。

この計画を通して産業社会における「最良の実践」が、規準を設定することによって見極められる。そして各々の問題によって、適切な技術が選択されるのである。建物のサステナビリティを改善してゆくための鍵は、統合的な思考に専念することである。

上記に概説した問題を解決するためには、目標はクライアントと共に考えられる。このプロセスは各々の問題と目標との統合を定義し、理解するための相互依存と試みを認め合う。このことは計画がプロジェクトの制約範囲内において、達成可



▲NW連邦政府の信用金庫とオフィス本部



▲環境サービスの事務局

能であるということを保証することになる。統合化されたアプローチによってのみ、そのプロジェクトの環境的・経済的あるいはコミュニティ問題の解決が実現されるのである。

以下のプロジェクトは私の事務所で行った、環境のためのサスティナブル・デザインへのアプローチ例である。これらのプロジェクトは多様な規模と複雑さを有しているが、問題解決へのアプローチは一貫している。各々のプロジェクトは、生活し、働くためのよりよい場を与えているいっぽうで、経済的な方法で環境への影響を最小にする試みを行っている。

[NW連邦政府の信用金庫支店とオフィス本部]

NW Federal Credit Union Branch & Office Head - quarters Seattle,WA

採光や眺望のために、南北の開口部を最適な大きさにしながら、現在ある樹木のほとんどが伐採されることのないような敷地計画と編成になっている。この建物の平面は南北方向に短く、東西方向に延びていて、北側と南側にある大きな曇りガラスと光棚が、日光の量を最大にしている。東西面のファサードはガラスの部分小さくして、低い角度からの眩しい日光と熱を減少させている。

照明装置はセンサーによって明るさが調節され、日照利用によるエネルギーの節約を最大にするようにした。またこの建物は、エネルギー使用を効率的に行う機械と自然の換気を併用することによって、30%ほどエネルギー付加が減少することが期待されており、この数値は厳しいワシントン州のエネルギー基準を下回っているのである。機械と自然の換気を組み合わせたこのシステムは、夜

間に大量の外気を循環させ、昼間増加した屋内の汚染空気の質を改善し、さらに日光にさらされた建物の熱を冷やしているのである。

材料の選択はすべて、エネルギー問題や屋内外双方の構成要素に対して熟慮されている。

[環境サービスの事務局]

Bureau of Environmental Services Portland,OR

敷地はポートランドの隣、セント・ジョンズにあるウィラメット川に隣接した場所にある。デザイン・プロセスは、初期の段階から地域的なコミュニティや近隣の問題を含んでいた。このプロセスでは、敷地と建物のデザインの決定に際して、数多くの知識を得ることができたのである。

広さが約7.6エーカーの敷地は、隣のセント・ジョンズから流れてくる嵐のときの激流を処理してくれる湿地帯を有している。このことにより、高価な構築物の下部構造や水処理が不要となっている。嵐のときの激流は敷地内で処理され、そして遊水池からウィラメット川に流される。湿地帯の広大なエリアは、景観にも取り入れられている。

この建物は研究所とオフィス、多目的コミュニティスペースをもっており、積極的に日光を取り入れる設計となっている。研究所は主として北側の広いガラス面と陸屋根の部分に分散配置されたハイサイドライトによって、明るさを確保している。そしてそのガラス面はセント・ジョンズ橋の全景を映し出しているのである。オフィス部分は狭いが南北方向に長いので、3方向の大きな曇りガラスがバランスのとれた採光を実現し、ウィラメット川の眺めを提供し、そして眩しさと熱の増加を抑制している。手狭な平面は、窓を通して

デイビッド・ミラー
David E.Miller



1944 アメリカ合衆国生まれ
1968 ワシントン州立大学建築学科卒業
1972 イリノイ大学建築学科修士課程修了
1985-89 ワシントン大学建築学科非常勤講師
1990- ワシントン大学建築学科助教授
1990- The Miller/Hull Partnership(建築設計事務所)主宰

建物を冷やすための自然換気の利用をも容易にしている。

このプロジェクトは、さまざまな用途をもつハイテクノロジーの施設が、どのように環境に対し、よりいっそうサスティナブルになることができるのか、というよい例を示していると考えられる。

[マーシー邸]

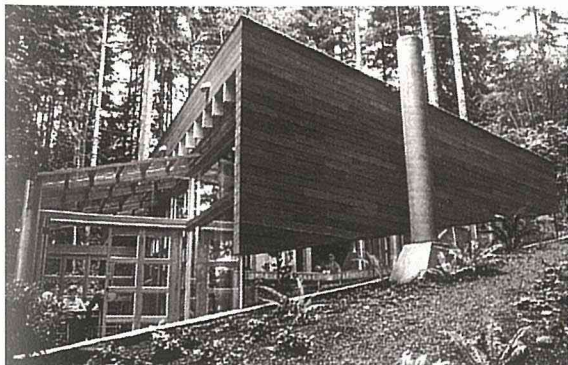
Mercy Residence Carnation,WA

この邸宅は生長したダグラスモミとヒマラヤスギで深く覆われたマルセル湖に隣接する場所にある。屋根の90%と外壁の60%は大地に覆われていて、環境に対する影響をできる限り小さくしているのである。

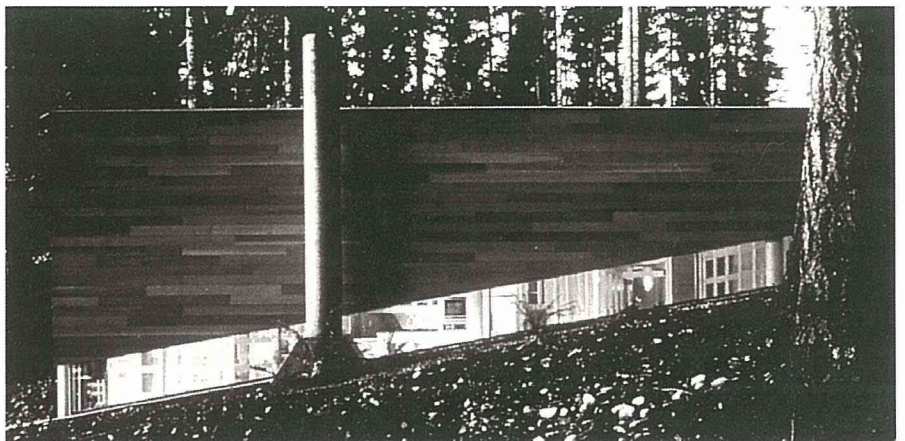
地面を再び緑化するこの計画は、大地が高い絶縁体として利用され、さらには地熱を利用した熱供給のための効果的な設計となっている。その結果、ヒートポンプと暖炉を併用する冬の数ヶ月以外、暖房と冷房はほとんどパッシブで行うことができる。

日光は3面のファサードから取り入れるほか、天窓や東側にある空間によっても補われている。そしてこの温室自体もまたパッシブな暖房を住居へ供給している。

(訳：中村孝)



▲マーシー邸



▲マーシー邸

ルイス・カーン巡礼

The Architecture of Louis I. Kahn: A Pilgrimage

志水英樹

Hideki Shimizu

昨年の7月、L.I.カーンとF.L.ライトの作品をめぐる巡礼の旅に出かけた。猛暑の中の18日間に11回飛行機の乗り降りをするというハードなスケジュールではあったが、私の頭の中は妙にさえわたり、常に快い緊張感と期待感とに満たされていた。ライトの作品については、そのすべては既に体験したものであり、また別の機会にゆずるとして、私の師匠であるカーンの作品について、特に今回初めて訪れることのできた2つの作品について書いてみたい。

出発前、同行の学生諸君に「いちばん期待している作品」を聞いてみたところ、その半数が落水荘、さらにその半数がキンベル美術館といった割合で、ライトに対する期待が優勢であることがわかった。シカゴから入って、ライトの作品もほぼ見終わって、特に落水荘の期待にまさるすばらしさに、皆一様に感激した後、フィラデルフィアに入って、カーンの初期の作品リチャード生物学研究所やプリンモア学生寮を訪れた。ライトの豊熟の世界に酔いしれた後だけに、カーンの初期の、肩に力が入ったいささか生硬な作品に、学生たちも旅の疲れがどっとでた、という感じが否めなかった。完成当時の鮮明な印象を憶えている私にも、その後の25年の歳月によって、作品とユーザーとの間が必ずしも幸福ではない状況に失望したものである。

家族生活の本質がみえる住宅:フィッシャー邸
その疲れが一挙に吹き飛んだのが、その翌日フィ

ッシャー邸を訪れたときである。フィラデルフィアの高級な住宅地ジャーマンタウンの一角を占めるすばらしい敷地に、深い夏の木立の中にひっそりと、3つの立方体が寄り添っている(写真①)。これらの立方体は、フロリダ産のスプルースで、その洗いたての白木の肌が輝いていた。それまで見てきたライトの作品の自信に満ちた自在な空間構成やその形態に比べて、誠にひっそりと、やや不安げな表情が印象的である。

2つの立方体が45度の角度で接合され、ひとつには居間と食堂、他のひとつには諸寝室がおさめられているという単純な構成であるが、その45度の構成が内部空間に対してどのような効果をもたらすのか、写真ではうかがうことのできない効果がどのようなものであるのか。そのひとつの立方体に、ごくさりげなく開けられた玄関部から足を踏み入れると、正面に大きなガラス窓があり、反対側の深い緑に囲まれた広い庭に貫通する。と同時に、左手前方45度の接合部から居間の空間に直立する石造りの暖炉が飛び込んでくる(写真②)。そしてその奥に、あの写真で見慣れた奥行きのある窓の構造が控えている。これらの2~3秒間がこの住宅を体験するもっともドラマチックな瞬間である。この窓は単なる窓というよりは、そこにひとつの空間をもって自立している。と同時に、ベンチを含んだ家具でもある。しかし、そのベンチは、日本の床の間のように、居間空間全体を支配しながら、しかも、そこに人が座ることができ

る。床の間に人が座るような違和感はない。吹き抜けの立方体の中の一隅が、まさに宇宙の中心であるかのような、静謐な存在感に満たされている(写真③)。まさに、「住宅」がそこにある。

ドラマはさらに続く。暖炉を廻って、食堂から台所にいたると、そこに不思議な窓がある。窓の中央部に何のためかわからないが、奥行きのあるボックスがはめ込まれている。鳥が喜んで巣でも作りそうな場所ではあるが、その気配もない。しかし、そこには通常の窓とは異なって、窓自体がひとつの独自の空間をもっているような感覚である(写真④)。カーンがかつて「窓にはアニマルが住んでいる」と言った、そのアニマルとはこのことであろうか。

20世紀の代表的な「住宅」といわれる2つの作品、コルビュジエのサボア邸とライトの落水荘を見るとき、その空間は、週末ごとに繰り広げられる大金持ちの華やかなパーティーのための華麗な舞台装置としてであり、家族が真の家族生活を過ごすためのインティメイトな雰囲気はみえてこない。しかし、このフィッシャー邸はまさに「家族」のための日常的な生活がその本質としてみえてくる「住宅」である。

Dr.フィッシャーは夏休みの最中で、2つの旅行の間の3日間だけ帰宅されているときに、まさに飛び込みの私たちに対して快く自宅を開放していただいた。彼が、この自宅をいかに愛して住んでおられるかがひしひしと感じとられて、今回の旅行では最大の幸運であり、長い道のりをかけた努力が1日にして報われた思いであった。われわれ一行が内部を見学させてもらっている間、そっと邪魔にならぬようにとの気配りからか、庭先のプールのそばで草むしりをしていた奥さんにお礼を述べた際、私がカーンの事務所に行った当時、エクセターの図書館を担当したことを告げると、彼女は小さな声で「あの建物は、私のこの家の次に好きな建物ですよ」と言って、片目をつぶって



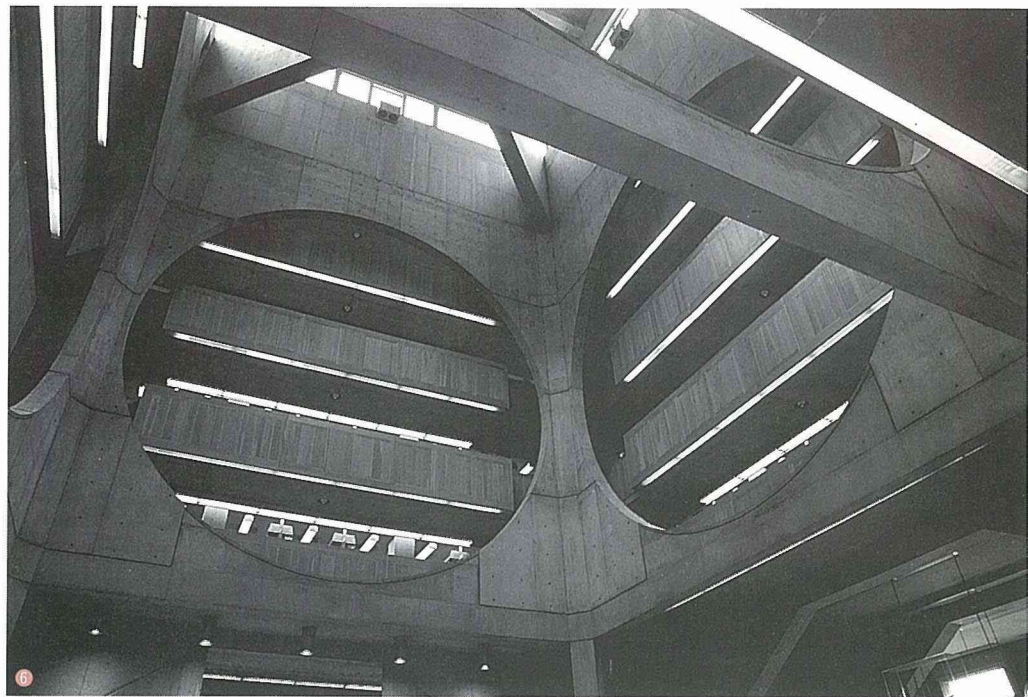
れた。また、別れ際にフィッシャー氏は、「この住宅のために5万ドルの建設費と5千ドルの設計料と7年の歳月がかかったが、今にして思えばこれらは、まさにほんの一粒のピーナッツだったよ」と言って、彼もまた片目をつぶってくれた。

さて、いよいよバスに乗り込む直前に、同行者のひとりが叫んでくれた「先生、これで落水荘もジョンソンワックスも吹っ飛びました」。

壮大なスケール感と親密感:エクセター図書館

フィラデルフィアをでて、ニューヨーク、ニューヘブンを経てボストンに入る。ここで当然、ライトのグッゲンハイムやカーンのイエール大学の2つのミュージアムに触れるべきだが、ここでは割愛して、ボストン郊外のエクセター図書館に飛びたい。この図書館は、私がカーンの事務所に勤務した3年間の最後の1年間担当した作品だけに、その初訪問はかなり緊張した。しかし、バスが現地に着いてキャンパスの中に降り立ったとき、暗い曇り空の中にたえずむその建物は、もう何回も見てきた建物のような表情をみせて、私の前にあった(写真⑦)。緊張はいっぺんに解けて、あたかも勝手知ったる建物に入るような気さで、例の見えない玄関に入って行った。

バロック風の階段の1段目に足をかけた瞬間、頭上からコンクリートに穿たれた、大きな円形の開口部が襲いかかってくる(写真⑧)。この瞬間、20数年前、断面図の中に最初の円弧をできうる限り大きく、コンパスを一回転させたときのあの感触を思い出した。構造的にその四隅にはある程度の太さの柱を必要とするはずであるが、そのことに委細かまわず、開口部があたかも無限に大きくありたいと想うその感覚をどのように表現しようと思ったかが、その時まざまざと思い出された。それは後に四隅の柱部をダイアゴナルな方向をもつ壁柱として、その見付を最少にして実現すると共に、頂部におけるスカイライトの取り方にまで



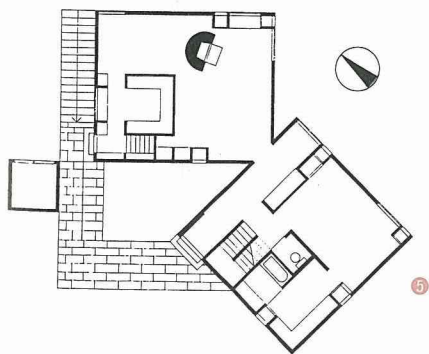
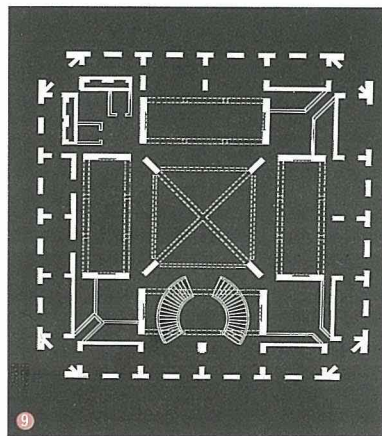
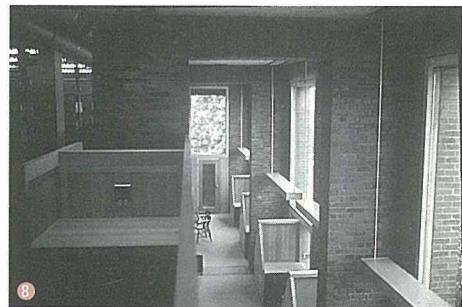
延長するという方法によって、見事に解決された。その結果が、今、目の前にあった。背筋がぶるっと震えて立ちすくんだ。この一瞬のために、今回の巡礼があったと言ってもいい。

ボストンからエクセターに向かうバスの中で、20数年昔を思い出していた。事務所のワークショップに1ヶ月近くも閉じこもって、この図書館の木製の模型を作り、ボストンまで飛行機で運び、ボストンからさらにレンタカーを借りて、このエクセターへの道をひとりでドライブしていた時を。連日のハードワークの末のひとり旅で、しかも借りた車がとてつもなく大きいアメ車で、それが舟のように揺れるので、当然強烈な睡魔が襲ってくる。ふっと気がついたときには、大きなロータリーにさしかかっていて、あわてて全力で踏んだパワーブレーキの音の大きさとその効きの良さ。しかし、後部に積んであった、わが模型がバリッと音がしてどこか壊れたらしい。それでも無事に着いて修理をして、いよいよプレゼンテーション。ほぼ正方形のプランの一面をそと取り除いて、中央の吹き抜けの部分を見せると、委員の中から「ウォー」と声が響いて、続いて拍手の音が聞こえてきたことなどなど。

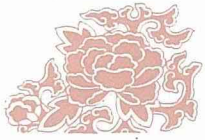
この中央の吹き抜けホールには、4つの大きな円形の開口部があたかも宇宙の4つの神々が対話しているような、壮大なスケール感とヒューマンな親密感がある。そして、その向こうにかいまみるいく層もの書棚が、われわれを歓迎してくれる。

カーンにとって「建築」は、にぎやかな操作の対象としてあるのではなく、静謐な「祈り」の対象としてある。その「祈り」は特定の神や宗教に対する祈りではなく、「建築」というひとつの「概念」に対する「祈り」であり「捧げもの」である。

今回の旅で、英国美術館も良かったし、キンベル美術館も良かった。しかし、この2つの作品が、とりわけ私の魂をゆさぶってくれた。

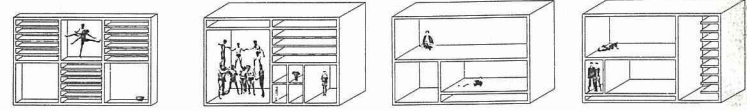
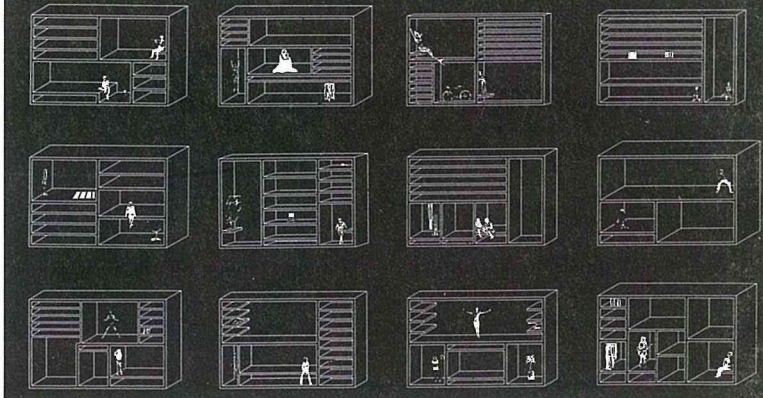


- ① フィッシャー邸・外観
- ② フィッシャー邸・内部
- ③ フィッシャー邸・内部
- ④ フィッシャー邸・内部
- ⑤ フィッシャー邸・1階平面図
- ⑥ エクセター図書館・ホール
- ⑦ エクセター図書館・外観
- ⑧ エクセター図書館・閲覧スペース
- ⑨ エクセター図書館・平面図

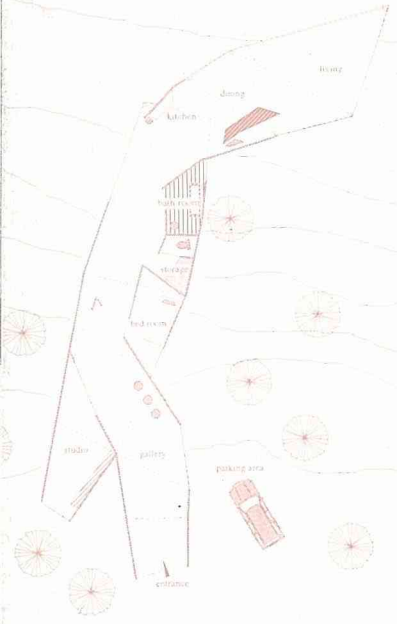


Ka No.11 1996
 design journal of
 the department of architecture
 and building engineering
 Tokyo Institute of Technology
 published by TIT society
 of architectural design education

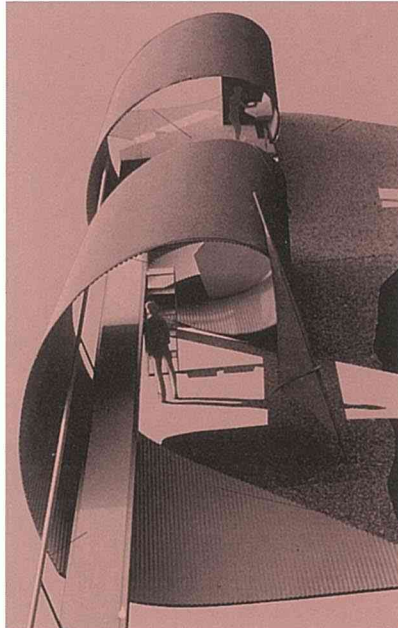
編集：東京工業大学工学部建築学科 華編集委員会
 委員長/仙田満 委員/八木幸二 堀田久人 三上貴正 奥山信一 團紀彦
 事務局/佐久間治
 発行：TIT建築設計教育研究会 林昌二
 定価：800円



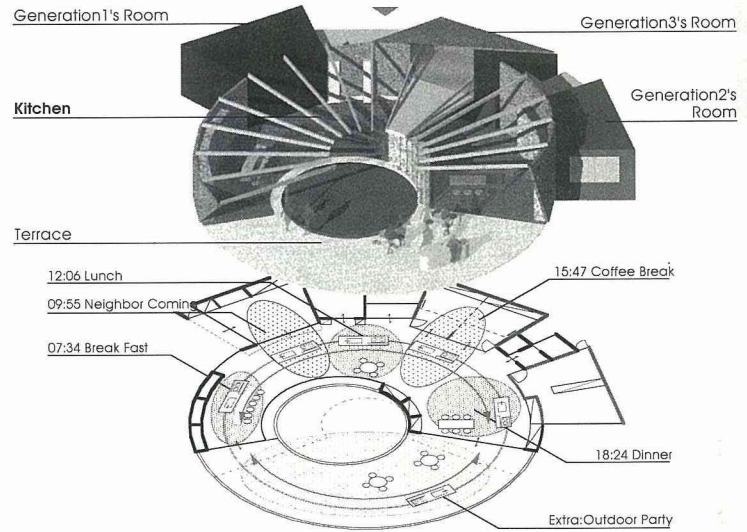
単一性/複合性：太田啓介・芝田義治・中鉢朋子



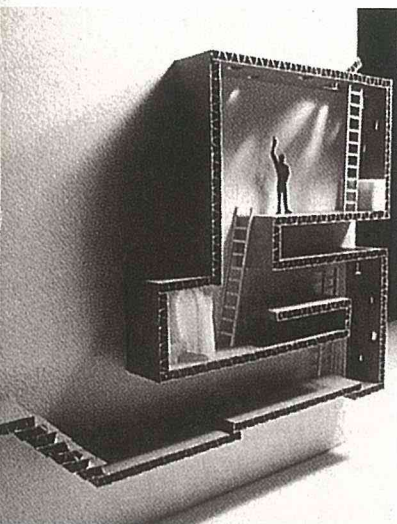
異邦人の家：梅野圭介



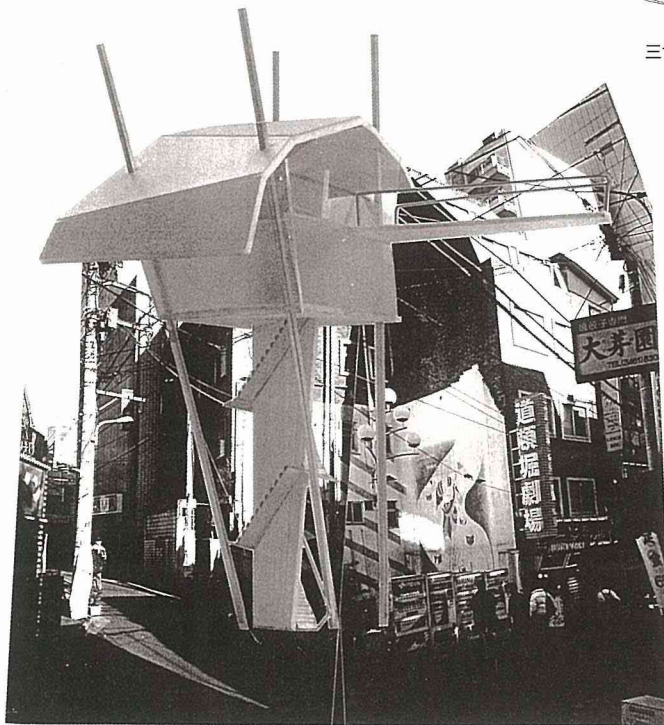
大切な人に贈る小さな小さな家：梅野圭介・中鉢朋子



三世代家族をつなぐキッチン：藤井正喜



異邦人の家：久野靖広・田中聖子・柳博通



異邦人の家：安森亮雄

訂正のお願い

P. 16の大空間建築 只野康夫氏の講評の部分に誤植があります。お詫びし訂正させていただきます。

誤

正

P. 16 左段 7行目

このスパンで → このスパンと

P. 16 右段 3行目

十分であり → 不十分であり